

Memorial Book for the 70th Anniversary of the Atomic Bombing

長崎から発信するヒバクシャ医療 国際協力の歩み

座談会

被爆70周年とナシム



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 (NASHIM)

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical care

平成27年12月 / DECEMBER.2015

CONTENTS

発刊のご挨拶	1
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 会長 蒔本 恭	
1. 座談会「被爆70周年とナシム」	2
2. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の概要	39
3. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会23年の歩み	44
4. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の活動状況	50
(1) 受入・派遣事業について	50
・研修生の受入状況	52
・専門医師等の派遣状況	70
(2) 在外被爆者 渡日治療事業	76
(3) 普及啓発事業	79
(4) 出版事業	82
(5) 永井隆平和記念・長崎賞	84
(6) 支援委員会補助事業	89
5. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の受賞歴・関係資料	91
6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 記録写真	95

発刊のご挨拶

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

会長 蒔本 恭



今年、広島、長崎は被爆70周年を迎えました。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（ナシム）が在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者等の救済を目的として、平成4年（1992年）に設立され23年が経ちました。

この間、ナシムはチェルノブイリ・カザフスタン関係国からの医師受入研修を毎年実施し、ヒバクシャ医療に携わる人材を育成してまいりました。その数は本年度で142名となりました。

またこれまでに発刊した医学教科書はチェルノブイリ原発事故で大きな被害を受けられた周辺国の医科大学や病院で、医療従事者の貴重な教材として活用されています。

さらに、故永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療の向上、発展に貢献のあった方を広く顕彰するため、平成7年より開始しました「永井隆平和記念・長崎賞」は既に10回で12名の受賞者を数えます。

平成23年（2011年）3月に発生した福島第一原発事故に際しては、放射能に対する社会不安が生じたことから、東京においてナシム主催のシンポジウムを開催し、また、放射線と健康についてわかりやすい言葉でまとめた解説書を福島の皆さんに配布するなど、放射線への正しい理解を促すための啓発活動にも積極的に取り組んでまいりました。

このたび、「被爆70周年とナシム」と題しまして座談会を開催し、ナシムの23年間を振り返り、今後のナシムの活動について提言をいただいたものをここに上梓いたしました。

ナシムはいただいた提言を活かし、これからも、長崎大学、長崎県・市医師会、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所など各構成団体と連携をとりまして、世界の放射線ヒバクシャ支援のため努力を傾注してまいります。

ナシムに対しご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様に改めて深く感謝申し上げますと共に、今後一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年12月

ナシム座談会「被爆70周年とナシム」

第1部 ナシムの成り立ちとこれまでの活動実績

第2部 ナシムのこれからの活動と課題



日時	平成27年7月30日(木)午後1時半開始		
場所	ホテルニュー長崎 3階 白鳥の間		
参加者	長瀧重信先生	(公財)放射線影響協会理事長	長崎大学名誉教授
	槇 洽子先生	(公財)笹川記念保健協力財団顧問	
	朝長万左男先生	日赤長崎原爆病院名誉院長	長崎大学名誉教授
	関根一郎先生	長崎県赤十字血液センター顧問	長崎大学名誉教授
	蒔本恭先生	ナシム現会長	
	井石哲哉先生	ナシム前会長	
	山下俊一先生	長崎大学理事 副学長	
	永山雄二先生	長崎大学 原爆後障害医療研究所所長	
	高村昇先生	長崎大学 原爆後障害医療研究所教授	ファシリテーター
司会	林田直美先生	長崎大学 原爆後障害医療研究所教授	

(司会) 只今から「被爆70周年とナシム」と題しまして座談会を始めさせていただきます。私は司会を務めさせていただきます長崎大学原爆後障害医療研究所の林田と申します。どうぞよろしく願いいたします。本日の座談会にはナシムの蒔本会長、井石元会長を初めこれまでのナシムの活動を支えて頂きました山下教授、永山教授、笹川記念保健協力財団より槇顧問、それから放射線影響協会・長瀧理事長、朝長先生、関根先生にご参加いただいております。参加いただいた皆様には後ほど自己紹介と共にそれぞれのご活動についてご紹介いただきます。また、本日は長崎大学原爆後障害医療研究所教授の高村昇先生にファシリテーターをお願いしております。それでは先ず開会に先立ちまして主催者側よりナシムの蒔本会長がご挨拶を申し上げます。

= 開会あいさつ =

(蒔本先生) 一言ご挨拶申し上げます。

「70年間は草木も生えない」というこの言葉は原子爆弾研究参画者の一人が、「原爆の脅威にさらされた地域は70年間放射能が消えないと実験で示された」と述べたことに端を発しています。この言葉は直ぐ取り消されましたが、私達に放射線の恐ろしさを強く印象付けたものでした。

今年、広島、長崎は被爆70周年を迎えます。長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)が在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者等の救済を目的として、1992年に設立されて23年が経ちました。この間、チェルノブイリ・カザフスタン関係国からの医師受入研修を毎年実施し、多くの人材を育成してまいりました。またこれまでに発刊した医学教科書はチェルノブイリ原発事故で大きな

被害を受けられた周辺国の医科大学や病院で、医療従事者の貴重な教材として活用されています。

さらには、故永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療の向上・発展に貢献のあった方を広く顕彰する「永井隆平和記念・長崎賞」は既に10回の授賞を数えております。

また、東日本大震災に伴う福島第一原発事故に際しては、放射能に対する社会不安が生じたことから、東京においてシンポジウムを開催するなど、放射能への正しい理解を促すための啓発活動にも積極的に取り組んでまいりました。

当協力は、これからも、長崎県、長崎市、長崎大学、長崎県・市医師会、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所など各構成団体と連携をとりまして、世界の放射線ヒバクシャ支援のため努力を傾注してまいりたいと思っております。

本日は、「被爆70周年とナシム」と題しまして座談会を開催し、当協力会に対しご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様にお集まりいただきしております。

限られた時間ではありますが、まず、皆様の活動を紹介いただき、これまでのナシムとの関わりや今後のナシムへの期待など、お話いただければ幸いと思っております。簡単ではございますが、開会の挨拶といたします。どうぞよろしく願いいたします。

(司会) 蒔本先生ありがとうございます。続きまして、長崎大学原爆後障害医療研究所所長でありナシムの運営委員でもあります永山先生よりご挨拶申し上げます。

(永山先生) 皆様こんにちは、ただいまご紹介いただきました長崎大学原爆後障害医療研究所所長を仰せつかっております永山です。

本日はナシム座談会「被爆70周年とナシム」にご出席いただきまして誠にありがとうございます。只今蒔本会長からお話がありましたように、原爆被爆70周年の今年にはナシム設立から23年目になります。因みに3年前のナシム設立20周年の記念事業は私ども原研の創設50周年と共催させて頂きましたので、原研は今年創設53年目ということになります。私は今原研の所長として開会の挨拶を仰せつかっておりますけれども、実は私は原研に来てまだ11年半で、ナシムとの付き合いと申しますか、ナシムでの活動は今日

ご出席されている中でも恐らく最も短い一人ではないかと思っております。

23年前は1992年になりますけれども、丁度私がアメリカの留学から帰ってきた年です。当時まさか将来原研で仕事するなんて全く思っていなかった頃です。留学中に1990年位から今日ご出席の当時第一内科の長瀧先生を中心に、チェルノブイリの原発事故の調査が開始されたこととか、今日槇様にご参加頂いておりますけれども、その調査に関して笹川記念保健協力財団側から多大な援助をいただいているという事を、いわゆる風の便りで、アメリカで聞いていた事を思い出します。ネットなど無い時代ですので本当に風の便りでした。また1990年はおそらく山下先生が原研の教授になられた年ではないかと思っております。このような国際レベルでの原研の活動を含めてナシムの設立に結びついたということで推測しておりますけれども、実はナシムの設立等私は詳細なきさつは知りません。ぜひ今日勉強させて頂きたいと思ってやってきた次第です。

因みに私は帰国後第一内科に戻ったのですが、臨床が嫌で3年ほど第一内科にいましたけれども、その後なんとか薬理学の当時の教授丹羽先生に拾っていただいて薬理学教室に移り、9年過ごして縁があって11年半前に原研にやってきたという次第です。ということで私は基礎の研究者です。原研での歴史も浅いということも加えて、今までナシムの活動に大きく貢献したかと言うと正直そうでもないんじゃないかと思っております。今日の座談会は前半ナシムの成り立ちとこれまでと、それから後半ナシムのこれからの活動と課題、この二つのセクションから成っておりますので、改めて前半でナシムの歴史、活動について勉強させていただき、後半で原研としてあるいは私個人として今後出来ること、やるべきことを考えさせていただきたいと思っておりますので本日はよろしくお願い致します。以上です。



(司会) 永山先生ありがとうございました。それでは早速座談会に移らせていただきます。まず始めに、お手元にお配りいたしました本日の資料の確認をさせていただきます。本日の次第、参加者リストと共に資料を配布させていただいております。これまでのナシムの活動を記録しました「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 20 年誌」、緑の冊子になります。そして 2007 年と 2009 年に発行されました「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」という本が 2 冊ございます。また「21 世紀のヒバクシャ」という本もお配りいたしております。以上を参考資料としてお使いいただければと思います。また長瀧先生に頂戴いたしました座談会の資料もお配りいたしております。

又、本日の座談会ですが二部構成となっております。まず前半を被爆 70 周年を節目として世界各地の被ばく地における皆様の活動をご紹介しますと共に、ナシムの設立からこれまでの活動について振り返ってお話いただきたいと思っております。また後半はナシムのこれからの活動と課題について忌憚なくお話いただければと思います。

本日時間が長くなっておりますので、途中で休憩時間を設けたいと思っております。なお、本日の座談会の内容は公開ではございませんが音声で記録させていただいております。後日、編集しまして冊子として情報公開させていただく予定です。それでは座談会第 1 部を開催いたします。それでは高村先生よろしくお願いたします。

＝座談会第 1 部

(ナシムの成り立ちとこれまでの活動実績) 開始＝(高村先生) よろしくお願いたします。長崎大学原爆後障害医療研究所の高村です。本日ファシリテーターという事を仰せつかりまして、この面々の方々のファシリテーターというのは非常に荷が重いのですが、しかも非常に長時間ということで大変ですが、よろしくお願いたします。先ほど永山先生の方から話がありましたけれど、実は私が長崎大学医学部を卒業したのが 1993 年の 3 月であります。そして 1993 年の 4 月に現在の第一内科に入局させていただいた、まさに平成 5 年ということになります。その後、大学院に入りまして、山下先生のもとでお世話になった訳ですけど、その後半位からナシムの研修事業に携わってきたという記憶がございます。丁度私が覚えて

いますのは私が大学院で最初に研修を担当した時に初めてカザフからの研修生を受け入れたというのを良く覚えております。ですから、いちばん最初の設立の経緯は実は私

も良く存じ上げておりません。そういったことも含めて私も勉強させていただきたいと思っております。

初めに、ナシムの成り立ちとここまでの活動実績ということで、本日ご出席の皆様方にお話を伺っていきたく思います。大きな流れの中で、最初に設立の経緯ということで長瀧先生にお話頂いて、その後、山下先生に、特にチェルノブイリからの研修生の受け入れの経緯ということについても含めて話していただきます。その後、楨様の方に、笹川記念保健協力財団のこれまでの取り組みとナシムで窓口調整等でも一緒に研修生を受け入れてきましたが、そういったナシムとの関わりも含めてご紹介いただければと思います。

その後、前会長の井石先生の方には、ナシムの会長をお引き受け頂いてからの、ナシムとしての活動について、特に井石先生はカザフスタン、ウクライナ、ベラルーシと、色々な所に実際に足を運んでいただきましたので、そういったときの印象も含めてご紹介いただければと思います。その後、今言いましたカザフスタンについては関根先生にも非常に何回も足を運んでいただいて、現地の医療支援に携わっていただきましたので是非ご紹介いただければと思います。

その後、朝長先生の方にはナシムの活動もそうですけども、特に在韓被爆者支援を含めて非常にご尽力をいただいておりますのでそういったものも含めてお話いただければと思っています。

最後になって申し訳ありませんけど、藤本先生の方には、その後、ナシムの会長としてウクライナへ行っていただいたり、今度カザフスタンの方に行っていたといたように、現地へも足を運んでいただいておりますので、現在のチェルノブイリの状況そしてナシムの活動を含めてご紹介いただければと思います。

それでは初めに、長瀧先生の方からぜひチェルノブ



イリ初期の頃の医療支援からナシム設立の経緯といったところまでについてご紹介いただきたいと思います。長瀧先生よろしく願いいたします。

(長瀧先生) せっかくお呼びいただきましたのでなるべく意味のあるお話が出来るようにと思って資料を事務局の方に沢山送らせていただきました。最初にナシムができる前のことはご紹介の挨拶にもありましたように、ご存じの方が少ないように思いますので、1992年までの長崎大学の活動、正確には私が関係しました第一内科の活動の状況とナシムが創設された状況をお話します。特にナシム設立直前の1990 - 1992年は外務省の問題もありまして正確な記録が少なく、新聞記事、その他自分の写真の記録まで含めて日ソ専門家会議の10年目の報告書の時に作成したものです。この時代を長崎を中心としてチェルノブイリに関する世界の動きを比較的詳しくご紹介して責めを果たしたいと思います。

前半の内容のご説明では、設立からこれまでの活動について振り返ってということもありましたので、そちらの方は原爆或いは福島に関係した委員会の経験を基にして、ナシムのヒバクシャ、HICARE（放射線被曝者医療国際協力推進協議会）のRadiation-exposedという言葉と被曝者、Atomic Bomb Suffererとの関係について時間内にお話したいと思います。

20周年の時の講演は既に非常に詳しく議事録として書いていただいているのですが、図が無いものだから

わかりにくいところがあります。今日はスライドの図表を使いながら、平成25年の2月9日のシンポジウムで話したことの一部を拡張してお話しします。図1は講演のタイトルで、「長崎を世界に」という立場でお話しました。図2のように私の在職は原研50年の中で17年目から34年目までの17年間、またナシムは創設から5年間が在職期間です。ナシムの創設当時のお話をさせていただく所以です。長崎大学第一内科を退官するときにお話ししたのですが、第一内科の現役時代に大学の研究は「地域特異性」ということが大切で、原爆はその最たるものである。原爆の調査に力を入れるべきであると真剣に調査（図3）をしているうちにチェルノブイリの原発事故が起こり、その翌年長崎で核医学会を開催することになり、会長として、国際シンポジウムの「放射線と甲状腺」を行うことにしました。当時の講演タイトルを図4に示します。学会はチェルノブイリ事故の翌年でありましたけど、チェルノブイリからの情報は非常に少ししかなかったと記憶しています。図4のように原爆被曝者の甲状腺疾患、ビキニ原水爆実験、チェルノブイリ原発事故、世界の動物の甲状腺ヨウ素-131、バセドウ病のヨウ素-131治療を企画しました。理事会では被爆地での最初のアイソトープを使用する核医学会と心配される方もおられましたが、実際には非常に地域で真剣に興味を持っていただきまして記者会見もありましたし、NHKを通じてETVの全国放送で45分間放送していただきました（図5）。その次の図6の赤い表紙がそ

図 1

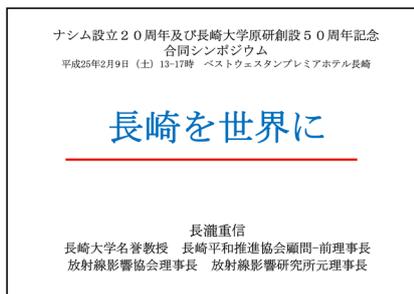


図 2



図 3

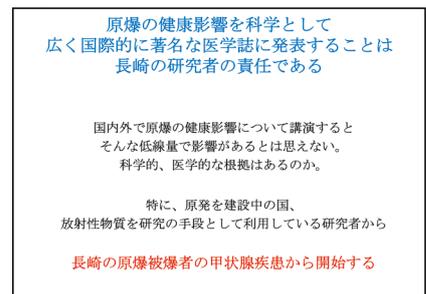


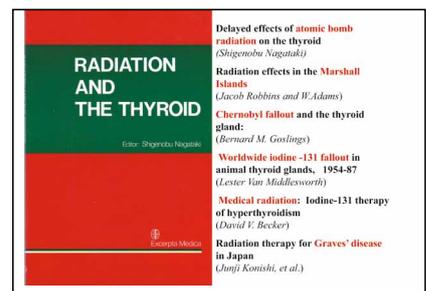
図 4



図 5



図 6



の後できた英文のプロシーディングズであります。このプロシーディングスがきっかけとなりまして、重松先生が笹川記念健康保健協力財団からチェルノブイリ調査の相談をお受けになった時に長崎大学にも話がありまして、1990年8月に最初の調査に参加しました。1990年から91年の日本の報道を図7にしめます。この頃は福島の前と同じでして、大変だ、大変だという記事がいっぱい出ております。最初に申し上げました当時の協力事業は図8に細かい字で書いてありますけど、ナシムができる前の1990年から91年だけで、私あるいは長崎を中心として見た場合にWHO、IAEA、外務省、笹川とそれぞれ色を変えてありますが、これだけ多くの協力事業がありました。大変忙しい思いをしました。最初に日ソ放射線これは外務省が主催、それから8月に笹川財団これは後で申し上げますけれども、それからシュワルナゼ外相が来日して共同コミュニケが出来ましたり、旅博がこの時期に行われ、ソ連から多数の方が来られました。

それから今度はWHOで、広島で会議をしたり、ソ連のチェルノゴフで諮問会議をやったり、特にWHOに関しましては今後のプログラムがこの時代に作られました。モスクワ郊外の国立公園の中の素晴らしい山荘での会議で私には非常に懐かしい思い出になっています。1991年も同じように色々あって、ゴルバチョフ大統領も長崎まで来られました。笹川プロジェクトは後でお話しますが、その次の図9に赤と黒で書いてありますけども笹川記念保健財団の調査メンバーが

赤い字で書いてあります。1から10が外務省、そして日ソ会合のメンバーでありますけど、半分以上だぶっています。日本のこういう方達はその当時のソ連のチェルノブイリ原発事故の健康問題に対応しておられました。笹川プロジェクトが開始されるよりも少し前にIAEAの調査活動が開始され、第一内科からも横山先生が参加されました。1991年にIAEAの報告書が発表されましたが、この時は重松先生が座長で今のUNSCEAR(国連科学委員会)と同じような恰好で健康影響は認められないという報告書で(図10)、日本のマスコミから散々非難されました。この間も笹川プロジェクトは開始されており、図11はソ連邦科学アカデミーにおける研究計画の相談、図12は赤の広場における検診用のバスの贈呈式、図13は各診断センターでの活動を示しています。

それから1991年には日ソ専門家会議などがありまして、外務省がすごく力を入れて、長崎にも外務省の担当官が随行されるという時期もありました。図14の1991年の日ソ専門家会議の左側の下の写真は、長崎大学病院の科長会議の部屋ですが、ここで甲状腺がんがチェルノブイリの事故で増加したということがソ連以外の国で初めて発表されました。

それから1992年の9月に「ネイチャー」に甲状腺がんが増えたということが発表になりまして(図15)、その次の月の10月に、ヨーロッパ連合、私もヨーロッパのミッションとして参加し、同時にアメリカのミッションも到着して、ミンスクの腫瘍研究所のデミ

図7

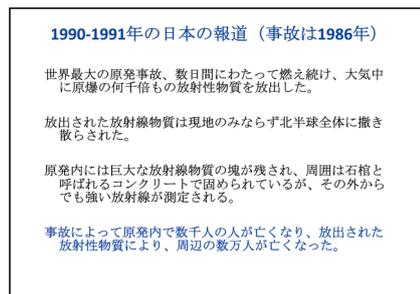


図8



図9

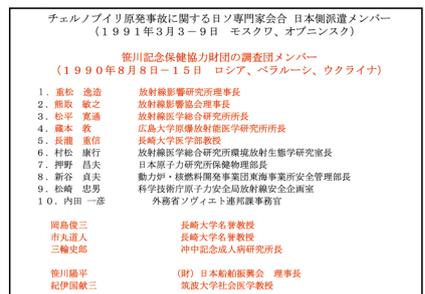


図10

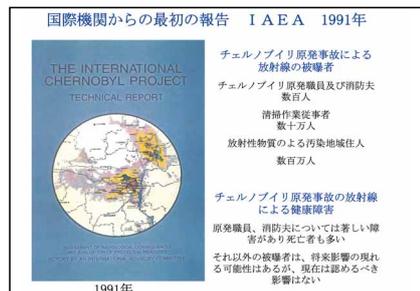


図11



図12



チュック教授から図16のように多くの患者さん診せてもらって、一日で全員が甲状腺がんという診断に同意しました。しかし、本当にチェルノブイリ原発事故が原因かどうかという点に関しましては図17のように意見が分かれ、結論までに4年間の議論が必要でした。

今まで説明してきましたように長崎大学は、常に世界と向き合って活躍したのですが、当時一番我々が困ったのは研修という意味も含めまして外国から来られる方々の受け入れ態勢でした。空港までお迎えに行きホテルのお世話をしということだけでも教室の人はみんな疲れ果て、大学だけではなくて日赤もそうですし、長崎のいわゆる原爆に関係した所はそれぞれの関係した方々のお世話で疲労困憊していました。そういう時に広島でHICAREが出来て長崎も作らないかという話を伺いました。広島にあるのに何故長崎にないか、というマスコミの攻撃が最初でしたけれども、実際にはそういうお世話を県・市を中心にやっていただいたらありがたいこと、それからもう一つは大学だけではなくて長崎全部を融合した格好で長崎に受け入れ態勢ができれば意味があるということから、最初は我々の現場というか、直接関係している人が、長崎県、長崎市と協力して現状にふさわしくナシムが創設され、会長は土山学長に最初にお願ひしました。その次に選挙があつて学長が交代され、新しい学長は、医学部ではないから遠慮されたということで県医師会長にお願ひしました。その頃の名簿を見ますと、私は

運営部会の部会長で出ていますが、実際にナシムが出来るときには凄くいろんな根回しも含めて協力させていただいたと思います。あと医学部長としての立場でも参加いたしました。以上がナシムが創設される頃の長崎の活動です。現場で活躍している方たちが切に要望して創設された部分をお話ししました。チェルノブイリの初期の支援を中心として長崎が世界を相手に活躍していたことを原爆70周年記念に当たりまして記録として残していただけるとありがたいです。

それからもう一つだけ最初にお話ししようと思ったのは、読売の論点に「被爆者と被曝者」というタイトルで書いたことです。それは原爆被爆者と放射線被曝者、被爆者、被曝者、ヒバクシャという発音は同じだけれども意味は全く違うことが区別なくというか間違つて日本に広がって、世界に広がっているということです。福島でも放射線の影響と放射線以外の影響を比べた時に福島でははるかに放射線以外の影響が大きいことは明らかで、IAEAも精神的影響、社会的影響を取り上げようとしている段階です。日本特有ですけれども、20万人が亡くなった原爆、Atomic bombingの被爆の悲惨さと、原爆の放射線の影響、すなわち被曝の影響、Radiation-exposedが発音が同じなので混乱し、若い世代は原爆の被曝の影響の全てが放射線の影響と誤って来ている。そういう印象が日本の戦後の歴史の中で出来上がってきたということを書きました。

もう少し説明します。日本の戦後の歴史の中で、戦

図13



図14



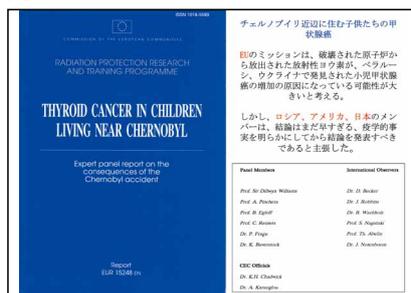
図15



図16



図17





災で沢山の方が亡くなった、例えば、東京大空襲で 10 万人亡くなった方と原爆で 20 万人亡くなった方は、これは両方とも一般市民の戦災死であるから両方ともに補償は

できないことになりました。死因も爆風、熱線、火災、などによる圧死、窒息死、火傷による死亡など共通しています。原爆死は補償の対象にはなりません。しかし、原爆の悲惨な状況から、原爆の被爆者を国として補償するとすれば、原爆で生き延びた、まさに放影研という Atomic Bomb Survivor はこれから放射線の影響は出る、東京大空襲の方は放射線の影響はない。この放射線の影響、被曝は補償の対象となり得るという考え方で被爆者援護法が作られています。

法律の中にも放射線に起因する疾患を援護することが書かれています。英語では、Atomic bomb-sufferer が被爆者で、Radiation-exposed が被曝者と明らかに違いますが、日本語では発音が同じために混同されています。その大きな混乱は、時代とともに原爆の現実が風化し、原爆の悲惨さ全てが放射線の被曝、Radiation-exposed に起因するとの感覚、放射線に対する恐怖が拡大し、世界に広がっている現実です。結論として、原爆の影響にしても、原発事故の影響にしても、放射線の影響と放射線以外の影響があること、放射線以外の影響の援護を忘れてはならないとしました。70 周年ということで、被爆者と被曝者には大きな違いがあるのに、原爆の風化とともに発音が同じであるという日本語に端を発する誤解が世界に広がっていることを最初にお話しさせていただきました。どうもありがとうございます。

(高村先生) ありがとうございます。長瀧先生の方から初期の先生が被爆医科大学の前身を持つ長崎大学の責務として世界の被爆者の放射線災害に焦点を当てたことから始まって、チェルノブイリが起こったときに長崎の果たすべき役割というのを先導されて来られた。そういった中で、オール長崎と言う横断的な組織

の必要性というのを実感されて、そういった中からナシムの設立に尽力されたというご紹介がございました。なかなか私自身も知らないことが多かったので勉強になりました。ありがとうございました。

今ナシムの初期についてお話がございました。いろんな人が来て、長崎で会議をする、学ばれる、そういった中から研修生を受け入れることになって実際に 1993 年から、チェルノブイリから研修生を受け入れた。おそらくその前面に立って研修受け入れ・担当をされて、実際の研修をされて、支えてこられたのは山下先生だと思います。山下先生の方から実際研修が始まって、そして実際にどういう風にナシムとして研修をしたか、あるいは派遣をしたか、種々の事業を展開されていったのかということについてご紹介いただければと思います、よろしく願いいたします。

(山下先生) はい、ありがとうございます。私、先ほど永山先生がおっしゃってくれましたけれども 1990 年の 10 月の 1 日に原研に来させて頂きましたので、そういう意味では長瀧先生と第一内科が、教室の力を挙げてチェルノブイリ対応していたのを後継、引き継ぎ、原研では新しい仕事を与えられたと思っています。

今日のご出席の方々も多くは第一内科に縁の深い方と原研の先生ですので、おそらく初期のころから対応していただいたのは、このメンバーが中心だろうと思います。ナシム 20 年誌の中に役職者というのが 37・38・39 頁にあるのでこれを見ると長瀧先生の御説明がより分かり易かったのかなと思います。当時は高田知事それから本島等市長、それに土山学長、さらには医学部長原耕平先生、当時の陣容の中で実は県が十分頑張ったのですね。県の事務局が汗をかいてくれて、予算措置も含めまして、広島に次いで二つ目に出来たヒバクシャ医療協力会となります。主としてチェルノブイリ、特に研修生を受け入れて指導するというのが一番大きなテーマでありました。というのも、すでにチェルノブイリ笹川プロジェクトが 1991 年からスタートしていましたので、何処から研修生を呼ぶかという時には、当然のことながらすでにスタートしていたチェルノブイリ笹川プロジェクト、当時はソ連でしたけれども、ソ連時代の中でロシア、ウクライナ、ベラルーシの 3 国に 5 つの拠点を、このチェルノブイリ笹川プロジェクトは持っていたということが、事業推進の基本となっています。

そこで我々が現地から研修生を引き受けるに当たっては、財団のお手伝いをお願いしまして、当時はモスクワ笹川事務所というのが、多分槇さんから後からお話が出るかと思えますけれども、いろんな便宜供与をしていただきました。

ですからソ連が崩壊した直後、崩壊の前に設立してあったそれぞれのセンターから研修生をよぶというのが第一義的なものでありました。

二つ目としてとても大事な点で、原爆被爆から 50 年を過ぎて原研だけでは被爆医療をどうやって継承していくか、非常に難しいし、後継者をどうやって育成するかということでは海外の被爆者を育成すると同時に、我々原研、長崎の被爆医療をどう継承していくかということも大きなミッションでした。そういう意味で、多くの方々に大学を挙げて参画していただくということで原研もそうですけれども、多彩な陣容でスタートしたということがまず最初です。

先ほど高村先生も触れられましたけれども、研修生をどうやって受け入れて、どういう風にやるかというのは最初随分議論しました。その中で夏休みにやろうと。それしか我々には十分な時間がないということが一つと、期間はどれくらいかと。最初は 2 か月とか 40 日とかかなり長いアイデアもあったんですけど、受け入れ指導する方が疲弊して大変だということで、1 か月位に大体落ち着いて来ました。当初は少し長めでやっていました。丁度台風の時期でもありますし、研修生が台風に遭遇してびっくりするということもありました。ソ連が崩壊して 3 つの国に分かれてそれぞれ行き来が無い中で、長崎に来て初めてその国の医師あるいは研修生がここでお互いのことの情報交換ができるということもありましたし、幸いにして来た方々には、トラブルとか事故もなく本当に最初の頃からよくやっていただいたと思っています。

1993 年、94 年、95 年とチェルノブイリが中心でしたけれども、1995 年に初めてカザフに行って、1996 年には高村先生が大学院 4 年生の時、一緒にまたカザフのセミパラチンスクに行きました。あまりの医療レベルのギャップ、過疎、チェルノブイリに比べると、カザフの田舎にはほとんど何も無い。その中で核実験が 500 回近く地上地下で行われ、ヒバクシャが沢山いるということを知りまして、是非カザフスタンからも研修生を呼びたいということで 1996 年以降カザフスタン研修が入りました。今ではチェルノブイリ・カザ

フスタンの研修生と言うことで、研修生 5、6 名を毎年お呼びするというのが、ある意味で夏の恒例事業になっていると思います。

そういう経緯の中で最大限ご尽力頂いたのは原研のスタッフと大学病院のスタッフ、それに放影研、原爆病院さらには原対協、そしていろんなところで医師会の方々にお世話になってまいりました。ある意味オール長崎でヒバクシャ医療の対応をしていただいています。実績は十分あるのですが、もっと認知度を上げないといけないと思います。

如何せん我々もそういう広報活動が不十分なのですが、ホームページを見ると Web サイトに綺麗にまとめてあります。そう言う意味では、今日の配布された資料もそうですけれども、より市民あるいは県民に広くナシムの存在を知らせるというのは、最後の方の課題になるかと思えますけれども、これまでの経緯の中で書いていることでもあります。その中で個別の話とかあるいはここでしか話せない秘話も沢山ありますので、後で機会があったらご紹介したいと思っています。以上です

(高村先生) 山下先生ありがとうございます。初期の頃、チェルノブイリの研修が始まって、1996 年からカザフスタンの研修が始まる中で今に至るような流れについてご説明いただきました。またナシムの大きな目的が三つあるわけです。人材育成の取組とそしてもう一つ後継者育成の取組、そしてもう一つ情報の受発信ということがあるわけですが、特にその中でやはり後継者育成という、もう一つの大きな目的があるという話についてもご紹介いただきました。

で、最後にこれは 2 部の方で話があると思いますが、このナシムの活動、ずっと言われている事ですけども、なかなかその認知度がまだまだ十分ではないじゃないかという指摘をたびたび受ける、これをどうするのかという問題提起です。これはまた後からになるのではないかと思います。今山下先生がご紹介ありました研修の中で、特にチェルノブイリ、ウクライナ、ベラルーシそしてロシア連邦からの研修生を受け入れたというのも、それに先行する形で、長瀧先生からご紹介ありましたけども、笹川保健協力財団の方で、チェルノブイリの支援というのを 1990 年に始めてから、長崎大学もそれに協力する形だったわけですが、そのプロジェクトの概要、そして長崎の関わりも含めて槇

顧問からご紹介いただければと思います。よろしくお願いたします。

(槇先生) ご紹介いただきました槇でございます。笹川記念保健協力財団で、今は顧問として仕事をしております。よろしくお願いたします。

私は先生方と違まして医学のバックグラウンドはないのですが、笹川記念保健協力財団はもともとハンセン病を中心とする保健福祉を推進することを目的として設立されました。昨年 40 周年を迎えました。ところが財団を作るときに国内にはもうすでに皇室の関係されております藤楓協会という国内のハンセン病の患者さん・元患者さんの福祉を目指した財団がありまして、国内では同じ目的では新しく財団を作ることが出来ないということで、海外のハンセン病コントロールを目的とする財団になりました。

その発端は、その頃、日本船舶振興会（現 公益財団法人日本財団）の笹川良一会長と、東京大学薬学部の初代学部長を務めた石館守三という先生がいらっしゃいまして、そのお二人がある会合で食事をする機会があり、いろいろ話をしていたら笹川良一は大阪の自分の生まれた箕面市でしょうか、近所に若いお嬢さんがいたけれどもなかなか結婚できない、なぜかというとその女性の親類にハンセン病患者がいたからということ、それでハンセン病に非常に興味を持っており、機会あるごとに海外に行った時もハンセン病療養所を個人的に訪問して慰問したりしていたのだそうです。石館守三の方は青森市の薬局の息子さんなのですが、青森に松丘保養園という国立のハンセン病療養所がありまして、そこに番頭さんと一緒に薬を届けたことがあり、その時はなんと悲惨な人たちがいるのだらうということ、これが心に残っていたということがあります。終戦直前にあるアメリカの文献を目にし、ハンセン病治療薬の合成に石館先生は成功しているんですね。そういうお二人が 40 年前ですが偶然出会っていろいろ話をして、じゃあ先生財団を創ってください、私がお金を出しましょうと。

そういうことでできた財団なものですからハンセン病中心で、それも海外医療協力ということでやっておりました。たまたま 1990 年 2 月に日本船舶振興会（その頃は通称として笹川財団というのを使っていた）の理事長をしておりました笹川陽平氏（良一氏三男）が経済ミッションの団長としてモスクワを訪れたとき

に、ソ連政府からチェルノブイリ事故被災住民への協力を要請されております。その前年にゴルバチョフ大統領の首席顧問ヤコブレフ氏が来日した時もそういう要請があったようなのですけれども、1990 年 2 月に笹川理事長がモスクワで約束をするんですね。お金をこれだけ出します、と。ですから日本よりもモスクワで最初にこの情報が広まったということがあります。

それで笹川理事長が帰国して、関連団体の中で医療関係の仕事をしている笹川記念保健協力財団でやってくれというお話があったらしく、その当時、理事長は石館守三なのですが、理事をしておりました紀伊國献三が困ってしまいまして、存じ上げていた放射線影響研究所の重松逸造理事長にご相談いたしました。そうしましたら重松先生は、それはやはり広島・長崎の経験があるし、絶対日本がやるべきだというお返事だったようです。それで重松先生から広島大学・長崎大学を中心にしたプロジェクトチームのメンバーを推薦いただきました。5 月頃だったと思うのですがそれから数回その委員会を開いております。

その中にはもちろん、長瀧先生にも入っていただいております。そして 1990 年 8 月に現地視察団として現地に行ってくださいました。長崎から参加していただいたのは岡島俊三先生、市丸道人先生、長瀧先生お三方だったと思います。このころから私はこの事業に携わるようになりました。

帰国された先生方は、住民、特に母親の、それももしかしたらある程度不要かもしれない不安が大きいので、子供たちの検診をして母親にきちんとした子供の健康状態を知らせたい、そして少しでも精神的不安を減らしてあげよう、そういう人道的支援としてスタートしたらどうかということになりました。ただ人道的支援としても、その子供たちの将来のためにもきちんとした医学的データを残しておいてあげたいということでございます。

ソ連政府からは特に汚染の強い 5 か所での検診を依頼されました。ソ連といいますと、地域が広い。「この病院に来なさい、ここで検診します」では、来られない人もいるだらうということで、検診車でこちらから出向くという方式にしました。早速いろいろ調べますと、寒冷地仕様で、検診機材を乗せられる車で、すぐ着工できるものというトヨタのコースターしかなかったのです。それも 5 台必要だということで。いくつか医療機器の会社、商社などに打診しましたが、短

期間で仕上げたいというこちらの要望に手を挙げてくれたのは、モスクワで情報をキャッチしていた日商岩井だけでした。

機材の中でも血液検査の方はシスメックスの既製のものでよかったですけれども、甲状腺のエコーは絶対にこれではだめだと長瀧先生からご注文がございました。それは現地の医師が測定しても、日本の医師が測定しても同じ結果が出るものでなくては駄目だということで、これは長崎で開発されたエコーを特注、それからホールボディカウンターも車に搭載出来て最大限正確に測定できるものということで、結局それらの製作に9月頃から始めて出来上がったのが翌3月だったと思います。その時に長瀧先生からの命を受け、その年「原研」（長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設）の教授になられた山下先生が、助教授の難波裕幸先生とお二人で東京へいらっしゃいました。それで神奈川県のとヨタの工場にご一緒しまして検診車の製作状況をいろいろ見ていただきました。検診車に搭載する機材と試薬・消耗品も5か所の検診地域全てで統一しなければならないということがありました。

委員会の方は、重松先生、熊取敏之先生、松平寛道先生、長瀧先生、岡島先生、市丸先生、そして広島からは血液の蔵本淳先生に参加していただいたのですが、実働部隊はちょっと若手の先生方で、長崎からは山下先生、難波先生、後で1年後位になり参加されるのですが柴田義貞先生（放影研・長崎）、それから病理の伊東正博先生。第一内科からは和泉元衛先生、芦沢潔人先生、横山直方先生、西川智子先生、高村先生に参加していただいたし、放射線の方では高辻敏宏先生に参加していただき、結構相当な数の先生方にご協力いただいて、交代で現地へ行っていただきました。

実際に検診車が出来たのは3月末でしたので4月にゴルバチョフ大統領が来日した時にアントノフという大きな軍用輸送機を成田に持ってきてもらい、検診車

5台がすっぽり乗かって、それからものすごい量の試薬と消耗品、それらを全部大型コンテナに入れ、これらすべてを飛行

機1機で運んでもらい、1991年4月26日、チェルノブイリ事故の記念日に赤の広場で贈呈式をいたしました。

その後5月から5つのセンター（ロシア1か所、ベラルーシ2か所、ウクライナ2か所）に分かれるのですが、日本からは若手の先生方と募集しました臨床検査技師・レントゲン検査技師の方々に行っていただき、まずその前にモスクワ近くのオブニンスクで山下先生が中心になって検診のトレーニングをしていただきました。その頃私たちは現地に検診車を差し上げる、それから日本人を派遣する、それでいいと思っていたのです。そういう研修が必要だなんて全然考えていなかったのです。ですから山下先生にはこのプロジェクトは走ってから考えるとよく言われていたのですけれども、そのように本当にバタバタしていました。始まりはこんな調子でした。

（高村先生） ありがとうございます。笹川記念保健協力財団のチェルノブイリの支援と長崎のナシムプロジェクトが大きくなっているのですね。

（槇先生） そうですね、大変お世話になりましたし、またいろいろエピソードもございます。

（高村先生） ありがとうございます。こういった形で初期のナシム活動というのが動き出しました。長瀧先生のご紹介がありましたけども、最初は長崎大学の学長が、会長を務めるということだったので、その後県の医師会の方に会長をお願いするということになりました。で、初代は土山学長、2代目が今村会長ですね。その後を引き継ぐ形で井石先生の方にナシムの会長を引き受けていただいたという風になります。その後井石先生に長年にわたってナシムを率いていただきました。そして先ほど申し上げましたが、井石先生には実際に現場に足を運んで、どういう人材が必要なのか、どういう研修が必要なのかということをご教授いただき、現場主義ですと会長を務めていただきました。井石先生の方からは是非お話を伺いたいと思います。よろしく願いいたします。

（井石先生） ちょっと、最初に私個人のことをご紹介したい。私は旧制中学の2年生13歳の時に、爆心地から4.8kmの長与という駅の前で被爆したわけです



けど、翌日中心地まで入って行ったのです。ちょうどその時に長崎医科大学が燃えているのを見たのです。たまたまそこに居合わせた憲兵の人がもうとにかく先に行っても危ないから帰りなさい、ということで、早々と戻ったから良かったのかなと思うわけですが、お陰様で急性症状も出ず、その後原爆被爆に関するような疾患にはまだかかっていなくて、朝長教授からそろそろ出るよと脅されてはおるのですが、未だに、そういう兆候はありません。

私は昭和 32 年に長瀧教授が主宰されている前の前の横田教授、第一内科ですけれども、入局しました。ちょうど横田先生が定年でやめられて、長崎原爆病院の院長になられた。設立ちょっと後から私も原爆病院に行くようになったのです。高岡教授が来られました。白血病とか悪性リンパ腺腫とか、そういう血液疾患が多いのに、第一内科には血液専門の研究講座はなかったの、それで名古屋大学に行ったりして、一人で頑張っておりました。突然、高岡教授から、放医研(放射線医学総合研究所)に行ってくださいと言われて、僕もなにををしに行くのかよく分らなかったのですが、先ほどお話の熊取先生の下で仕事をするということになりました。丁度、福竜丸の船員の染色体の検査の仕事させられて、それがまあ 1 年して東大の沖中教授の回診なんかにつき合わされて、今の医学会の会長、高久先生の研究室に 1 年くらいお世話になっていたのです。色々知識を授かって帰ってきたわけですが、そういうことでなにかしら段々その原爆被爆者との関係が出てきて、帰ってからもちょっと長崎・広島に被爆者の染色体を調べていたのですが、ちょっと家庭の事情で途中で辞めることになりました。

そして丁度、朝長先生のお父様が広島に原研の教授だったのです。その御弟子さんで鎌田七男先生に、「私の仕事を譲る」と。後は ABCC で、そこそこやっておったのですが、まあそういうことをやりながら開業した後、平成 8 年です、1996 年ですけど、長崎県の医師会長になって 12 年間会長を務めたわけですが、その間ずっと恒例だということ

で、ナシムの第 3 代会長をさせられた訳です。丁度学長さんがまたドクターになられたものだから、もうそろそろいいんじゃないですかと言ったら、「まあ暫くやとつたらどうか」ということで 12 年間もやらされておったわけですね。

その後色々、あとでまあナシムの設立の経緯のお話がありましたし、趣旨とか事業内容については後から蒔本先生の方からお話があると思いますので、私の在任中のお話を少しさせていただきたいと思います。

いちばん最初の仕事としては永井隆平和記念・長崎賞という被ばく医療に関する業績をあげた方に授与するということがあって、たまたまカザフスタンのサイム・バルムハノフ先生、第二回の受賞者だったのですね、このとき 1997 年ですが、その時ナシムという雑誌の創刊があったわけですね。このサイム・バルムハノフ氏、何かしらこう相通ずる所がありましてですね、1998 年 9 月 10 日からその当時の池田学長と山下教授に連れられて、カザフスタンのセミパラチンスクまで行ってきました。

セミパラチンスクで旧ソ連の 500 回に及ぶ空中、地上、地下の原水爆の実験が行われた場所であるということとその頃初めて知りまして、まあ驚いていたわけですが、我々のその原爆被爆と違って汚染土壌というか或いは水なんかの長年に及ぶ汚染による障害ということが主なんです、そこに対する治療というのは殆どなかったのです、機械を心配したりとかはあったのですが、殆どその向こうの現地の医師のレベルが低いといえますかね。それから医師の地位というのは非常に低いのです、旧ソ連における医師の地位、普通の一般労働者よりもちょっと低い様な感じで、あんまり意欲がないというか、その時非常に強く感じました。

何とかセミパラチンスクの支援の手を、ということを考えて、山下教授とも相談して、丁度外務省の政務次官の武見敬三さんという方がおられましてね。この人とは親しくしていただいていたので、相談に参りましてセミパラチンスク支援東京国際会議というものを立ち上げていただいた。東京の高輪プリンスホテルで執り行われました。主催は外務省と国連ということでした。その時、高村外務大臣、武見敬三政務次官とか、それから前外務大臣の中山太郎先生に尽力をいただきました。カザフスタンからトカエフ前副首相もおいでになって国際会議が開かれたわけですが、それを



機に外務省と国連が相談し、セミパラにも支援をしようということになったと聞いております。まあそういうところをやりました。

これは御祝いごとではありますけれども、2000年、平成12年に第52回保健文化賞の団体賞を受賞致しまして、皇居にて天皇皇后の御拝謁をえたということもございました。2002年にはベラルーシのエウゲニイ・デミチュックという人と、先ほどお話ししました広島の大鎌田七男先生に永井隆長崎賞を授与された。この時に放射線医療科学国際コンソーシアム第1回長崎シンポジウムというものを開催して、先生の方から言っていたと思うのですが、参加させていただきました。

2004年には鎌田實先生、長野の例の、あまりがんばるなという先生、この人もかなり、チェルノブイリに尽力いただいたので、永井賞を差上げた。この年に丁度ウクライナの外務大臣であるコスチャンチン・クリスチェンコという大臣が長崎に来られまして、山下先生もおったかな、昼食を共にいたしまして是非チェルノブイリに来てくださいということで、早速その年の8月にウクライナを訪問いたしました。キエフに行ってみて最初、天江大使に、大変に歓待を受けました。丁度お土産にハンブルグ空港でちょっといいワインを買って持っていったら、非常に喜ばれてですね、大変ご馳走になりました。

その時は齋藤前学長、それと県から草場さんと、市から松田さん、ビデオでもとってくれまして、まあ訪問先としてはキエフの内分泌代謝研究所、放射線医学研究所、付属の病院、それからキエフ保健局研究センター、ついでチェルノブイリ原発まで足を伸ばしまして、この時はかなり器械も使われておりました、あの内分泌代謝研究所ですかね、僕らがしていた染色体分析を、僕らが持っている器械よりも上等の器械でやっていたのです。段々やっぱり支援の手がこう充実してきたなあという感じを受けました。帰国に際して報道陣がインタビューしてきた、私と齋藤学長、私は原爆被爆に関する実体験をお話しして、齋藤前学長はナシムについて研修生の受け入れとか、そういうことについてお話をされました。

それから2005年の2月から、韓国の被爆者、韓国に多いものだから韓国での被爆者ということで韓国赤十字社を訪問致しました。嶺南大学附属病院ですね。この時は先生達はこなかったですね。県と市の人と一緒に来たんですね、先生いなかったのです。

(朝長先生) いや、その別の機会に年に2回位行っていました。

(井石先生) 嶺南大学附属病院に行ったら、学生のアルバイトがずらっと並んでいる訳ですよ。病院の受付にね、この人達何をするのかと行ったら、電算IT化の為に要員なのだそうですね。もうその保険診療の打ち込みから、それから開業医と大学との連絡とか、日本よりもかなり進んでいたわけですね。功罪相半ばという面もありましたけれども、ビックリしました。それから大邸(テグ)の赤十字病院とか市立病院とか、それから医師会にも行って来たけれども、被爆者医療に関して医師会はほとんど関与していないですね。全部大きな病院が関与しているということで、ちょっと長崎、まあ広島もそうでしょうけど開業医も原爆医療に携わっておるわけなのですけど、そういう事を見て帰ってきた。

同じ年の7月に市丸教授と広島横路健次郎先生に、永井隆賞を受賞していただきました。

2006年の7月に外務大臣賞として団体賞、丁度麻生さんが外務大臣で、大臣賞を受賞しました。

2007年の7月27日から10日間ベラルーシ共和国を訪問致しました。この時も齋藤学長、高村先生。ミンスクで小池孝之大使ですかね、非常に若いなんか大丈夫かなという風な小さな大使館でね、この時は成田で日本酒を買って持って行ったら、空港で開けろと言われてね、何とかかんとか誤魔化して持って行って6kg超えていましたけど。それからこの時は国立ベラルーシ医科大学から、甲状腺のガンセンターなんかを訪問して最後にゴメリの医科大学を訪問してまいりまして、国立放射線医学・環境研究センターを訪問致しました。この時に齋藤学長が講演をなさったのです。

そういうことでいちばん最後の2007年の10月31日にこれはロシアの方ですけどアナトリー・ツイーブという方に、永井賞を受賞していただきました。まあ私がやった仕事というのは、これくらいのものでございますけど、この12年間やったのでね、私も、もうそろそろいいんじゃないかと言ったのですが、その後運良く、蒔本会長が引き継いでくれております。まあちょっと、雑駁な話で申し訳ございませんが、これ位でご勘弁を願います。

(高村先生) 井石先生どうもありがとうございました。

井石先生が会長をされていた 12 年間というのはまさにナシムが飛躍発展をした時期に丁度重なって、先ほどカザフスタンの話がありましたけども、JICA のプロジェクトで医療支援というのがあってこれにナシムが連動する形で、カザフスタンからの受入研修を行ったり、新たに活動の幅を広げていくということがありました。先ほどから井石先生から永井隆平和記念・長崎賞の話がありましてこれも第 2 回のサイム・バルムハノフ先生の話からですね。

(井石先生) いちばん最初は秋月先生です。原爆被爆当時に被爆者医療に活躍された。

(長瀧先生) 第 1 回目の時は、僕が賞状を秋月先生にお渡ししたと思います。

(井石先生) 今村先生が会長だったですね。

(高村先生) 永井隆平和記念・長崎賞、この設立の経緯を山下先生少し説明いただけますでしょうか。

(山下先生) これはナシムというよりも、県・市から原爆 50 周年で記念となるような事業についての相談が関係各位にあったと思います。その中で、継続したものという話の一つ出て、当時市長も含めて市としては形に残るものを作りたいというのがありました。永井隆賞というアイデアを出した時には、その名前を使うこと自体が、ご家族の御許可をいただけるかどうかということで、私自身が、当時の永井誠一氏、それから茅乃さん両方にお会いいたしまして、これは素晴らしいことだということで、ご賛同いただいたというのが 1995 年の初めだったと思います。

長崎県も市も、当時 100 万円ずつ出してくれて、200 万円で賞をつくった、これは隔年毎でしばらくやろうということが公式に決まりました。第 1 回ということで、誰ともなく直ぐに秋月先生という名前が原研からも、関係者からも出たと思います。当時、聖フランシスコ病院にずっと寝たきりの状態でしたのを、奥様、須賀子さんが代わりに長瀧先生から賞を頂いたと記憶しています。とても素晴らしい授賞式でした。

(長瀧先生) 1995 年、50 周年の年ですね、僕は学部長だった。

(山下先生) はいそうです。

(長瀧先生) 私は、高田知事、伊藤市長が 50 周年に何か記念すべきことをやりたいといわれて、その永井さんまあ平和記念賞、誰にするとか、なんか一緒になってご相談したような気がします。

(山下先生) 受賞選考委員会、もう終わってしまいました。たぶん先生がメンバーでした。

(長瀧先生) 2007 年迄やっているから。

(山下先生) そうですね、長瀧先生がリーダーシップをとられたと思います。

(長瀧先生) 随分御相談受けて、検討して十分進めていただいたので最後に賞状お渡しするときだけで。

(山下先生) そういう面で本当にありがたく思っています。

(井石先生) どうも会長の役目だったらしくて、ですね。

(山下先生) それがお縁で永井誠一さんが亡くなった時に、ご寄付をナシムにいただいて、原研の建物が建った時の 4 階の研修室は永井徳三郎氏のご寄付でオーデオ機器とかが全部揃った経緯があります。

(高村先生) ありがとうございます。そういった経緯で永井隆平和記念・長崎賞が設立されて以降、先ほど紹介した日本人の方であれば秋月先生あるいは市丸先生、鎌田先生そして横路先生、チェノブイリ連帯基金、外国でいうとツイープ先生、トロンコ先生、デミチュック先生そしてバルムハノフ先生、ライナー先生、そして直近では、この前放影研の理事長になられた丹羽先生が受賞されています。井石先生の方から会長在任時のいろいろな活動についてご報告がございましたけれども、その中でセミパラチンスク、カザフスタンの話がありました。1996 年から実際この研修生受け入れということが始まったわけですが、関根先生がその後長く種々のカザフスタン協力に尽力していただきました。関根先生からその話も含めてご紹介いただければと思います。

(関根先生) 6年前に長崎大学を定年退職して、県・血液センターに勤めております。病理学者です。

井石先生が被爆者というお話をされて、今ふっと見て、考えると朝長先生、蒔本先生は同級生で3人とも長崎での被爆者だと思って、山下先生も被爆者二世、高村先生は違うね。

(高村先生) 違います。

(関根先生) 奇しくも、被爆者であるという環境がこういった事にお役に立つのかなと、改めて思っていました。今日は何を話そうかなと思って、私、20年前から日記をコンピュータでつけていて、検索でナシムと入れたら物凄くヒットしました。井石先生がもう会長を辞めたかったって、先程おっしゃっていましたけれども、それも日記にちゃんと入っていました。

井石先生が、会長を辞めたいから学長に後任をお願いするようにと、1999年3月12日の日記に書いてありました。そして数日後に辞めるのは断念され、仕方ないから、1年に限りという継続のお約束をしていたのです。それから、長く会長に在任していただきまして本当にありがとうございました。

先程から、お話がある中で、チェルノブイリの事ですが、私は行ったことはなかったのですが、うちの、伊東助教授が先程お話をいただきましたように。

(槇先生) もう、何十回も。

(関根先生) 伊東助教授が仕事をさせていただいて、彼のライフワークになったという事です。特に病理として、チェルノブイリテッシュバンク、標本とにかくパラフィンブロック、あるいは標本から得たDNA、RNAをしっかりと保存して行こうというシステム、そこに日本の、勿論、笹川が一番お金を出していく、ほかにアメリカのNIH（アメリカ国立衛生研究所）とか、あるいはEUも出していただいたと聞いておりますし。

(槇先生) EUは止めちゃたんですよ。

(関根先生) あーそうだったのですね。

(槇先生) それで今、NCI（米国国立癌研究所）と財

団だけで額ががくんと減っております。

(関根先生) 甲状腺がんについての病理的な検索も十分にさせていただいて、出てくるがんは、普通のがんと変わらないけれども、やはり、被ばくした方の年齢が若ければ若いほどたちの悪い、ソリッドタイプが多い、乳頭がんの中でもソリッドタイプが多いとか、あるいは被ばく後、短期間に発症したほど、たちの悪いがんが出てくるという風なこと、あるいは、RET-PTCというような、核酸の変異がたちの悪いほど多いというようなことですね。

いい仕事が出来て、それは病理の教科書にも載るような事です。7人か8人の病理学者が、毎年集まって、長崎でも、伊東君が開催させていただいて、田舎の長崎の病理が外国の素晴らしい先生方と接する機会が出来て、伊東君がした仕事ではありますが、私も感謝と誇りに思っております。

(槇先生) 今はもう重鎮でいらっしゃると思いますね、伊東先生は。今も毎年1回はチェルノブイリテッシュバンクという事業の病理検討会に出席をお願いしております。

(関根先生) はい、私もその話も聞いておりました。また、カザフでは私も高村先生がおっしゃっていたように、何回か行かせていただきました。でもずいぶん忘れていて、思い出そうかなと思っていたら2週間前に、アリポフ・ガビットという通訳がいますね。とにかくカザフとナシムあるいは長崎大学とセミパラチンスクの事は、ガビット無しには語れないというぐらいに十数年間頑張ってくれました。

会いたいなと思っていたら2週間前に電話があって、「今、日本に来ています、今回は長崎に行かないから、失礼します」と、「あ、僕はちょうど東京にいるよ」ということで、2週間前に家内と3人で飲みながら話を聞いて、そのときのメモを今日持って参りま



した。ガビットも 51 歳になってですね、娘さんもとっても綺麗、息子さんも元気そうというような事でした。ガビットが来日したのが 1996 年でした。先程の長瀧先生、山下先生のお話の流れの中で、山下先生がチェルノブイリで頑張っていて、今度はカザフに足を伸ばそうというときに、ほんと奇しくもカザフから留学生が私の所に来て、私もカザフが何処にあるかもあんまりよく判らないで、病院長から「先生、病理を希望している外国人がいるけれど、カザフって何所かな、よろしくお願いします」と言われて、暫くしてから山下先生がカザフで仕事を展開することに。山下先生はほんと、恵まれているというか、教授になったところが原研で、ナシムを推進、笹川のプロジェクで長瀧先生のお仕事を手伝いながら頑張っていく、カザフに行こうかなと思ったら、山下先生の隣にいる私の所に、訳の判らないカザフ人が来て、それから十数年間お手伝いをするという風なことでした。カザフ人は日本人の生真面目さと違ってとっても大らかで、楽しゅうございます。

先程からのカザフのバルムハノフ先生は第 2 回目の永井隆賞受賞者で、我が家へもご招待して、飲んだときに「あの賞が貰えたら、関根に馬一頭プレゼントする」という約束をして、その後、何回かお尋ねしたら、「確かに馬はいる」という話は聞いていますが、馬に会った事はございません。先日、ガビットにとって何が一番思い出だったと言ったら、1999 年が旧ソ連の核実験の 50 周年の年で、日本でカザフの原爆の写真展をしようという企画がありまして、その時にガビットとガビットに遅れてから 3 年後にやって来たメイルマノフ・セリック、彼も十数年いたんですが、二人で頑張っていて、カザフからお借りした沢山の写真の日本語の翻訳を頑張りました、長崎と広島で開催しました。逆に長崎の原爆展をカザフ、セミパラチンスクあるいはアルマティで開催すること出来たのは、彼らがいるくれたお陰と思っています。

その後、女性のアイヌールさんとかジャンナさんとかが原研病理の大学院生あるいは研究員として来て、今でもジャンナさんは原研病理で

研究を続けております。そういったことで、多いときには 3 人 4 人いて、日本の中でカザフ人の人口密度が一番高いのは長崎の原研病理だなあとという冗談があるぐらいでした。

日記を見ていたら、1997 年に初めてカザフに行った時のことが出てきました。ジュマディロフが迎えに来て、ジュマディロフの外科部長室で甲状腺種がある 19 歳の男性を山下先生が診断をしたとか、それから、1996 年に最初のカザフからの研修生、女性の内科部長の部屋に行ったとか、病理室で色々話をした、とかというような事でした。

私にとってカザフスタンで、同じ病理標本を診て診断が一致するのか、それが一番の心配事、もし違えば、ぜんぜん話が出来ないなど。沢山の標本を一緒に診る中で、ほとんどの診断が一致したのはほんとに嬉しいことでした。顕微鏡で診た時に同じ言葉をいうことが出来たというのは、ごく当たり前みたいだけでもね、やはりとっても嬉しかったのを覚えています。

まあそういったことで、私も 1997 年に最初に行ってから、あと 7、8 回行かせていただいたのですが。仕事としては、チェルノブイリの方が放射線との因果関係というのが明確でね。カザフスタンで何百回も行われた核実験の放射線の傷跡を人体に見つけたいなあと思っていたのですが、貧しさの方が先で、結核で死んでしまうとかですね。最初私は皮膚がんが多いのでもしかしたら、あそこのウラン鉱と関係があるのかなあと思って、一所懸命診たのですけれども、どうもはっきりはしませんでした。勿論、長崎に来てくれたガビット、セリック、アイヌール、ジャンナそれぞれにテーマを与えて研究をさせたのですが、明確な病理としての研究成果をまだ挙げていないといった方がいいのかもしれない。

1 週間前にガビットから、病理のプログロ先生が去年亡くなったという事を聞まして、とても悲しかったです。沢山の方々にお目にかかったな、でも亡くなられた方も随分いるなあと思いながら、カザフスタンを思い出しているところです。

また、朝長先生が頑張っていて構築された韓国では、私も何度か講演をさせて頂いて楽しい思い出です。最近では去年の 12 月に放影研の今泉先生と一緒に韓国に行かせて頂きました。私も厚生労働省の原爆医療分科会の委員をさせて頂いておりますが、甲状腺と甲状腺腫瘍と放射線の関係は、長瀧論文と今泉論文が最も



大切な論文になっており、お世話になっております。私から以上でございます。

(高村先生) ありがとうございます。正に先生の指導力のお陰で色んな若い先生が、カザフスタンから来られて、今多くの方が戻られて要職に就かれていらっしゃるということで、ほんとに人材育成ということで、長年貢献して頂いたという事がよく判りました。ほんとにありがとうございます。

カザフスタンには専門家派遣ということで、多くの先生に行っていたいて、蒔本会長も永山先生も行かれて、少しインフラの話があったんですけど、永山先生から見られてセミパラチンスクにおける医療インフラとか、それも含めて何か行かれた時の印象は如何でしょうか。

(永山先生) 医療インフラといわれると僕も臨床やっていなかったの、ちょっと解らないですが。一般的なインフラということになるとやっぱり道路が穴だらけ、だから、道路を真直ぐ走らない、蛇行して走る、何でそう走るのだろと思っていたら、穴だらけ。

(山下先生) すごい状況でしたね。

(永山先生) アトミックレイクに行くのに、高速を走った後に、山の中を走ると言われたのですけども、高速が舗装してないから、ずーと、同じですよ。印象はそんなところ。

(高村先生) しかし、ほんとに先程、山下先生から話がありましたけれども、インフラが十分でないということで、科学もそうですけど、いかに医療インフラを支援するかということが、JICA のプロジェクトの目的だったわけですけども、そういった中で人を育てるということで、ナシムで 1996 年から研修、人材の受入研修をやって来ました。ナシムのもう一つの大きな柱として、在外被爆者の支援があるかと思えます。これはナシムが発足以前から長崎市、あるいは長崎県でやられてきたと聞いております。

そういった中で、ナシムでも特に在韓被爆者に対する支援を長年やってまいりました。韓国医師受入は 1995 年からだったと記載されておりますけれども、特にこの事業は朝長先生が中心になってなされてこ

れたかと思えますので、それも含めまして、朝長先生に御紹介いただければと思います。よろしく願いいたします。

(朝長先生) はい、私が教授になってまもなくナシムが発足して、そのころ長瀧先生が指導されていたのですけれども、役割分担としては勿論甲状腺が第一内科と山下先生の教室で、ずっと引き継がれていったんですけれども、血液の方は広島大学の原医研が担当だという事に最初に決まりましたね、われわれが直接、チェルノブイリに行くという事はなかったですね。

それから、幸いなことに白血病が出るという事態にはならなかったということも、もちろんあったんですけどね。私もモスクワでちょうどエリツィン大統領の頃に、シンポジウムがありましてですね。子供に白血病が出るかというシンポジウムだったんですけれども、そこに急に呼ばれました。そこに有名なイワノフさんとかいろんな人が集まりました。長崎の小児のデータを持っていきました。その時、たぶんその当時の状況から察するに、チェルノブイリでは白血病は出ないだろうという結論を講演したのですけれども、一応その通りになりまして、面目を施したというか、そういうことがありました。

それから、今、長瀧先生が理事長をされている放影協というのがありますが、その前の前の理事長、松平理事長、青木理事長の時代にセミパラチンスクに調査研究に行ってくれとかですね、色々ありました。カザフに行ったときに、セミパラチンスクのがんセンターだったかな、びっくりしたのは、白血病の患者の標本があるから診てくれと言われて、診ましたら、標本があるんですけども、染まっていないのですよね、白い白血球が、濃みたく、一面に塗られていましてですね、核も染まってない、これは診断つかんなと思って、白血病である事は間違いないと思ったんですけど、染色液が悪いんですね、それで染めきってないんですね、その時白血球数、いくらかと言ったら、百何万と言いまして、白血球数百何万という症例を初めて診ました。それがセミパラチンスクのヒバクシャかどうかという事はよく判らなかつたのですけど、びっくりしました。医療設備も悪いし、テクニックも悪いしですね、これは大変だなあと思ったことがありました。

それから、その後カザフのがん統計、ツイーブさんという人ががん統計出していましたけど、まあ本当た

ろうかということになりましたですね、色んなカザフ側の診断が、正しいのだろうかということで、病理の先生とも一緒にですね、これは広尾の日赤のセンターの先生でしたけれども、一緒に行ってかなり大量の病理組織を診てもらいまして、診断は先程、関根先生が仰っていた様に、かなり一致してですね。

(関根先生) 一致したよね。

(朝長先生) 素晴らしいということがわかって、それから旧ソ連邦の臓器別の診療体制もかなり徹底したもので、それだけは感心して帰ってきましたね。

まあ、そういう断片的なチェルノブイリ、カザフとのお付き合いがございましたけども、長崎におりましてナシムに協力させて頂いたのは、専ら山下先生たちが招いた研修生たちに長崎原爆のですね、これまでのデータを示して教育の一端を担ったということでした。そういう事で暫くするうちに、在外被爆者に対する関心が非常に高まってまいりまして、当時先程高村先生がおっしゃったように1981年から1986年くらいの時期なのですけれども、外務省も在外被爆者に対する支援を少し開始していた時期ですね。たとえば、韓国の陝川（ハプチョン）という所の南側の山の中に、原爆被爆者の施設が造られたりですね、そして治療費、診断費ぐらいの補助が出るということが行われ始めた時期でした。

このころ、韓国に政府が登録を確認していた被爆者が2,204人ですね、主に広島の方が多いですけれども、長崎からの方も含めて、こういう方々の診療をどうするかということがその後だんだん具体的な問題になってきて、尚且つ、なかなか日本政府が、厚労省が被爆者手帳の交付については、日本に来ないと駄目だとか、色んな縛りが当時ございまして、それを、とっばらっていくような方向性を長崎県、市の原対部の方々が、大変尽力されて、韓国のいわゆる厚労省ですね、保健福祉部というのですけど、そういう所と交渉されたりですね。それから大韓赤十字社との交渉とかですね、色々な事がございましたけれども、主にそういう行政の方々のお仕事に、まあ、ちょっと、頭だけの団長格で何度も何度もですね、今日来られている島村さんは常に私の引率者でしたけれども、一緒に行って、交渉事をずっと見守っておりました。

だんだん順調に、その成果が出てきまして、在韓被

爆者に対する、現在は厚労省の政策も充実しまして、その前に在外被爆者に対する日本政府のですね、医療政策はどうあるべきかという検討会が作られておりましてですね、これは森渉日本医学会会長が委員長になられてですね、平成13年から5回くらい開かれまして、かなり先進的な対応をするようになりました。その後、厚生労働省からですね県市の方に委託事業として予算措置もされてですね、その後定期的に、医師団が韓国に行きまして韓国内の主に赤十字病院が六つありましたが、それぞれの所で相談事業をするという様な態勢が始まりました。それがまあ平成16年度からですね、順繰りに始まりました。

これが今も続いておりまして、もう3順目に入っていると思いますけれど、毎回ですね各地で少ないときで70名ぐらいですね、多いときは特にテグとか大都會では360名とか、ソウルの場合も300名とかですね、こういう所を順繰り、年2回これまでやってきています。

平成27年度までのデータがまとまっておりましたけれども、相当な数の相談事業が行われております、これは日本から5名から6名のドクターが行きましてですね。それには原爆病院、長崎大学原研の先生方、放影研の先生方それから時に市民病院ですかね、入っていただいて朝から晩まで、一人のドクターが30名ぐらいですかね、午前中15名、午後15名ぐらい、通訳付でびっしり、一人当たり30分ぐらい健康相談にのると、前もってソウルその他の赤十字病院の先生方が、健康チェックをしておられまして、検査もされて結果が出ております、非常にスムーズに健康相談ができる状況になっております。

韓国の被爆者の方々の一つの特徴は、少し皆さんは医療費に困っておられる方が多いですね。中に裕福な方もおられましたけれども、総じて、色んな医療費に困っておられる方が多いという事で、日本政府からの直接的な医療支援に大変感謝しておられる、かかった医療費の、上限が有りますけれども、相当部分を日本政府が現在は補助してまして、



それはバックしてくるわけですね、大韓赤十字がその事務を取り扱ひまして、実際お金は支払われているということ、それから勿論、外務省が1980年代にやっていたような、渡日治療というのも、現在も、この相談事業にのっかって行われておりまして、原爆病院、市民病院、長崎大学病院ですね、希望すれば、そこで何でも治療してくれるものですから、大変希望者が次々出てくるという状況ですね、今も行われています。中にはがんが見つかって、日本で手術したとか、そういうことも有ります。あと被爆二世の、自分たちの子供さんたちについての相談も間々あるのですが、これがまだ十分手が届いていないというところがございますけれども、日本も同じ状況ではあるんですけど、それでずっと今日まで、韓国の在外被爆者医療が行われています。

あと在外被爆者はですね、韓国だけじゃなくて、ブラジルにも数百人ですね、それから北米にも数百人、それからボリビアとかですね、その他の南米の国にも少しずつおられて、この方々は戦後ですね、やはり新生活を求めて、日本では困窮しているということで、移民政策によって渡られた方が多いですね。その方々の、医療は主に、広島の高島HICAREを中心に、広島県医師会がやっておられます。そこに、時々我々長崎からも手助けに行っていると、これはかなり長期間ですね。3週間ぐらいですかね、南米をずーっと周るので。これは大変な、田口先生がさっきおられましたけれども、原爆病院の院長の時に行かれましたね。二、三年に一回これは順番が回って参ります。

あと、長崎市が独自に今年から台湾の在外被爆者の健康相談を韓国と同じ様な方式で始められまして、第一回目、私が行ってまいりました、十人ほど相談事業を行いました、台北と高雄で二箇所で行いました。赤十字がどういうわけか台湾は協力をしてくれませんが、軍の方の病院が協力しています。台北の軍病院は三軍病院といって三軍は陸軍、空軍、海軍ですけどね、うちの大学病院の倍ぐらいの、大きな病院で、そこにがんセンターもありますし、検診センターもあって、検診センターのドクターが付き切りで我々の健康相談事業に協力してくれています。

これはナシムの直接の仕事にはなっていないくて長崎市が独自にやっているんじゃないかなと思いますけど、まあそういうことで、ナシムの事業が、かなり在外被爆者ですね、こういう検診業務を拡大して軌道

に乗せるのに役立ったのではないかと思います。もちろん県・市の行政面での御努力というのが大変大きかったのではないかと思います。この為に一時訴訟がかなり続いておりましたけれども、そういう在外被爆者の方の訴訟というのも随分減って行って、現在では日本の被爆者に準ずる水準で医療を受けられるという事で、アンケート調査すると、韓国の被爆者の方々も、満足度といいますか、かなり高いという風に数字が出ています。まあ私がナシムの仕事で、やらせて頂いたのは、だいたいそういうところだったかなと思います、以上です。

(高村先生) ありがとうございます。朝長先生からチェルノブイリ、セミパラチンスクそして在外被爆者支援という事について、御紹介いただきました。今日は「被爆 70 周年とナシム」ということで、今後当然ながら在外被爆者の方も高齢化という中で、今後ますます、こういった事業の重要性は増すのではないかと思います。先程、井石先生からお話ございましたけれども、ナシムの井石先生の前の今村先生から、県の医師会の会長にナシムの会長をお願いしているという事で、これは非常にナシムの活動が円滑にしている一つの要因ではないかなと、私は前々から思っています。

やはりオール長崎で活動が出来ている、先程山下先生からお話がありましたけれども、大学、そして原爆病院、放影研、そして医師会という中で、オール長崎がこの問題に当たっているというのがナシムの強みではないかなと思います。現在、蒔本先生にナシムの会長をしていただいておりますけれども、蒔本先生から現在のナシムの活動も含めてお話いただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

(蒔本先生) 高村先生よりお話がありましたが、7年前の平成 20 年（2008 年）に、井石先生が県医師会長をお辞めになられ、後任に私になることになりました。

井石先生が長年にわたりナシムの会長もされておられましたので、私にナシムの会長就任のお話がありました時には、それまでのナシムの経過や具体的な取り組みも知らないままに、どちらかと言いますと県医師会長の当て職のような気持ちもあって就任させていただきました。その後、何かにつけナシムの活動の足を引っ張っているのではないかと思います。思いながら今までやってきております。



改めて、ナシムの活動目的と事業内容を再確認という意味で述べますと、設立の目的は、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は在外被爆者及び世界各地で発生している放射

線被曝事故による被災者の救済を目的として設立したとあります。

具体的にはどのような活動を行うかといいますと、長崎が有する被爆者医療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果を、これら被爆者の医療に有効に生かしてもらうため、国外からの医師等の研修受け入れや国外への専門医師等の派遣、医学教科書の出版、寄贈及び永井隆平和記念・長崎賞の授賞などを実施し、被爆者医療を通じ長崎から世界への貢献と国際協力の推進に寄与することを目的として、1992年の4月1日に設立されております。

ナシムの現在の活動状況と致しましては、先ほどから色々と話が出ておりますが、研修者の受け入れ、専門医師等の派遣事業、それから在外被爆者の南米・北米等含めまして、渡日活動事業、普及啓発事業、講演会、PR活動と情報提供及び出版事業、さらに永井隆平和記念・長崎賞、それから支援委員会補助事業などです。

福島原発事故が実際に起こり、これらの事業は益々重要となって来ておりますので、さらに努力しなければならぬと思っております。

私は、1歳4ヶ月の時、爆心地より南東6.5kmの田上という所で被爆しております。距離も離れておりましたので、大きい障害は出ておりません。父が結核療養所の医師でありましたので、当時は沢山の被爆者の方が受診されたと聞いております。私は昭和44年(1969年)に長崎大学医学部第2外科に入局し、消化器外科を中心に指導を受けておりましたが、昭和52年(1977年)より父とともに田上の地で診療を行うようになりました。その後、平成4年(1992年)より4年間長崎市医師会の理事をつとめ、井石先生が県医師会長になられた時に県医師会へ移り、井石会長の下で、12年間常任理事として仕事をさせていただき

ました。この間、ナシムについては、井石先生がカザフ、ウクライナ、ベラルーシを訪問された時に、それぞれの国の様子をお聞きしておりました。

平成22年(2010年)には、第8回永井隆平和記念・長崎賞はドイツ連邦共和国のクリストフ・ライナー教授が受賞されております。

平成23年(2011年)には、研修経験者との意見交換、関係施設の視察及び核実験場の視察のためカザフスタンへ参りました。その前の月だったでしょうか、カザフスタンの日本大使が長崎に来られ、林田先生と御一緒に食事をいただきました。この時大使が私に、あなたのような人はセミパラチンスクに沢山いるよという話をされました。行ってみますと、なるほど結構私に似たような人が沢山いて親近感を覚えました。

福岡空港より仁川経由で天山山脈を越えてアルマトイに着き、カザフスタン国立医科大学の視察と学長への表敬訪問、研修経験者に集まっていたいて、懇談食事会を行い、次いで、約2時間のフライトでセミパラチンスク(セメイ)へまいりました。

セメイではセメイ医科大学、がんセンター、検診センター等の視察及び表敬訪問、さらに核実験場視察と岩石の採集を行いました。セメイ医科大学では学会が開催されており、高村先生より手渡された日本語の原稿を読みましたところ、それが学会のオープニングセレモニーの挨拶であったことを、後になって気付いた次第でした。

又、がんセンターの視察では、まず、病理部門に行きましたところ、入口のドアに関根先生のにこやかな写真が掛けてあり、さらに先生が撮影された美しい花の写真が何枚も展示されており驚きましたが、今日の先生のお話を聞きますと大いに納得できた次第です。

平成22年(2010年)に長崎で研修された方で病理部門の責任者の方が、中島教授とともに顕微鏡を覗いてディスカッションをされていたのも印象に残っています。

又、セミパラチンスクより長崎へ研修に来られた方々との懇親会の機会がありましたが、皆さん優秀で、熱心な素晴らしい人ばかりで、地元では夫々に責任のあるポジションで仕事をされている方々で心に残っております。何よりもナシムの活動によって素晴らしい成果を上げられてきていることを知る貴重な機会でありました。

平成25年(2013年)はウクライナへ連れて行って

いただきました。この年の2月にはウクライナ内分泌代謝研究所のミコラ・トロンコ所長が来崎されて、第9回永井隆平和記念・長崎賞を受けられています。

キエフでは、第1日目は内分泌代謝研究所と放射線医学研究所を表敬訪問し、色々説明を受けてまいりました。又、日本大使館にも大使を表敬訪問いたしました。次の日、チェルノブイリに行きました。原発より半径30kmは立ち入り禁止区域で厳しく管理され、数ヶ所で放射能線量のチェックを受けました。

原発は石棺で被われていましたが、これでは不十分ということで、大きなドームで被覆する計画が進行中で、近接した場所に多大な費用をかけてドームを建設中でありました。又、近くの林の中に原発で働いていた55,000人が住んでいた大きい町（プリピャチ）が廃墟となり朽ち落ちていました。

次の日はチェルノブイリより南西約100km離れたコロステンを訪問しました。この街は、爆発の際に多量の放射能を浴びた街で、原研部門の拠点の一つです。市長を表敬訪問しコロステン市広域診断センターを視察いたしました。市長は、福島原発事故後、日本のあちこちから見学に来ている、メンタルな面も非常に重視していると話されていました。福島状況をみましても、先程長瀧先生がおっしゃいましたが、メンタルな面をどうカバーしサポートしていくかは非常に大切であると思っています。

次に、市広域診断センターを訪問し説明を受けました。職員の方々の話を聞きますと、長崎に研修に来られた方も多く、柴田先生や伊東先生に指導を受けた話を色々とうかがいました。又、大きいフリーザーに血清でしょうか、沢山の資料が保管されておりました。このような経験をいたしまして、長崎大学、ナシムの貢献は素晴らしいものであると思います。

また、来月（8月）は、カザフスタンを訪問いたしますが、今回はナシムの仕事だけでなく、昨年より日本の医療制度や医師会の組織、保険制度の仕組み、医師信用組合や医師賠償責任保険制度などについて、研修、見学に来られているカザフスタンの医師会（カザフスタン共和国医療会議所東カザフスタン支部）との協力に関して協定を結ぶお話がありました。県医師会代議員会の際にもお話をしたところ、異議はないということで調印をさせていただくことになっております。医学のことだけでなく、保健医療福祉並びに医療政策の情報及び資料の共有、医療専門家、関係者の

交流などについても広く交流が出来たら良いのではないかと考えております。雑駁な話になりましたけれども、これで終わりたいと思います。

（高村先生） どうも蒔本先生、ありがとうございました。蒔本先生は謙遜されておっしゃっていましたが、ナシムの現会長として、色んな事業に積極的に御協力いただいて本当にありがとうございます。今言われましたけれども、医師会レベルで向こうの東カザフスタン州の医師会との新たな協定を結ばれると、また新たな医療レベルでの交流というのが広がるのではないかと思います。

当初、これだけ時間を取って、私、時間は余るのではないかと心配していたのですが、かなりオーバーしてしまいました。では、この後休憩を取りまして、第二部で今後について、御提言を頂きたいと思うのですが、その前にこの場で、この点はちょっと追加しておきたいという事が何かございますでしょうか。

（長瀧先生） カザフにつきましたは、初めから関与していましたので、最初の頃の思い出をお話します。ちょうど武見先生が音頭を取られて外務省と国連が品川の高輪プリンスホテルで各国の代表を招待してシンポジウムを大々的に開催した時にIAEAからクレームがありました。シンポジウムではカザフの放射線による奇形の子供の写真もいっぱい並べてありまして、IAEAからいけば放射線の被ばくがあるかどうかは判らないのに、なぜ、奇形の子供か、ヒバクシャの援助か、被爆国の日本がなぜ被ばく者がいるかどうか判らないのに、ヒバクシャの支援と主張するのかと、僕自身にも質問がありまして外務省に紹介しました。物凄く強力なので、厚生省とも打ち合わせがありまして、僕がそのシンポジウムの司会を依頼されまして、先生は放影研の理事長としてちゃんとした格好にしてくださいと依頼され、随分苦勞した覚えが有ります。

結局IAEAの主張が通って、日本からJICAがお金を出すのですが、その時にはヒバクシャ支援ではなく、カザフの医療支援ということで、お金が出たのですね、それで医療支援は長崎大学が受け持つことになりました。ところが当時の科学技術庁の方はまだやっぱり被ばくの影響を調べたいというので、先ほど朝長先生のお話のように放射線影響協会が科学技術庁の受託研究として、カザフスタンの被ばくの研究を

行うことになりました。そしてカザフの同じ所に両方の日本のグループが別々に調査に行ったという時代がありました。

今年は EU、ヨーロッパ連合がカザフスタンをもう一度調べたいというので、今まで調査してきた知的財産の所有をどうするかという話になって、今年ですが僕は京都の学会の時に、その EU の代表と会って、僕らは、カザフと放影協の場合ですが、文科省と協定を結んでデータベースを共有している、だからもし、カザフ側が EU と共同するんだったら、その知的財産は我々のところにもあるのだという事を話してきたところです。今、そういう知的財産に関して長崎大学あるいはナシムは何かあるのでしょうか。調査研究に関してですが。

(山下先生) ナシムではそういう協定はまったく結んでいません。基本的にカザフとの関係はあくまでも人的交流と地域医療改善計画に協力するという事で、8月29日が原爆記念日、いわゆる、向うの核廃絶記念国連デーになっておりますので、毎年8・29というのは向うの国にとっては、極めて重要な日で、放射線の被ばく者だけではなくて、先生おっしゃる核実験で被災をしたという形での広い意味での被災になります。

(長瀧先生) そういう段階でナシムがカザフとの関係を何処に視点を置いて続けてきたか、今後続けるかという意味で非常に気にして聞いていたんですけれども、親睦とか友情とか友好とか医師会のレベルとかそういう意味では、放射線の科学的なデータを集めるというのではなくて、ナシムのような行き方も有るという事を非常に印象深くうかがいました。

(山下先生) セミパラチンスク核実験場では、500回近い地下、地上核実験やっていますから、線量の正確な評価が、まず、ほぼ不可能に近いと。

(長瀧先生) 知的財産といっても、これからまとめるのは大変なことに思います。放医研と放影研でカザフに関する論文を、一つは書きましょと、ものすごいプレッシャーがありますが、なかなか英文でサイエンティフィックなものが出てこないという状況です。ただ現在非常に頑張っています。

(朝長先生) いやー、僕も一時、携わったのですが、青木理事長時代に、やっぱり、線量は村単位で平均値みたいな感じで出す以外に無いしですね、一人ひとりが随分動くんですね、ああいう遊牧民というのは、ある年はここに居たけど、次の年は別のところに行く、とかですね。

(長瀧先生) それを誰がコントロールしているのか。

(朝長先生) それをフォロー。

(長瀧先生) それを登録しているかわからない。

(朝長先生) その記録が有る場合もあるし、もうないことが多いという、だからもうこれは不可能かなと思いました。

(長瀧先生) まあ、染色体で異常が出るぐらいの被ばくも、地域によってはあるのですけれども。

(朝長先生) それもですね、コントロールに何処だったかな、もうちょっと200km北の都市を選んでいたら、その都市の住民からも染色体異常が出ましてですね、コントロールになっていないのですよね。それが重化学工業地帯でかなり汚染があるのですね、だからいろんな問題が輻射しているから、この研究は大変だなという感じ。

(長瀧先生) 実際にナシムとしてであれ、長崎大学としてであれ、カザフについて放射線の影響という調査の論文は出ていないのですか？

(山下先生) 線量との関係での論文は無いと思います。一般の疾患の頻度調査は色々やっていますけれども、論文も結構出ています。

(朝長先生) 前の原子力安全委員の久住静子先生が大分頑張ったのですが、放影協時代にはやっぱりそ



こまで持っていくのが、ちょっと無理でしたね。

(山下先生) 長崎大学とセメイ医科大学とは学術交流を締結し、98 年以降、毎年長崎医学賞を 2 名の医学生に渡しています。学生の教育とか、レベルが低く、また女性が 8 割、医療全体は極めて低く、そのインフラは大変な状況にあります。それが随分改善はしてきてはいるんですけども、むしろ医師会レベルとか、保健医療とかの協力が望まれています。

(長瀧先生) そういうレベルでお付き合いが有って、縁が出来て物凄くうまくいっていると感心しています。

(井石先生) とにかく低レベルだったですもんね、僕、素人がみても、医療、研究というか、教育というかね。

(長瀧先生) ある部分はデータをロシアが持っていった。

(山下先生) 初期の部分はそうです。

(井石先生) それはあるでしょうね。

(朝長先生) しかし、カルテを見て僕はロシア側のカルテですけど、びっくりしたんですけどね、カルテの記述量が減茶苦茶多いですね、これは凄いですね。

(楨先生) 追加と申しますか、先ほど朝長先生からお話ありましたけれども、チェルノブイリ事業を始めた時に、血液は広島、甲状腺は長崎という段取りがございまして事業そのものは当初 5 年で終わるということだったのですが、5 年間やってみると、血液の方は初めに出てくると思われた白血病がほとんど出てこないということで、そこで終了。ただ、甲状腺の方がどうもゴメリ近辺でがんが増えているのではないかとということがありまして、じゃあ、あともう 5 年だけそのゴメリでやりましょうということになりました。ですから私たちは長崎大学とは広島大学の倍以上もお付き合いをさせていただいている、そういう状況でございます。

(高村先生) ありがとうございます。一部ではこれまでのナシムでの取り組み、あるいはそれ以外の取り組みについて伺ってまいりました。第二部ではナシムの

これからの活動についての提言を是非頂きたいと思います。では、これで第一部を終了させていただきます。どうもありがとうございます。

=座談会第 1 部終了=

=第 2 部「ナシムのこれからの活動と課題」開始=

(司会) 先生方お揃いになりましたので、さっそく座談会第 2 部を開催いたします。初めに御紹介いたしましたように第 2 部で「ナシムのこれからの活動と課題」について自由にご意見をいただければと思います。高村先生、よろしくお願いたします。

(高村先生) はい、よろしくお願いたします。引き続きお疲れだとは思いますが、第 2 部よろしくお願いたします。

第 1 部では先生方にこれまでのナシムにおける活動、或いはヒバクシャ医療支援といった分野における活動について御紹介をいただきました。その中でナシムの設立の経緯から現在までの流れというのがだいぶ浮かんできたのではないかと思います。

第 2 部では今、林田教授から話がありましたように、これからを見据えてナシムはどうあるべきか、ということについてぜひ先生方からご意見を賜ればと思います。いくつか論点はあるかと思えます。一つは、当然ながら来年になるとチェルノブイリ 30 周年ということになって参ります。30 年経ってチェルノブイリに対してどのようにナシムが向き合うかということが一つあるかと思えます。

また、長崎・広島の前爆が今年 70 年ですけど、今後このナシムが今までやってきたこと、長崎・広島の被爆者医療にどのように生かすかということがあります。そして、もう一つ忘れていけないのは 2011 年に発生した福島の問題です。ナシムでは 2011 年発災後に、東京でナシム主催のセミナーを開催して放射線に関する正しい知識の普及ということを皮切りに、福島に対する活動もやってきましたけれど、これを今までやってきた例えばチェルノブイリの経験をもとにどのように福島に向き合っていくかということが一つ大きな課題であると思えます。

それ以外にも種々ご意見もあろうかと思いますが、そういったものも踏まえて、今後ナシムがどのように活動していけばいいのか、どのような方向性で活動す

ればいいのか、忌憚ないご意見をいただければと思います。ここは特にどなたからということは決めておりませんので、ぜひ先生方からご意見を、いかがでしょうか。

(長瀧先生) まあ、最初でも最後でもいいのですが、私自身の経験としては原爆症の認定制度のあり方に関する検討会に3年間関係しまして、原爆医療の基本的なあり方について、ずいぶん勉強しました。それから、もう一つは東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う住民の健康管理のあり方に関する専門家会議というものがある、これの座長だったし、具体的に健康管理のあり方について、甲状腺のスクリーニングをどうするかということまで含めた具体的な委員会だったものですから、この二つの会議の経験を基にして、ナシムも含めて日本全体として考えた方がいいなということをもたまたま被爆 70 周年で考えた、ということでお話させて頂きたいと思います。

一つは放射線の人体影響と原爆あるいは原発事故の影響と、必ずしも分けて議論されていない、特に福島で具体的に何かを考えようというときに、議論すると精神的な影響が前面に出てきて、「心配しているからこれをしなければならぬ」という議論と、一方では科学的にこういうことがあるからその必要はないという議論、その議論が同じ土俵で出てくるといつまでたってもまとまらないということを非常に感じました。

ですから、放射線の人体影響という話題と、それからその事故の影響あるいは放射線の社会的影響、あるいは放射線の精神的影響というものを理解しながら話していかないと両方も事故の所為だという絶対にとまとまらない、それを委員会の間に非常に強く感じました。

そして、まず分けるということが大事なのと、それから4年間、原爆も含めて考えてきたことですが、原爆は比較的科学的に放射線の人体影響に絞って科学的に話が出きている、ですから、我々はそこに基づいて例えば100mSv以下はわからないということはデータに基づいてお話しできる。ところが1mSvでも怖いという学者の話がいきなり世の中に出てきかにもほんとはしく、またそれを普通の人々が応援して100mSvと主張する学者はおかしいと言って非難する、しかもマスコミがそれを応援するようなことまで

書く、そのような状態が今回の福島の混乱の大きな原因であると思っています。それは日本の科学者コミュニティがちゃんとした声明を出さないからだということ非常に強く感じました。

だから一つは身体的影響とそれ以外の影響は分けて考える、一緒にしては結論が出ないということ、もうひとつはいろいろな議論の時に、身体的影響に関しては科学者がきちっとした声明を出さなくてはいけない、それを科学者の中で合意してそれを社会に対して科学者コミュニティとして出さなくてはいけない、そういう二つのことを前提としてこのナシムの将来構想の中に入れていただけるといいなあとと思っています。具体的には科学者コミュニティとは何だという質問に対しては、ほんとうはやっぱり学術会議なのでしょう、日本の科学者コミュニティとして、現実それがうまくいっていないというときに、たとえばナシムとHICAREと一緒にあって、あるいは長崎大学と広島大学と一緒にあって科学者コミュニティとしてスタンダードの一つの合意に達してそれを社会に対して、例えば1mSvをどう考えるか、子供の影響、ほんとに子供って何倍ぐらい大人より敏感なのですか、子供の影響を怖がって別居している家族が多いけれども、子供はほんとにどのくらい敏感なのかということも、日本の科学者コミュニティがきちっと議論してその結果を出さないといけないのではなかるうかと強く思っています。そういうことをナシムとHICAREがやっても十分通るところまでできているのではないかなあと感じもしましたので。それだけ、最初にちょっと言わせていただきました。

(高村先生) ありがとうございます。これは福島の4年前の事故から、非常に社会的混乱があった中で、今いわゆる放射線の影響と放射線災害・事故による影響というのが、ある意味イコールにとらえられていくと非常に混乱を招くと、これは本当だと思います。

その中で、今後のナシムの役割としていわゆるサイエンティストのコミュニティとしてきちっとした声明を出す、そういうオピニオンをきちっと出す役割を果たすべきではないかというお話だったと、これもナシムとして今日あまり前半触れませんでした、出版事業はたくさんやってまいりました。

で、主に今まではチェルノブイリの実相を伝えるための翻訳の本であったりとか、あるいは逆に甲状腺知

識を伝えるための教科書をロシア語で出版するとか、そういったいわゆる知識の普及啓発事業、そういった中で出版というのをやって、そこで情報を発信するというのをやって参りました。それに加えて今言われたような情報発信をすべきではないかという、ご提案であったと思います。

(関根先生) はい、私も長瀧先生のお話を伺ってほんとにそのとおりだと思っております。山下先生も昔委員だった厚生労働省の原爆医療分科会で、現在私は蒔本先生と毎月一緒に出席していますが、国が裁判で負けていくという実態と、被爆者団体はやはりマスコミ受けが良い、だから国の方はこれだけのお金を出して、戦争犠牲者の中では最高にお金を出して被爆者援護をしているけれど、世の中の目が厳しい、今のあり方がおかしいという声に対して、長瀧先生が入っていただいた「原爆症認定制度のあり方検討委員会」には本当に期待致しました。長瀧先生のおかげで、安心できる場所でおさめて頂き、ほんとうに感謝しています。我々の意見でも、今の国の原爆被爆者に対する援護のあり方にそのまま福島に流れると、とっても心配だと。山下先生が100mSv以下は安心ですよという話をして中身を理解してもらえない、ほんとに科学的なスタンダードがないままに今の国のあり方にいろいろの変節があって、それがそのまま福島に引き継がれると、とっても怖いと思っています。外国からみたら、援護のあり方で、日本はお金持ち、でもやっぱり非科学的な国に見えるのです。

今の原爆被爆者援護のあり方が、日本の科学として福島に継承されることを、恐れています。長瀧先生がおっしゃるようなことで放射線医学というか、放射線生物学といった科学者の考えを国民に理解してもらいたいです。

(長瀧先生) 結局は委員会でも最終的には科学的な根拠をまとめましょうということになって、座長が、僕が座長代理だったのですが、僕にまとめて下さいという話になって、先生は長崎には手伝ってくれる人がいっぱいいるでしょうと言って、結局委員会の委員個人で提出することになりました。

でも個人で科学的にまとめる前に、委員会の被団協の人、それこそ委員会のいろんな利害関係者(ステークホルダー)としての委員が科学的な根拠は全部が

共有すると、そういうことに賛成いただけるなら僕がやりますとお願いしました。全員賛成してくれて科学的な状況は共有する、疫学的なデータの信頼性も共有して、その上でそれに対して補償するかどうかということはもう一つ別の社会的な問題、それは社会の多くのステークホルダーが一緒になって議論するのだというような格好でいきまして、結局は司法の代表の方とか、熊本市の市長さんも入っていて、水俣の補償も含めて補償のあり方とか、そういう日本のステークホルダーが全部議論に参加して、これだけの科学的根拠に対してどこまで補償するか、そんな議論になって、まあ最後は一本にまとまりませんでした。被爆者団体はそれに対して賛成ではないという、それもやっぱり理解できるのですが、その時に日本の東京大空襲の人は補償しないという政治的な状況が関係します。まさにデータは Atomic Bomb Survivor の放射線の影響を見た放影研のデータが中心になった、それはあくまでサバイバル、生き残った人たちに対する放射線の影響を放影研が見たのだという頭をもっておかないと放影研のデータがすべて原爆の被害だとなってしまわないようにしないといけないと思います。

(朝長先生) 今のはどういう意味なのですか。亡くなった人達の。

(長瀧先生) 一般的に言いますと市民の、一般市民の戦争被害者というのは補償しないことになっています。だから、原爆で死んだ人も補償しないということになります。生き残った人が他の戦争被害者と違うのは放射線の影響があることで、その放射線の影響を補償しましょうということです。それは被爆者援護法の前文に書いてあります。

(朝長先生) 他の戦災で生き延びた人にもしないのでしょうか。



(長瀧先生) 他の原爆以外の人たちにはしない。

(朝長先生) 傷ついたりかね、後遺症があるとか言ってもしないわけでしょう。

(長瀧先生) それは、ただ放射線の影響以外はしない、他はしないのですよ、他の戦争被害者はしないのだけど、原爆だけ補償する為に何があるかという、放射線の影響だと。

(朝長先生) まあ、それはわかるのですが。死んだ人と生きた人を分ける必要はないのではないかなと。

(長瀧先生) いろんな援護というのは、例えば引揚者の援護であるとか、シベリアの抑留者の援護とか、それぞれ分けてやっているみたいですけど、そういうところを全体に議論できるとよいと思います。

(高村先生) ありがとうございます、先ほど長瀧先生の方から福島について少し話がありました。先程来、関根先生からもご指摘がありましたけれど、初期のころから福島では非常に情報が錯綜して混乱している部分があって、先ほど申し上げましたように、ナシムが東京で講演会をしたのですが、そのときも非常にいろんな方が来られて、議論百出したということもありました。

そうした中で、例えば長崎と福島ということを考えて、いろんなレベルが、例えば長崎大学と福島県立医科大学の例えば県民健康調査における協力関係もそうですし、若手研究者育成の協力もそうです。そういった中で、ナシムとして「福島には何をすべきか」ということですね。これはずっと福島で第一線で仕事されていらっしゃる山下先生からもご意見をいただければと思いますが、いかがでしょう。

(山下先生) 長瀧先生のお話、かなりナシムのコンテンツの各論だったと思うんですけども、将来に向けてナシムが「どういう立ち位置で活動するか」というマネジメントの話も重要だろうと思います。

ある意味でリーダーシップの話、やっぱり、第一義的には世界のヒパクシャに対してどう医療貢献をするかということが、この会の発足当時の大きな柱のひとつだと思います。そういうラインの中で、どういうマ

ネジメントあるいは、どういう活動の幅を広げるかということ、たぶん今問われているのでしょうか。その一つが福島問題です。従来チェルノブイリやカザフスタンでやってきたことが、どういう形で長崎の活動として、あるいはナシムのコンソーシアムを作っている中に生かされたかといったときのリーダーシップ問題です。私は、この屋台骨を支えている医学部、特に原研の役割は非常に大きいと考えます。であればこそ、朝長先生・関根先生はOBとして常に応援してくれていますし、永山先生、所長で本人あまりそういう意識がないにしても積極的に絡んでくれていますから、これは原研の将来構想とかなりリンクしています。私自身はナシムと原研は表裏一体というか、一心同体、県と市の行政と原研というのはある意味では研究所になったその時点から、かなり大きな役割を担っているのではないかと考えています。

そういう流れ・脈絡で考えますと、福島の事故を経験をした一人として、おそらくチェルノブイリ原発事故と全く同じ初期反応あるいは対応だったのだらうと思います。それを思わせる一つの資料が、ナシムで翻訳をしたイリーン所長の「チェルノブイリの虚偽と真実」です。その本を読むとまったく同じことを福島でも繰り返していると言えます。

(長瀧先生) ランセットにね、ニュースのところでチェルノブイリで長期避難はよくないということを勉強しているのに、また福島で同じことをやっている、そういうタイトルの論文があって反論して書いたのだけでも、僕の反論はとられなくて。

(山下先生) 長瀧先生は常にコンテンツの中であって、中身で勝負されますけれども、恐らく先生、これはナシムのマネジメントというか、さっき話したように今後どういう舵取りをすればいいかということが、たぶんこの座談会の最大の目的だと思います。そうすると福島との兼ね合いは、ナシムの事業の中に大きく入ってくると。福島での活動はナシム



の活動の一つとして位置付けるということが、まず大きな一つの方向性ではないのかと考えます。これまでとは違うのだということをナシム活動の今後に対してとも言える、それが私の一番言いたいことの一つです。

もう一つはやっぱり原研を中心と言った理由は、これはマンパワー、労力が必要なのですね。こういう研修生を面倒みたり、あるいはネットワークを作って、帰った人達をフォローしたり、そういうノウハウをチェルノブイリとずっとこれからも続けていく中で、福島との関係は大学間連携あるいは医師会との連携、そういう太いパイプをナシムと福島にも作るということです。しかし福島には、まだこういうナシムみたいな会はありません。

ですからコンソーシアムを作って連携を作っていくのが一つで、その中に国際ヒバクシャ医療への貢献ですから、国際というキーワードは必ず入るわけです。

福島は「世界の福島」なのですね。放射線の防護とか、廃炉とか、事故を経験したとか、オンゴーイングの事象が起こっていますので、これに対してナシムが培ってきたノウハウをどう生かせるか、ということへも軸足を少し移した方が、マンパワーの有効活用という意味ではとても大事です。

そうすると、たぶん福島が、関根先生がおっしゃったように、同じようなことがいろんな意味で起こりうるとおっしゃいましたけども、これは起こって当然だと思います。ですから、それをどのようにするかというのは、福島の中で考えなくてはいけないし、長崎・広島との連携ということになるので、このトライアングルはある意味で避けて通れない。

ですから、繰り返しになりますけど、交流事業や人材育成や、あるいは国際情報の発信にしても福島と長崎はチェルノブイリもそうかもしれませんし、カザフもそうかもしれませんけど、もうある意味で、ヒバクシャ医療でつながっています。その中の対応策として各論があるのだと思います。高村先生の質問の各論には届きませんが総論として、そういう風を実現して頂けると県や市からも予算がどんどん減らされていますので、予算を確保していただけるという意味では、ここがとても重要なところかなと思います。

私、ものすごく感謝しているのは、震災直後、5月福島に蒔本先生が来てくれたことです。そして、長崎県医師会は多額の支援金を福島県の医師会に寄付したのです。福島県の医師会はそれを長崎大学から派遣し

ている大津留先生のところに回してくれたのです。

こういうことができたというのは、やっぱり医師会と大学との関係、あるいはナシムを含めたネットワークが強固だったということがいえます。そういう見えない所の人的な交流とか応援の素地を、実はナシムが育んでいます。我々、当たり前と思って医師会とか他の人たちと話をしていますが、県としてもそうですけど、こういう横の連携がうまくいっている会はないと思いますので、大学も含めて、これをうまく生かす方向で議論の展開をして頂ければと思います。

(長瀧先生) 確かに医療に関しても、一般的な医療の補助が絶対必要です。でも例えばそういうところを、ナシム的な立場で協力していくということは、すごく具体的に放射線の影響ということだけではなくて、事故による被害で大きなものもいっぱいあるということ、長崎の医師会は十分に知っている、その知識で被災地の医療をどう援助していく、そういうのがナシムの一番独特の持っている力、やっていけるところでしょうか。

(井石先生) 福島で一番印象深いのは、郡山あたりはどうなのですか。

(山下先生) 先生、一番自主避難が多いのは郡山なのです。

(井石先生) あそこにほら、元の日本医師会長、まだ存命でしょう、存命だし、まあちょっと、もうどうかなどは思うけどね、星君というのがおりますよね。彼が、なんか新しい病院を作ったよね、ああいうところが、動いてくれるのではないかな。

(山下先生) 実際、動いていますよ。先生と医師会長との関係は非常にいいのです。

(朝長先生) ナシムみたいな組織は福島にはないわけですね。

(山下先生) はい。

(朝長先生) 福島の現場には、まだ専門家が足りないですかね、今も。

(山下先生) 数は圧倒的に足りない。

(高村先生) そういうこともあって、次年度から長崎大学と福島県立医科大学は共同大学院という形で修士課程を立ち上げますけれども、そういう人材育成というのは時間が当然、掛かります。

(山下先生) 県立医大が持っている関連病院とは、県立病院だけですから、多くは、大きな私立病院が入っている。浜通りは東北大とか、会津は、新潟大とか東大とか、それぞれがやはり長崎みたいに OB が固めているわけではありませんから、そういう意味で長崎に比べると非常にヘテロな集団の県だと思います。

(関根先生) 原爆被爆者の対策費が 1,500 億円を超えているのですね、20 万人被爆者に対して、日本の科学研究費の総額が 2,000 億円をちょっと超えているだけなのにですよ。それに近いだけを広島・長崎の被爆者に分けているということを考えると、福島県民は 200 万人、そのまま長崎・広島の方式を当てはめるとたいへんなことになるなあと感じてとても心配、やっぱりそこに科学というもので、なんとか区切りをつけないといけないなあと感じます。

(高村先生) あの少し話題提供ではないのですけれども、私自身も 1997 年からずっとチェルノブイリに入って、それこそ榎さん達と一緒に、いろいろプロジェクトをする為に、今まで 60 回以上チェルノブイリに入ったのですけれども、その時の経験がいろいろあるのですが、その中の一つとして、やはり未だにチェルノブイリ 30 キロ圏内の方は戻れない、というかおそらく戻らない。

ところが、行けばわかるようにそこでは放射線量が高いかというそうではない、それはなぜかという、やはりあれはもう戻ってもインフラが再興できない、もう一回コミュニティを再興できないということがあります。それが、先ほどおそらく長瀧先生が言われた放射線災害の側面ということだと思います。

今、長崎大学は 2 年半前から福島県川内村に拠点を作っています。これは Choho の特別版ですけど、実は川内村の復興推進拠点を作った一番の原点は、チェルノブイリ 30 キロ圏内があるのです。それは今言ったようにチェルノブイリでは放射線だけのせいだけ

ではなく、いろんな要因があって、最終的にはもう自治体として戻れない、再興できないという中で、川内村の村長は非常にリーダーシップがあって、何とか戻りたいという中で、私達がチェルノブイリの研究を踏まえて、戻れるのだったら

インフラの除染を早く進めてインフラを再興して、戻れるんだったら早く戻った方がいいですよ、長崎大学として、何かサポートしましょうという中で、復興支援拠点を作ったという経緯があります。

恐らくナシムがチェルノブイリからこれだけ研修生を受け入れて共同事業をやってきて、その経験を福島に生かす、というのが一つ大きな役割ではないのかなあと感じますし、川内村は端的な一つの例かもしれませんが、そういった活動をナシムで今後できればというのが、私が今考えているところです。

(長瀧先生) もう一つの大きな問題が補償ですね、補償を科学的にどう考えるかと言ったって、考えようがない。科学的にはこうだということを、きちんと科学者集団は助言すると、その助言に従って社会が考える、みんなで考えてくれるというパターンしかないのではないかと思います。

だから今までの原爆被爆者の補償が多すぎるとか、少なすぎるとか、そこを我々はタッチしない、タッチするわけではない、科学的な理由は別として今回改正された法律も具体的には 1 mSv まで全部入れて補償しているわけですから、それがおかしいとか、おかしくないとかということはなかなか科学的な立場からだけで言えることではないです。

そこから先は委員会のようなステークホルダー、被爆者の代表の人も入るし、政府も入る、そういう国として、あるいは集団としてどこまで補償するかというコンセンサスが出てくることを期待するわけです。

我々は、そういう対話を続ける人に対してまず、科学的に $1 + 1 = 2$ に相当するものは何かということ、きちっと助言する必要があるだろう、ということです。それ以上に出ていくと、大学としても、科学者



集団としてもなかなか言えないところが多く難しいと思います。

(山下先生) 原研の現状ですが、まさに社会学系の専門家はほとんどいませんし、マスコミの専門家もいなければ、法律の専門家もいませんし、もっと言うと補償や訴訟関係にしても、そういう実績もなければマンパワーもないわけです。出来ることは医療協力あるいは、福祉も含めたりハビリなどの復興支援です。この点ではしっかりとしたノウハウが原研にはあるわけですから、復興支援というのは一つの大きなキーワードです。ナシムでお手伝いできる、その為の対応の中で今おっしゃった教育をしていかないといけないし、人材を育成していく。それにナシムの役割というかミッションがまさに重なってくる、という風に、思っているのですが。

(槇先生) 私どものチェルノブイリ事業で申し上げますと、1991年に検診を始めて、その秋に現地のお医者さん、看護師さんたちを日本に招きました。長崎へ来たときちょうど台風がぶつかりまして、レセプションをする予定だったプリンスホテルの玄関の屋根が落ちたから中止、そして泊まっていたホテルは停電で何もお料理できませんけど、冷凍の何かがあるからそれでいいですか、というような状態だったのですが、翌年からはちょうどナシムが活動を開始されたので現地の医師の研修では大変お世話になりました。

私どもの事業が終わってからも、ナシムと長崎大学との協力で現地の医師たちを継続的に呼んではリフレッシュコースとかトレーニングとかをなさって下さっているの、それがナシムの非常に大きな力ではないかなと、私どもの事業から見て感じております。

台風のときは大変でした。長瀧先生が一生懸命頑張ってくださいまして、現地のお医者さんたちを先生がゲームセンターまで連れて行って下さったのです。長瀧先生に「いつもこういうところにいらっしゃるのですか」と伺ったら、「僕は初めてです」と、そういう歓待をして下さったのをよく覚えています。

(長瀧先生) あの台風の日でしょう、浜の町まで二次会に行った。いきなり台風なので、原先生が学部長で、原先生の一声で、開けてもらった。そこらへんは、ほんとに個人プレーみたいな恰好で、お呼びした方の接

待に努力しました。

(槇先生) その翌年からはナシムが間に入って下さって。

(高村先生) そういう長年の研修実績、いろんな形でそれを先生が個人ベースも含めて、いろいろ研修してあげて、チェルノブイリにずっと行って、福島事故が起こって思うのですが、確実にチェルノブイリ、向うに我々の応援団がいると思うのですね。

それで何がありがたいかというと、福島の災害が起こってから、例えば先ほど言ったウクライナのクロステンの診断センターの副院長先生が、長崎大学が言っていることは間違っていないと、福島の今後に関してもちゃんと正しい科学的メッセージをウクライナから出してくれる、そういう応援団がいるということはとても我々にはありがたいです。これはナシムのこれまで培った力のはっきりした形として出ているのだらうと思います。それが福島復興にも役立つ、一つのサポーターになってくれているというのは、非常に大きいと思います。

(朝長先生) 福島県民が今、かなり移住された方もおられるけど、圧倒的に残って、そのまま生活している人が多いでしょう、そこが、僕は非常に重要な点だと思います。その人達は今どう思っているかということが、ときどき日赤の福島支部の人達と会ったときに聞くのだけど、まあ長崎大学の先生方が言っていたとおりですよ、という受け止め方が多いという風に聞くのだけど、それは間違いはないのですかね。

(山下先生) そうですね。まだ、いろいろな人がいて、帰るのは大変なのですけど。

(朝長先生) それは、いろんな人がいるのだけど、あくまで一部であってね、マジョリティの人は生活を続けておられてですね。自分の経済





的基盤を持って、福島において、やっていこうと決意している人達が、基本的にマジョリティがいると思うのですよね。その人達は、ああいう先生の説明とかなんかの

とおりでなあと、一応理解している人が多いですよ、いつもそういう返事が返ってくるのですよね、それが、本当ならば、僕はあまり心配しないのです。

その、去った人というのは、放射線の理解力とか、いろんな最終判断がやっぱり決定された段階というのがあって、もう福島を去ろうと決心しているのかもしれないし、長崎・広島の場合も、もう長崎・広島に住むのはやめたといって移住した人も結構多かったと思うのですよね。

帰ってこなかった人もいる。まあ、こういう事故においては避けて通れないところですね、国民全部が100% ああいう権威のある機関が説明したことを信じてですね、それに従って行動してくれるというのは、理想はそうですけど、なかなか放射線というものに関してはそうはいかないというのがチェルノブイリのときも、福島の時も再現されているわけで、これはえいやとなかなか解決できない。

たとえば100mSv以下のどこからだったらじゃ安心だと言って、90%以上の方がそれで納得の線が出せるのか、僕は今の状況では出せないように思うのですよね。そういう意味で、あるところまで踏みとどまっているというのが、僕は非常に重要ではないかなと思うのですけどね。それは何%ですか、80%ですか。あるいは90%ぐらいなのではないですか。そういう見方も大事ではないかなと、思うのですけどね。

(高村先生) 蒔本先生、今年春に川内村も含めて福島に行かれたと伺っています。震災直後にも先生行かれたわけですけど、それから比べて4年間経って先生の印象は如何でしょうか。

(蒔本先生) そうですね、4年前の震災直後には、長

崎県医師会 JMAT を組織し、4月初めより5月15日まで放射線被害が取り沙汰されていた南相馬市に行ってきました。

南相馬市では、避難所や在宅の住民の方々の診療や検診などを行いました。原発より20km圏内で進入禁止となっておりましたので、南相馬市の小高地区までしか南下出来ませんでした。今年5月の連休に福島市へ行く機会がありましたので、レンタカーを借りまして、伊達市を通過して相馬市へ入り、前回津波で大きな被害がありました松川浦港に行きました。漁港も見事に復活し民家や商業施設も再建されておりました。それから津波の甚大な被害がみられた海岸道路を南下しますと、津波の被害の傷跡はなく、海岸には高い防波堤が連なっておりました。南相馬市は道路も建物も立派になり、また人通りも賑やかで十分に回復している様子でした。

南相馬市のインターより常磐自動車道を南下しましたが、浪江町、双葉町あたりでは高速道路の放射能レベルが急上昇していくのに正直驚きました。又、高速道より海岸側の地域では立派な大きい民家が放置され、周囲も手入れされていない様子を目にして現状の厳しさを痛感し、今後の対応が大変だとの印象を受けました。常磐富岡インターから高速を降り、長崎大学の拠点がある川内村へ行きました。連休のため住民の方とは会えませんでした。役場の向かいの食堂で腰の強い美味しいソバを食べることができました。その後、田村市へとまいりました。川内村はまだ避難されている方も多く聞いておりましたが、水量の豊富な川があり、周囲の山も大きな木々に覆われており、自然豊かな素晴らしい環境の村であると感じました。この村が今後どのような経過をたどって復興するのか興味深いところでもあります。

(高村先生) 川内村で言うと、人口2,800人だったのが、今6割は戻ってきて、だいたい村として復興の実感がわくのですけれど、その一方先生がいわれるように、まだまだ戻ってきていない自治体があって、そういう意味では復興の二極化が進んでいて、たとえば、いわきなんかでは非常に景気も上向いているのだけど、やっぱり依然として避難を余儀なくされている方もいるのが現状です。

最近我々がやった調査なんですけれども、住民の方に放射線と健康について聞いてみると、この意識も

はっきり二極化しているのです。というのは、例えば、住民の方に今回の事故の影響で将来がんになる人が出てくる、増えると思いますかと質問すると、大体半分ぐらいの人が増えると回答されます。で、さらに将来遺伝的な影響が出るとは思いますか、と質問すると、やはり半分ぐらいがそうだと回答されます。

半分ぐらいの人が出る、半分の人はいないと、避難していない方でもやっぱりそういう風に思っている、ということでは放射線に対する認識が違うけれど、いろんな要因があって、やっぱり自分は留まる、自分は避難するという選択をされていらっしゃるのではないかと考えられます。

留まっていられる方でも、そういう認識を持っていられるのは、思った以上に復興が進んでいないことに対する不信感というのがすごくあると思うのです。

ナシムの話に戻るとやはり大学が入っていて、医師会が入っていて、病院が入っていて、放影研が入っているという中で、おそらく、ある意味の総合的な科学の部分で、先ほど言ったように 100mSv の意味についてのメッセージを発するという部分、そして医療を含めたコミュニティの再編に向けた協力もできるという種、医療福祉の面で、総合的に支援交流できるというのは、ナシムの一つの強みかなと思っています。

(朝長先生) そのアンケートの取り方なんだけど、やっぱりがんになる人が将来出るのだと、イエスという人が 5 割ぐらい、そうではない人が 5 割、二極化ということなだけで、ほんとうはそういうリスクが、どのぐらいのリスクかという量的な尺度があると思うのですね、だからそのリスクはちょっとあるかもしれないけど、相当低いリスクだとか、そういう理解の方が、僕はほんとに正しい理解だと思うんですね、それが日本人の場合なかなか芽生えないというか、そこに我々専門家もそういう風に判断できるようにずっと教育をするというか、してあげられないというか、難しさがあるわけですね、それは現在の、今の日本の問題だから将来に亘って努力しないと改善しないと思うのですね。

だけでも、そこで生活して復興していく間に、原爆被爆者と同じで、被爆者などはもっと深刻で、もう自分の身内もかなり亡くなったとかですね、もっとそういう不幸せな状況で、しかも自分の結婚も非常に悩ん

で、悩んだ挙句に結婚するとかね、その時差別もあるとかね、子供ができたらできたで、奇形がないとか、そういうものの中で、もう死にもの狂いで生きていく間にそんなにひどい奇形も出てこなかったと、健全な家庭を営めたとか、そういう実績としての復興の証みたいなのが蓄積していくことが最後に力になっていったと思うのですね。

それから広島の人人口なんかもトータルで元のレベルに回復したのに 30 年かかっていますものね。30 万近くが、ドーンと減ってですね、それから元のレベルに戻るのに 30 年、その後は急速に今 100 万都市になっているのですよね。だから 30 年かかったのですね。

そのくらい、原爆というのは影響を与えるわけで、長崎はもうちょっと人口の減少も少なかったからね、そんなに回復に時間がかかっていない。

(長瀧先生) 今、原爆被爆者に同じようにどれぐらい放射線の所為だと思いかと質問したらどうなりますかね。

(朝長先生) そういう調査はあまりやっていないですよ。今はね。

(長瀧先生) だから、補償と関係。

(朝長先生) それは、先生、僕の経験からすると、もう 4 km、5 km 以上のほとんど放射能を浴びていない人たちも、がんになって原爆病院に入院してくると、ほぼ 90% は原爆の為だと思っていますよ。

(長瀧先生) ほんとうにそう思っているのですか？

(朝長先生) 本当にそう思っていますよ。インテリジェンスの高い人は、区別して考えていますけどね。多くの方はもう混同していますね、あきらかに。これを払拭するのが僕の仕事だったのですが、たいへんですよね。ある時期にあきらめましたね。もうあんまり、それを言うと、怒られるのですよ、やっぱり、ほんとに怒ってしまうのですね。

(長瀧先生) よくわかりました。

(朝長先生) だから、先ほど言ったように、リスクの

程度をね、正確にこう、ちょっとはあるけれども、それは相当低いリスクだと、何かと比較しながら受け止めてくれる人というのは、それはすごいですよ。

(朝長先生) 特に今もう平均年齢が 80 歳でしょう、子供の時に被爆していても、80 歳ですからね、その人ががんになってですね、あるいは MDS になって入院してきた場合ね、それは、なかなかあなたは 7 km だから、放射線はほとんど浴びていないといってもですね、“あ、そうですか”と言って、ぱっと切り替えられる人というのは非常に少ないですよ。そこが問題。

(井石先生) 昔ね、松岡教授ね、あの人のがんがね、被爆者には骨髄の変化が、非常に特異性があるのだと、ブラストフォーカスという、僕はよくわかりませんけど。

(朝長先生) 再生、僕は見たことがあります、実際、西森教授から見せてもらった、これがブラストフォーカスだよというのを、たぶん、ステムセルからの回復が始まって。

(井石先生) 今でいえばね。

(朝長先生) フォーカスですよ。

(井石先生) それが、ほんとに原爆の証拠になるのかどうかという。

(朝長先生) まあ、再生起点というのの証明になっている、と思いますけどね、それが起こるためには、相当そこだけ骨髄線量があったとみていい、と思いますけどね。

(朝長先生) その途中で、いっぱい亡くなっている人がいるんですよ。剖検例でみられている。もうちょっとがんばれば、好中球が出てきて、生き延びたという人が感染症で亡くなっているね、それを松岡教授は丁寧に見られて、ブラストフォーカスという・・・

(井石先生) あなたがいう、骨髄の染色体に異常があると、MDS なんかになるのだという説なのですね。それは、そういう可能性はあるわけですね。

(朝長先生) 染色体でいえば、松岡先生が見られたのは、昭和 20 年の直後の剖検例で、もう既に回復期に入っているのがありましたよ、ということなんですけど、その当時白血病の初期という考えもちょっとあったわけですよ、芽球が集まっているから。

(井石先生) 僕ら、講義で習ったものだからですね。

(朝長先生) 今、骨髄移植したあとに、2 週間後に骨髄が回復するときには、ブラストフォーカスですよ、まさに。まあ、しかしきれいな芽球で、形態学的にはぜんぜん Cancer Cell ではないですよ、それはちゃんと分裂して、好中球までなっていく細胞ですよ。

(朝長先生) だから、やっぱり、ちょっと福島の方は時間があるのではないかなあと基本的には思っていますよね。マジョリティの人がそこに生活している人とか、回復の原動力、山下先生がいわれる復興の原動力になる。そこをサポートしていくのがナシムの、長崎の被爆者医療の経験を持っている我々ができることではないのかなと思いますけどね。

(関根先生) 僕は辞めてから 6 年、大学時代に動物に放射線をかけて急性障害をずっと研究してきた。ほんとに再現性が高くて N は 1 でもいいのです。一匹でもほんとに再現性が高い、放射線が起こす生物に対する傷害は確実に間違いのないと思います。一方、晩発性障害としての発がん実験では放射線をかけて大腸がんをつくるのにたいへんな量をかけて、苦労したことがあります。

また、長崎には被爆者の疫学データで、特に放影研ががんばったデータがありますから、中心から 2.5 km でやっと、確実なのは 1.5 km 以内です。疫学的に、その時の線量もしっかりわかっていて、だから、福島に対して、長崎・広島の科学的なデータをどうやって浸透させていくのか、不安をなくしていただけるのかな、無駄遣いをしないですむのかなというのが、やはり長崎被爆者研究者の責任かな、加えてナシムと HICARE の仕事の一つかなと思うのですよ。

(朝長先生) 原爆との比較で、皆さんに影響は実はあるかもしれませんが、これくらいの低さですよ、とかいう説明はなかなか通じないのですか。

(山下先生) 先生、なかなか難しい問題があります。

(朝長先生) 先ほど、先生がおっしゃった、どこかの権威的なものを作り上げてですね、そこでバチッと、何 mSv だとか言えればいいですけど、先生、それがなかなか言えない。

(井石先生) あれは、また、大騒動になりますよね。

(山下先生) どこかで線引きすれば、その上と下で、また大変ですね。

(関根先生) 原爆は一発だったからね、一回だけだからね、土壌汚染、原爆のあれは、あまり参考にならないものですね。

(山下先生) チェルノブイリが参考になるわけですよ。

(関根先生) やはり、チェルノブイリでしょう。

(長瀧先生) 長崎も疫学的にどうだということは学問としてかなり説明できます。その他のリスクとの比較も、話も充分できる、そこまでいって納得したら、今度は原爆は 1 回だけけれども、長く繰り返して浴びた人との違いはどのなのだという質問になり、その比率をどう考えるかということについての的確なデータはないんですね。

(朝長先生) 理論はありますよ、2 分の 1 ぐらいになりますよとか。

(長瀧先生) 2 分の 1 とか、10 分の 1 かね、最近は 1 になってきた。

(山下先生) このナシム活動は、広島・長崎が中心のがんばりが源泉であり、ある意味で、非常に大きな遺産だと思います。なぜかという、朝長先生が今がんばっているように、核兵器を使ったらおしまい、使った後は対応できないし、使ったらどうしようもないから、同じように原発事故を起こしたらダメだというメッセージなのですね。グローバル化対応で、国際ヒバクシャ医療協力ということが本日のメインテーマですけど、その流れの中に福島原発事故というのが出

てきました。もう一步先に進めば、原子力災害医療をどうするかということにつながります。

再稼働しないことが一番いいことかもしれませんが、しかし、再稼働する以上

は、やっぱりこういうふうなことを起こさないためのアプローチが不可欠です。我々は起こったらこうですよ、大変ですよということを言える。だから、こうしないがために、じゃ、どうすればいいですかというフィードバックが、ハード面だけではなくてソフト面でのフィードバックが必要です。そういうアプローチを、今後原子力災害医療の中でも、ナシムがいいのか、長崎大学病院か。あるいはコンソーシアムをつかった広島・長崎・福島が一緒に活動することも考えられます。

(長瀧先生) 自然放射線で何か影響があるかというときに、コントロールがないからわかりませんというしかない、そしたらわからないから、怖いになってしまう。

たとえば、自然放射線は我々の人類が始まった時から、我々生まれた時から毎年受けてきているのだから、我々の現在が、その結果だから何もその害があるかないという言い方はできない。しかし年間 2 mSv 以上というのは世界中の人間が誰でも浴びている線量であるということはせめてわかってもらえるだろうと思います。

すると、そのレベルの放射線で何か起こると恐怖、怖いという、もう 1 mSv まで入ってしまう。そこらへんの、議論はある程度科学的にというか、誰にでもわかるように話してはできるのではないかと思います。ICRP が防護という立場の勧告から成立した防護の法律と、科学的に影響があるということとは全然別なのだと、そういう基本的なところ、やっぱり科学者コミュニティが社会に対して言うべきではないかなと思っています。



(山下先生) はい、そう言っているのですが、日本学術会議でも、国内外でも、なかなか難しい問題です。

(長瀧先生) 科学者コミュニティの助言すら、日本ではうまくいっていない。あたりまえのことが、うまくいっていない、他の国に行って、説明のしようがないと言っているのですが、他の国ではどうでしょうか。

(朝長先生) 他の国も、それができるんですかね、例えば、アメリカも福島並の事故が起こった場合、できるのだろうか。

(長瀧先生) アメリカだったらできるかと考えてみました。例えば大統領が出てきて NAS や NRC の責任者と一緒にテレビに出て、NAS がこう言うから、アメリカは今後 5 mSv は別に問題にしないのだと言ったときに、国民が納得するだろうか、やっぱりそうはいかないだろうということになりました。

(朝長先生) だと思いますよ、ロバート・ゲイルという、骨髄移植をチェルノブイリのときにしに行った男が、本を書いていますけどね。そこをくどく書いていますよ、アメリカ人でもそういう常識はないから、自分はこういう本を書いているのだと、自然放射線のところから、ずっと、書いていますよ。

(高村先生) まあ、福島の話から随分と、いろいろ議論しましたがけど、少し話すべきこととして、来年が先ほど言いましたけど、チェルノブイリ 30 周年ということになります。チェルノブイリからずっと研修してきて、そこから得られた知見が福島に繋がっているという中で、今後チェルノブイリから 30 年経過して、では、ナシムは「どう取り組むべきか」といったことについて、ご意見を伺おうかと思うのですが、あのこれ、よろしければ、楨さん・・・。

(楨先生) 私には非常に難しいご質問だと思うのですが。私はやはりナシムには教育・研修の面を続けていってほしいと思います。これは、これまで何人の研修を実施したかということもあると思うのですが、一つのナシムの大きな同窓会が出来るのではないかと思います。

例えばフルブライトなんかもちろんと名簿があっ

て、ニューズレターみたいなものが来ますよね。ナシムもそろそろそういう研修者に対して何か情報発信をするようなのはいかがかなと思っています。

私はチェルノブイリ事業が終わってから財団では日中医学奨学金制度という事業を手伝いました、それは毎年 100 人の中国の医師・医療従事者を 1 年間日本で研究・研修してもらうという制度で、長瀧先生や山下先生のところでも研究生がお世話になったことがあります。その制度が 20 年で一応終わらして、医学（広い意味での）という一つの分野で 2,000 人なのですよ。中国の人口が大きいですから 2,000 人は大した数ではないかもしれませんが、その方たちは大体東部沿岸部に集まっております。それで帰国した方々が同窓会組織を作っております、1 年に 1 回学術研究会のようなことをやり、また日本で指導教官だった方をお呼びしたりして交流もしているようです。

これまでナシムに招聘された研修生も相当な数ではないでしょうか。一つの、各地で情報を発信するような団体もできるのではないかなとちらっと思いました。

(朝長先生) ナシムのあり方というのは、5、6 年前 1 回やりましたよね。僕は座長をさせられた、あのとき今のようなお話が、確か出ましたよね。こちらに研修に来られた人たちが現在までにね、どういう風なキャリアをとったり、どういう仕事に携わって実際、現在も後影響というかな、後障害を続けてやっておられるか、見えてこないねという話があったのですよね。だから、今の話は大事なところじゃないかな。

(高村先生) ナシムとしては、フォローアップ事業ということで、専門家派遣ですね、チェルノブイリなりセミパラチンスクに行っていたりして事業をしています。ただ今言われたようにかつて、旧ソビエト連邦は全然通信がよくなって、FAX も電話も通じないという時代が長かったのですが、今や E-mail で簡単に送信できるようになりましたので、研修生のネットワーク E-mail レターではないですけど、そういったのが昔に比べ格段につくりやすい状態になっていると思います。これはぜひ今後検討させていただきたいと思います。ありがとうございます。

(楨先生) それで、私は一時、中国に帰った方たちに、

たとえば年末に日本のカレンダーを送ってあげるといのはどうかな、と提案したことがあるのです。残念ながら予算が取れず出来ませんでした。

(朝長先生) メモリーがつながってきますよね。

(槇先生) ええ、そうなのですよ。ですから、なんかそういう、いらっしゃい、さようなら、ではなくてその後のフォローアップが大事なのではないのでしょうか。

(高村先生) 研修生のOB、OG会ではないですけど、そのネットワークですね。それは確かに、先ほど言いましたけど、そういう方がたとえば福島の方に慣れてくれたり、応援団になってくれたりとか、というような効果もありますから、これはとっても大事だと思います、はい。

(朝長先生) 関根先生も、僕も第2世代の原爆研究者なのだけれども、僕らが始めた頃は、原爆の影響はそのうち終わってですね、方向転換せんといかんかなあということが、他の先輩の教授連中は言っていましたよね。もう、白血病も出ないようにしているとか、言っていたんですけど、あにはからんや、ずっと続いていったのですよね。たぶん、チェルノブイリも続くのだらうと思うんですけど、そこらへんの、たとえばベラルーシの国としてのシステムとかは、長期的に動いていくようにもうなっているのですかね、なっていないのですかね。そこがちょっと、この前IAEAの会議で、ベラルーシからきていた女医さんの話を聞いていると、ちょっとどうかなあと思ったのだけど、構築はもうされているのですかね、きちっと。

(高村先生) これ、さきほど言った医療インフラ、かつては非常に立ち遅れていましたけど、山下先生。

シという国は実は非常にルカシェンコ大統領の強権で、ロシアとヨーロッパの間において、非常にうまく立ち回っているのです。それは情報を統制しているところがあるので、医療に関してもですね。例えばテッシュバンクには入る時からドロップアウトして加わらないし、自分たちの価値判断というか、情報コントロールであると、非常に強いのです。それはかなり政府のコントロールを受けているというところがあるので、先生の御懸念はたぶんある部分は当たっていると思います。それから、ウクライナはどうかというと、ロシアとああいう紛争状態になり、今とても大変なのです。ウクライナの方が自由なのですが、言いたい放題言うだけ逆にバラバラなのです。

(朝長先生) その中で、研修に来て、帰って行った人達が。

(山下先生) ええ、医療はちゃんとやってくれています。研修した中で、基礎研究者に何人か残っています。我々は、非常にいいことに昔、今はやっていませんけど、ナシム指導者研修というのをやっていました。

院長クラスを短期間招聘していました。そういう方々が非常にいいサポート役になっていますし、永井隆平和記念・長崎賞の受賞者は、ほとんどトップの方々ですから、現地でナシムや我々との共同事業の関係とかは、非常によく保たれていると思います。これは財団での活動財産が引き継がれていると思います。人的なネットワークが今唯一大きなパイプで、先生がおっしゃった記憶の伝承というか、そういうものをうまく重ね合わせていければより良くなると思うのです。

(槇先生) やはり私たちの事業はチェルノブイリに支援というよりは、協力というような形だったのです。ちょっとデータを見つけたのですけれど、最初の5年間で、現地に専門家の派遣、先生方、それから最初のころは医療機器メーカーの技術者も、メンテナンスの人たちも、財団の職員も含めてなんですけど、延べ330人に現地へ行って頂いています。大体お一人が1週間から2週間くらい行くとして、平均一人10日すると述べ3,300日。ということはもし一人を派遣するならば、9年間くらい滞在することになります。それくらい先生方が現地へ行ってくださって、現地の人たちを指導してくださった。そこがとても大きな力に



(山下先生) 私もここ数年は行ってはいないのですけど、ただ、先生のおっしゃることがよくわかるのは、ベラルー

なっているのではないかと思います。

(高村先生) これは、山下先生どうですかね、そういったこれまでの長年のネットワークを考えて、チェルノブイリというのは、これからも重要な事業になると思いますし。

(山下先生) このチェルノブイリの写真を見て、20 周年、そして今年この 7 月に撮られたこの写真、30km 圏内というのは、先生おっしゃったようにイリーガル



には入っていませんけど、リーガルには立ち入り禁止です。だから、これと同じとは言いませんけど、福島のもうひとつ、廃炉作業なんか、後処理も大変な状況になるだろうと思います。

原子力災害という大きな括りでいくと、これもひとつの負の遺産であり、長期にわたり我々の力が必要なのです。チェルノブイリというのは、そういう意味では悪い言い方かもしれませんが、福島原発事故の先輩格に位置づけられます。ぜひ、チェルノブイリとこれからもやりつづけなければいけないし、我々も学ぶことは多いのではないかと思います。ナシムでやってきたチェルノブイリとの人的なパイプ、それから実績というのは、非常に大きな財産になっていると思います。

(高村先生) ありがとうございます。その他にか今後の、ナシムのあり方について提言がございませうでしょうか。あの、一つ、ずっと言われていることなのですが、先ほど朝長先生の話にありましたけど、ナシムがこれまで 20 数年間活動してきて、じゃ、どれくらい認知度があるのか、みなさんどのくらい認めて下さっているのか、ということがいつも議論になるのですね。あり方検討会の時もありました。これは単に有名になればいいという問題ではないと思いますけれども、県と市からそれぞれ税金を頂いて運営している組織ですから、情報の還元であるとか、どうしても必要になってくると思います。先生方から、何かこうい

うことでもっと情報の発信をすべきではないかということがあれば、ぜひご提言いただければと思います。いかがでしょうか。

(井石先生) 県からくる、市からくるね、あれ、だいぶ減らされたのですか。

(高村先生) 一時期に比べれば減っておりますけど。しかし、この数年は、ほぼ横ばいですね。

(関根先生) 今、千何百万ですか。

(山下先生) 韓国への支援額を別にして、1,400 万円か。

(高村先生) 一番あった時と比べれば、半分になっています。

(朝長先生) 韓国の健康相談事業は別でしょう。

(槇先生) ナシム主催で、福島でいろいろ何か、住民向けの会議など。東京ではやりましたね。一般向けに。科学的なシンポジウムでなくていいと思うのですけれど、「ナシム主催何々」というのをいろいろなところでなさったらいかがでしょうか。確かに私たちはナシムを知っていますが、他の県の人に聞いたら。

(山下先生) いや、だれも知らないようです。

(長瀧先生) HICARE で、原爆の特集が出ていたでしょう。僕は放影研に行ったときは、HICARE の理事長になる直前まで、話が厚生省からすすんでいたものですからね、なったら、ナシムと HICARE と一緒にして、そして原爆の教科書をつくらうと思ったのだけでも、今度できた特集にも長崎が入っていないものだから。

(山下先生) 入っていますよ、2012 年の改訂版にはナシムのことも入っています。

(関根先生) データが広島と長崎のデータ。

(山下先生) それは、しょうがない。

(朝長先生) ナシムの共同出版だとか、そういうレベ

ルではない。

(山下先生) あの時、お声がかからなかったの。

(朝長先生) 第二版ですからね、しょうがないですね、広島が最初につくったのですから。

(関根先生) まあ、病理の方からいうと、今先ほどチェルノブイリでは、チェルノブイリティッシュバンクがあって、今も活動しています。やはりチェルノブイリの資料は人類にとってすばらしい財産になっているのではないかと思います。広島・長崎ももう被爆者の平均が80歳を超えて、あと10年経つとほとんどいなくなってしまう。

やはり、生体試料を残さないといけない。わたしの後任の中島教授も原爆病院にお願いして-80℃で、被爆者の組織を保存しています。また、パラフィンブロックは長崎市内関係の病院施設では捨てないでいるけど、カルテは5年で捨てるということで、問題なっていますけどね。

なんとか被爆者のデータを残したいなあと思うので、ナシムが関心をもってもらえばいいなあと思う。原爆病院で、相川先生がカルテとかを何とかを保存したいなあということで今活動されている。

(朝長先生) 厚労省から予算つけてもらえれば一番いいですけどね。

(長瀧先生) 本当に長崎は、病院のパラフィンブロックは広島に比べて、ちゃんと残っていました。池田先生が非常にがんばっておられました。あれは、まだ、きちっと残っていますか。

(関根先生) はい、パラフィンブロック、長崎の病理施設では絶対に捨てないでねとか、そして保管場所が狭くなったら、大学に場所がありますから、ちゃんと保管します。そうすると、人間の塩基配列が明らかになってきているのですが、将来、バラバラになった遺伝子をコンピュータでつなげる時代がきたら、原爆放射線が人体に何を起こしたかが科学的に明らかになるのだろうかと思っています。いつになるかわかりませんが、材料がなければどうしようもないですが。

(朝長先生) まだ、いまから相当、がんが出ますね、あと15年。

(高村先生) そういったデータのアーカイビングは、原研の状況は永山先生いかがでしょうか。

(永山先生) 中島先生がパラフィンブロックは整理していますし、関根先生が言われた、新鮮な組織の凍結ですね、あれはもう、550か600ぐらい集まっているのと、もう一つは昔のFFPEのプレパラートが何万枚かあるのです。あれが劣化しているので、全部をデジタル化するというのを、機器を入れて今年から始めます。

(長瀧先生) プレパラートもどんどん捨てられる時代になったのだよね。

(永山先生) 今、デジタル化して自動で取り込めるので、顕微鏡を購入して、そういう財産を保存していかないといけないですね。ですから、基本的にデジタル化できますから、お金と人が要りますけど。

(朝長先生) 相川先生に言わせれば、世界遺産になる可能性があるというんですけどね。

(高村先生) 生体資料については、長崎大学、原研中心にやっていますが、そういったデータのアーカイビングというのは、今後重要ですし、そのなかで、ナシムの果たすような役割、これはチェルノブイリのデータのアーカイブも含めて必ず未来に発信できる情報になるでしょうから、これはひとつの、ナシムの役割かなと思います。

(長瀧先生) 生体資料について何をしなければならぬかという議論のときに、比治山に穴を掘って、今あるサンプルを全部封印して100年後まで開けないということにしたら、もっとも役に立つという話もしたことがありますけど、生体試料はほんとに大事です。

(高村先生) ありがとうございます。種々、ナシムについてご提言いただきましたけど、そろそろお時間となったようです。被爆70周年とナシムということで、これまでやってきたこと、これからの活動に向けての

提言ということで、長時間に亘ってご意見をいただきました。今回の座談会の内容については、今後出版事業の中で出版していくことにします。

また、今日いただいた特に提言につきましては、運営部会等でも提示しながら、今後のあり方というもの考える貴重な材料とさせていただきたいと思います。先生方お忙しい中、今日は長時間この座談会にご参加いただきまして本当にありがとうございました。ここで、司会の任務を降りさせていただきます、どうもありがとうございました。

(司会) 高村先生、ありがとうございました。皆様大変長時間に亘り、ありがとうございました。これからのナシムの活動に向けて、大変に有意義なご意見を頂戴できたと思っております。皆様からのご意見をもとに国内外のあらゆる機関との連携協力を深めながら、さらに幅広く活動できれば良いと思います。皆様にはどうか、これからもナシムの活動をご支援いただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本日、本座談会を主催していただきましたナシムの蒔本会長にお礼を申し上げます。本日はお忙しい中、大変長時間に亘り、ご参加いただきまして誠にありがとうございました。これで座談会を終了させていただきます。ありがとうございました。

=座談会第2部終了=



2. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の概要

(1) 名 称 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

(NAGASAKI ASSOCIATION FOR HIBAKUSHA'S MEDICAL CARE)

略称 ^{ナシム} / NASHIM

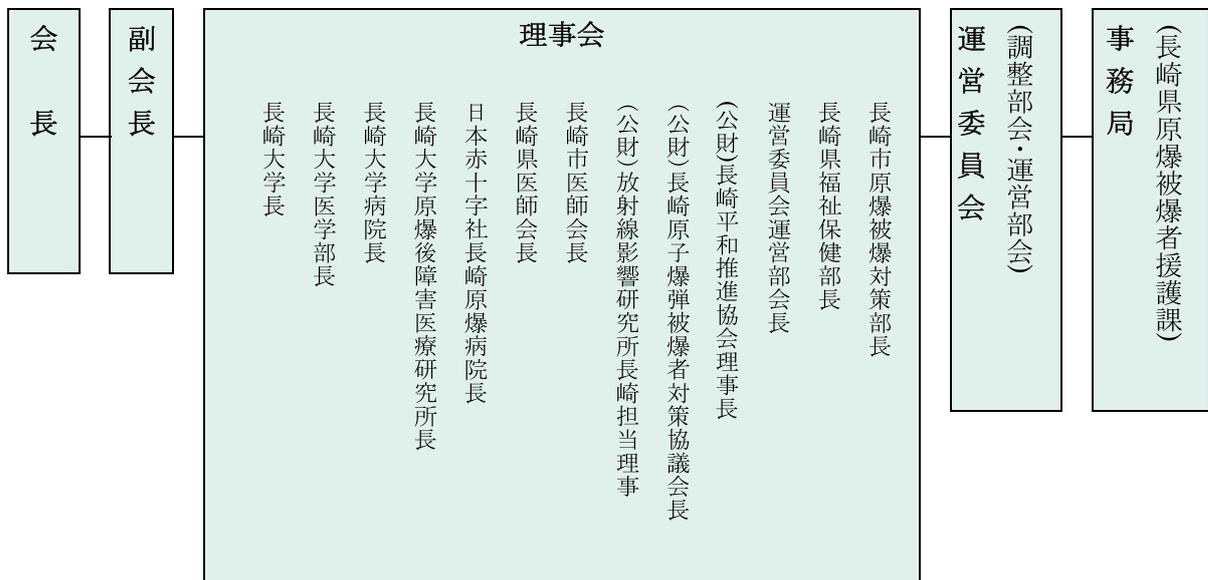
(2) 設立の目的

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)は、在外ヒバクシャ及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として設立した。

長崎が有する被爆者医療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果をこれらヒバクシャの医療に有効に生かしてもらうため、国外からの医師等の研修受け入れや国外への専門医師等の派遣、医学教科書の出版・寄贈及び永井隆平和記念・長崎賞の授賞などを実施し、ヒバクシャ医療を通じ長崎から世界への貢献と国際協力の推進に寄与する。

(3) 設 立 平成4年(1992年)4月1日

(4) 機 構



ホームページアドレス

<http://www.nashim.org/>

メールアドレス

E-meil:info@nashim.org

(5) 役職者

NASHIM役職	所属団体	役職名	平成4年度	平成5年度	平成6年度
会長			土山 秀夫	今村 臣正	今村 臣正
副会長			今村 臣正	原 耕平	原 耕平
理事	長崎県医師会	会長	今村 臣正	今村 臣正	今村 臣正
	長崎市医師会	会長	石川 壽	石川 壽	石川 壽
	長崎大学	学長	土山 秀夫	横山 哲夫	横山 哲夫
	長崎大学医学部	学部長		原 耕平	原 耕平
	長崎大学医学部附属病院	病院長		隈上 秀伯	隈上 秀伯
	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(H14～)	科長	—	—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(H25～)	施設長	—	—	—
	日本赤十字社長崎原爆病院	病院長	迎 英明	迎 英明	迎 英明
	(公財)放射線影響研究所長崎担当	理事	嶋岡勝太郎	嶋岡勝太郎	長谷川 豊
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	会長	宮崎 藤美	本島 等	梶 兼行
	(公財)長崎平和推進協会	理事長		—	—
	運営委員会運営部会	部会長		長瀧 重信	長瀧 重信
	長崎県福祉保健部	部長等	石野 誠	石野 誠	石野 誠
	長崎市原爆被爆対策部	部長	加藤 彰彦	江口 圭介	江口 圭介
調整部会部会長		事務局長		安田 實徳	安田 實徳
調整部会副部会長		事務局次長		松永 朝春	横田 秀雄
	長崎県医師会	事務局長		吉原 弘二	吉原 弘二
	長崎市医師会	事務局長		矢崎弦一郎	矢崎弦一郎
	長崎大学	国際主幹、国際交流課長、学術国際課長		永井 俊夫	海内 保男
	長崎大学医学部	事務長、事務部長		宅嶋 文夫	宅嶋 文夫
	長崎大学医学部附属病院	事務部長		大坪 義孝	大坪 義孝
	日本赤十字社長崎原爆病院	事務部長		菅 健太郎	渡辺 才人
	(公財)放射線影響研究所	事務部長		中岡 雅	中岡 雅
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	事務部長、事務局長		勝田 成彬	勝田 成彬
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長		安田 實徳	安田 實徳
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長		松永 朝春	横田 秀雄
運営部会部会長				長瀧 重信	長瀧 重信
運営部会副部会長				山下 俊一	山下 俊一
	長崎大学医学部(第一内科)	教授		長瀧 重信	長瀧 重信
	長崎大学医学部(第三内科)	教授		—	—
	長崎大学医学部(第二外科)	教授		—	—
	長崎大学医学部(小児科)	教授		辻 芳郎	辻 芳郎
	長崎大学大学院(放射線診断治療学)	教授		林 邦昭	林 邦昭
	長崎大学大学院(精神神経科学)	教授		—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研幹細胞)	教授		近藤 宇史	近藤 宇史
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研放射)	教授		奥村 寛	奥村 寛
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研内科)	教授		朝長万左男	朝長万左男
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研医療)	教授		山下 俊一	山下 俊一
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研遺伝)	教授		新川 詔夫	新川 詔夫
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研病理)	教授		関根 一郎	関根 一郎
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研国際)	教授		—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研分子)	教授		—	—
	長崎大学先端生命科学研究支援センター	教授		—	—
	日本赤十字社長崎原爆病院	内科部長、副院長、外科部長		松尾 罌	松尾 罌
	(公財)放射線影響研究所	疫学部長、臨床研究部長		柴田 義貞	柴田 義貞
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	中央検診所長		—	—
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長		安田 實徳	安田 實徳
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長		松永 朝春	横田 秀雄
事務局長	長崎県原爆被爆者援護課(H20名称変更)	課長	安田 實徳	安田 實徳	安田 實徳
事務局次長	長崎市原爆被爆対策部調査課	課長		松永 朝春	横田 秀雄
会計監事	長崎県原爆被爆者援護課	統括課長補佐	朝生 典賢	内田 正憲	内田 正憲
会計監事	長崎市原爆被爆対策部援護課(H5～)	課長		上田 幸和	上田 幸和
書記	長崎県原爆被爆者援護課	係長	大村 正	大村 正	大村 正

平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度
今村 臣正	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉
長瀧 重信	長瀧 重信	池田 高良	池田 高良	池田 高良	池田 高良	池田 高良	齋藤 寛	齋藤 寛
今村 臣正	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉
石川 壽	石川 壽	石川 壽	牟田 博夫	牟田 博夫	牟田 博夫	牟田 博夫	諸岡 久夫	諸岡 久夫
横山 哲夫	横山 哲夫	横山 哲夫	池田 高良	池田 高良	池田 高良	池田 高良	齋藤 寛	齋藤 寛
長瀧 重信	長瀧 重信	池田 高良	齋藤 寛	齋藤 寛	齋藤 寛	齋藤 寛	兼松 隆之	兼松 隆之
齋藤 泰	齋藤 泰	齋藤 泰	齋藤 泰	藤井 徹	藤井 徹	澄川 耕二	澄川 耕二	澄川 耕二
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	関根 一郎	関根 一郎	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男
迎 英明	迎 英明	迎 英明	田口 厚	田口 厚	田口 厚	田口 厚	田口 厚	進藤 和彦
長谷川 豊	長谷川 豊	平良 専純	平良 専純	平良 専純	平良 専純	平良 専純	平良 専純	平良 専純
梶 兼行	中島 公彦	山口 博司	寺崎昌幸(代行)	田川 勝	田川 勝	金谷 繁臣	金谷 繁臣	金谷 繁臣
—	長瀧 重信	長瀧 重信	長瀧 重信	長瀧 重信	長瀧 重信	長瀧 重信	長瀧 重信	横瀬 昭幸
辻 芳郎	辻 芳郎	辻 芳郎	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	江口 勝美
中林 圭一	中林 圭一	辻村 信正	辻村 信正	辻村 信正	辻村 信正	塚原 太郎	塚原 太郎	塚原 太郎
江口 圭介	田中 洋一	岡田 慎二	原 敏隆	原 敏隆	太田 雅英	太田 雅英	坂田 寿孝	坂田 寿孝
木場田 勇	木場田 勇	森 宏巳	森 宏巳	松本 清助	松本 清助	松本 清助	仲野 喜孝	仲野 喜孝
横田 秀雄	横田 秀雄	田口 修三	南條 保郎	南條 保郎	坂田 寿孝	茂 雅博	茂 雅博	茂 雅博
吉原 弘二	吉原 弘二	吉原 弘二	吉原 弘二	吉原 弘二	吉原 弘二	吉原 弘二	高井 正実	高井 正実
矢崎弦一郎	矢崎弦一郎	堀内 保昭	江口 圭介	江口 圭介	江口 圭介	江口 圭介	江口 圭介	江口 圭介
海内 保男	海内 保男	川畑 英憲	川畑 英憲	川畑 英憲	吉住 誠司	吉住 誠司	高橋 輝	高橋 輝
池田 誠一	池田 誠一	池田 誠一	池田 誠一	池田 誠一	池田 誠一	池田 誠一	小川 源吾	小川 源吾
篠宮 勉	篠宮 勉	篠宮 勉	岡崎 文憲	岡崎 文憲	岡崎 文憲	工藤憲一郎	山内 正美	山内 正美
八坂 茂尚	八坂 茂尚	八坂 茂尚	八坂 茂尚	渡辺 才人	渡辺 才人	渡辺 才人	渡辺 才人	蔵屋 末雄
中岡 雅	橋口 高明	橋口 高明	大串 康隆	大串 康隆	銀杏田 弘	銀杏田 弘	林 茂利	林 茂利
勝田 成彬	勝田 成彬	勝田 成彬	正林 克記	北原 宣孝				
木場田 勇	木場田 勇	森 宏巳	森 宏巳	松本 清助	松本 清助	松本 清助	仲野 喜孝	仲野 喜孝
横田 秀雄	横田 秀雄	田口 修三	南條 保郎	南條 保郎	坂田 寿孝	茂 雅博	茂 雅博	茂 雅博
辻 芳郎	長瀧 重信	辻 芳郎	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	江口 勝美
山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一
長瀧 重信	長瀧 重信	江口 勝美	江口 勝美	江口 勝美	江口 勝美	江口 勝美	江口 勝美	江口 勝美
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
辻 芳郎	辻 芳郎	辻 芳郎	—	—	—	—	—	—
林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭	林 邦昭
中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	—
近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史
奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛	奥村 寛
朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男
山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一
新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫
関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎
—	—	—	柴田 義貞	柴田 義貞	柴田 義貞	柴田 義貞	柴田 義貞	柴田 義貞
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
松尾 罌	松尾 罌	松尾 罌	松尾 罌	松尾 罌	松尾 罌	松尾 罌	森 秀樹	森 秀樹
柴田 義貞	柴田 義貞	柴田 義貞	—	—	赤星 正純	赤星 正純	赤星 正純	赤星 正純
—	—	—	—	—	—	—	—	田川 眞須子
木場田 勇	木場田 勇	森 宏巳	森 宏巳	松本 清助	松本 清助	松本 清助	仲野 喜孝	仲野 喜孝
横田 秀雄	横田 秀雄	田口 修三	南條 保郎	南條 保郎	坂田 寿孝	茂 雅博	茂 雅博	茂 雅博
木場田 勇	木場田 勇	森 宏巳	森 宏巳	松本 清助	松本 清助	松本 清助	仲野 喜孝	仲野 喜孝
横田 秀雄	横田 秀雄	田口 修三	南條 保郎	南條 保郎	坂田 寿孝	茂 雅博	茂 雅博	茂 雅博
内田 正憲	大串 仁志	大串 仁志	森田 一三	森田 一三	森田 一三	原田 正明	原田 正明	藤田 邦行
上田 幸和	原 敏隆	南條 保郎	金子 英昭	田口 久子	山口俊一郎	鳥山ふみ子	鳥山ふみ子	鳥山ふみ子
大村 正	中嶋 洋	中嶋 洋	中嶋 洋	島村恵美子	島村恵美子	島村恵美子	草場 里見	草場 里見

NASHIM役職	所属団体	役職名	平成16年度	平成17年度	平成18年度
会長			井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉
副会長			齋藤 寛	齋藤 寛	齋藤 寛
理事	長崎県医師会	会長	井石 哲哉	井石 哲哉	井石 哲哉
	長崎市医師会	会長	諸岡 久夫	諸岡 久夫	諸岡 久夫
	長崎大学	学長	齋藤 寛	齋藤 寛	齋藤 寛
	長崎大学医学部	学部長	兼松 隆之	兼松 隆之	河野 茂
	長崎大学医学部附属病院	病院長	澄川 耕二	江口 勝美	江口 勝美
	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(H14～)	科長	—	—	朝長万左男
	長崎大学原爆後障害医療研究所(H25～)	施設長	朝長万左男	朝長万左男	関根 一郎
	日本赤十字社長崎原爆病院	病院長	進藤 和彦	進藤 和彦	進藤 和彦
	(公財)放射線影響研究所長崎担当	業務執行理事	平良 専純	大久保利晃/寺本隆信	寺本 隆信
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	理事長(24年～)	出口静夫(代行)	野口源次郎	野口源次郎
	(公財)長崎平和推進協会	理事長	横瀬 昭幸	横瀬 昭幸	横瀬 昭幸
	運営委員会運営部会	部会長	江口 勝美	奥村 寛	柴田 義貞
	長崎県福祉保健部	部長等	塚原 太郎	山崎 晋一朗	山崎 晋一朗
	長崎市原爆被爆対策部	部長	出口 静夫	出口 静夫	出口 静夫
	長崎大学病院 国際ヒバクシャ医療センター(H25～)	センター長	—	—	—
調整部会部会長		事務局長	仲野 喜孝	仲野 喜孝	藤田 邦行
調整部会副部会長		事務局次長	松本 章	松本 章	松本 章
	長崎県医師会	事務局長	高井 正実	高井 正実	山口 佳
	長崎市医師会	事務局長	江口 圭介	江口 圭介	江口 圭介
	長崎大学	国際主幹、国際交流課長、学術国際課	坂下 鈴鹿	坂下 鈴鹿	坂下 鈴鹿
	長崎大学医学部	事務長、事務部長	松浦 孝則	石井 利通	石井 利通
	長崎大学医学部附属病院	事務部長	山内 正美	山内 正美	上村 茂敏
	日本赤十字社長崎原爆病院	事務部長	蔵屋 末雄	蔵屋 末雄	蔵屋 末雄
	(公財)放射線影響研究所	事務局次長	西尾 正二	西尾 正二	西尾 正二
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	事務部長、事務局長	北原 宣孝	北原 宣孝	坂本 昭雄
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長	仲野 喜孝	仲野 喜孝	藤田 邦行
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長	松本 章	松本 章	松本 章
運営部会部会長			江口 勝美	奥村 寛	柴田 義貞
運営部会副部会長			山下 俊一	—	—
	長崎大学医学部(第一内科)	教授	江口 勝美	—	—
	長崎大学医学部(第三内科)	教授	—	矢野 捷介	矢野 捷介
	長崎大学医学部(第二外科)	教授	—	—	—
	長崎大学医学部(小児科)	教授	—	—	—
	長崎大学大学院(放射線診断治療学)	教授	—	上谷 雅孝	上谷 雅孝
	長崎大学大学院(精神神経科学)	教授	—	小澤 寛樹	小澤 寛樹
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研幹細胞)	教授	近藤 宇史	近藤 宇史	近藤 宇史
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研放射)	教授	奥村 寛	奥村 寛	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研内科)	教授	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研医療)	教授	山下 俊一	—	—
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研遺伝)	教授	新川 詔夫	新川 詔夫	新川 詔夫
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研病理)	教授	関根 一郎	関根 一郎	関根 一郎
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研国際)	教授	柴田 義貞	柴田 義貞	柴田 義貞
	長崎大学原爆後障害医療研究所(原研分子)	教授	—	—	—
	長崎大学先端生命科学研究所支援センター	教授	—	—	松田 尚樹
	長崎大学原爆後障害医療研究所(共同研究)	教授	—	—	—
	日本赤十字社長崎原爆病院	内科部長、副院長、外科部長	森 秀樹	森 秀樹	森 秀樹
	(公財)放射線影響研究所	疫学部長、臨床研究部長	赤星 正純	赤星 正純	赤星 正純
	(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	中央検診所長	田川 眞須子	田川 眞須子	田川 眞須子
	長崎大学原爆後障害医療研究所(国際ヒバクシャ)	教授	—	—	—
	協力会事務局長(県原爆被爆者援護課)	課長	仲野 喜孝	仲野 喜孝	藤田 邦行
	協力会事務局次長(市原対部調査課)	課長	松本 章	松本 章	松本 章
事務局長	長崎県原爆被爆者援護課(H20名称変更)	課長	仲野 喜孝	仲野 喜孝	藤田 邦行
事務局次長	長崎市原爆被爆対策部調査課	課長	松本 章	松本 章	松本 章
会計監事	長崎県原爆被爆者援護課	統括課長補佐	藤田 邦行	藤田 邦行	永石 憲司郎
会計監事	長崎市原爆被爆対策部援護課(H5～)	課長	鳥山ふみ子	鳥山ふみ子	濱田 茂
書記	長崎県原爆被爆者援護課	係長、課長補佐	草場 里見	草場 里見	福田 恵子

平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
井石 哲哉	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭
齋藤 寛	齋藤 寛	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂
井石 哲哉	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭	蒔本 恭
諸岡 久夫	野田 剛稔	野田 剛稔	野田 剛稔	野田 剛稔	奥 保彦	奥 保彦	奥 保彦	奥 保彦
齋藤 寛	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂	片峰 茂
河野 茂	河野 茂	松山 俊文	松山 俊文	松山 俊文	松山 俊文	下川 功	下川 功	下川 功
江口 勝美	江口 勝美	河野 茂	河野 茂	河野 茂	河野 茂	河野 茂	河野 茂	増崎 英明
朝長万左男	朝長万左男	山下 俊一	山下 俊一	山下俊一/小路武彦	小路 武彦	小路 武彦	小路 武彦	下川 功
関根 一郎	山下 俊一	山下 俊一	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二
進藤 和彦	進藤 和彦	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	朝長万左男	平野 明喜	平野 明喜
寺本 隆信	寺本 隆信	寺本 隆信	寺本 隆信	寺本 隆信				
中野 吉邦	中野 吉邦	中野 吉邦	中野 吉邦	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文	中根 允文
横瀬 昭幸	横瀬 昭幸	横瀬 昭幸	横瀬 昭幸	横瀬 昭幸				
兼松 隆之	兼松 隆之	兼松 隆之	兼松 隆之	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝
山崎 晋一朗	入江 季記	池松 誠二	池松 誠二	岩本 公明	濱本 磨穀穂	濱本 磨穀穂	伊東 博隆	伊東 博隆
金谷 博己	金谷 博己	金谷 博己	黒川 智夫	黒川 智夫	黒川 智夫	黒川智夫/野瀬弘志	野瀬 弘志	野瀬 弘志
—	—	—	—	—	—	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一
藤田 邦行	藤田 邦行	藤田 邦行	久村 豊彦	梶原 敏彦	梶原 敏彦	増井 直人	林 洋一	林 洋一
松本 章	高橋 清文	高橋 清文	高橋 清文	金子 正剛	金子 正剛	金子正剛/鳥巢勝秀	鳥巢 勝秀	鳥巢 勝秀
山口 佳	浜口 龍二	浜口 龍二	浜口 龍二	浜口 龍二				
江口 圭介	永江 和正	永江 和正	永江 和正	永江 和正	永江 和正	永江 和正	永江 和正	永江 和正
川口 勉	川口 勉	川口 勉	佐藤 照明	佐藤 照明	佐藤 照明	泉川 正純	泉川 正純	泉川 正純
西村 司郎	西村 司郎	西村 司郎	西村 司郎	江川 長一	松林 聰	松林 聰	森山 良英	森山 良英
赤塚 正夫	赤塚 正夫	丸野 和年	丸野 和年	丸野 和年	丸野 和年	丸野 和年	鳥居 時政	鳥居 時政
村上 公幸	村上 公幸	村上 公幸	小野 道彦	小野 道彦	相川 光正	相川 光正	相川 光正	立石 一弘
伊原 昭夫	伊原 昭夫	小笠原 優	小笠原 優	金岡 里充				
坂本 昭雄	坂本 昭雄	妹尾 芳郎	妹尾 芳郎	妹尾 芳郎	妹尾 芳郎	妹尾 芳郎	荒巻 征	青木 賢三
藤田 邦行	藤田 邦行	藤田 邦行	久村 豊彦	梶原 敏彦	梶原 敏彦	増井 直人	林 洋一	林 洋一
松本 章	高橋 清文	高橋 清文	高橋 清文	金子 正剛	金子 正剛	金子正剛/鳥巢勝秀	鳥巢 勝秀	鳥巢 勝秀
兼松 隆之	兼松 隆之	兼松 隆之	兼松 隆之	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝
山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一	高村 昇	高村 昇	高村 昇	高村 昇	高村 昇
—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
兼松 隆之	兼松 隆之	兼松 隆之	兼松 隆之	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—
上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝	上谷 雅孝				
小澤 寛樹	小澤 寛樹	小澤 寛樹	小澤 寛樹	小澤 寛樹				
近藤 宇史	近藤 宇史	—	—	李 桃生	李 桃生	李 桃生	李 桃生	李 桃生
—	—	—	工藤 崇	工藤 崇	工藤 崇	工藤 崇	工藤 崇	工藤 崇
朝長万左男	朝長万左男	—	宮崎 泰司	宮崎 泰司	宮崎 泰司	宮崎 泰司	宮崎 泰司	宮崎 泰司
山下 俊一	—	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一				
—	—	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎	吉浦孝一郎
関根 一郎	関根 一郎	—	中島 正洋	中島 正洋	中島 正洋	中島 正洋	中島 正洋	中島 正洋
—	—	高村 昇	高村 昇	高村 昇	高村 昇	高村 昇	高村 昇	高村 昇
—	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二	永山 雄二
松田 尚樹	松田 尚樹	松田 尚樹	松田 尚樹	松田 尚樹				
—	—	—	—	—	—	—	—	林田 直美
河野 昌文	河野 昌文	河野 昌文	上田 康雄	上田 康雄	上田 康雄	上田 康雄	上田 康雄	上田 康雄
赤星 正純	赤星 正純	今泉 美彩	今泉 美彩	今泉 美彩				
松尾 辰樹	松尾 辰樹	松尾 辰樹	松尾 辰樹	松尾 辰樹				
—	—	—	—	—	—	山下 俊一	山下 俊一	山下 俊一
藤田 邦行	藤田 邦行	藤田 邦行	久村 豊彦	梶原 敏彦	梶原 敏彦	増井 直人	林 洋一	林 洋一
松本 章	高橋 清文	高橋 清文	高橋 清文	金子 正剛	金子 正剛	金子正剛/鳥巢勝秀	鳥巢 勝秀	鳥巢 勝秀
藤田 邦行	藤田 邦行	藤田 邦行	久村 豊彦	梶原 敏彦	梶原 敏彦	増井 直人	林 洋一	林 洋一
松本 章	高橋 清文	高橋 清文	高橋 清文	金子 正剛	金子 正剛	金子正剛/鳥巢勝秀	鳥巢 勝秀	鳥巢 勝秀
永石 憲司郎	永石 憲司郎	吉田 寿雄	吉田 寿雄	吉田 寿雄	村中 励	村中 励	田中 勝利	田中 勝利
大石 幸雄	大石 幸雄	坂本 洋一郎	坂本 洋一郎	坂本 洋一郎	浦瀬 千恵子	浦瀬 千恵子	浦瀬 千恵子	浦瀬 千恵子
福田 恵子	福田 恵子	山口 勇次	山口 勇次	山下 素己	山下 素己	明石 浩之	西 誠司	西 誠司

3. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会23年の歩み

(1) 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の発足まで

◎チェルノブイリの 事故の発生

○昭和 61 年(1986 年)4 月

ソ連ウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所にて爆発事故が発生。最も被害が大きかった白ロシア(現ベラルーシ共和国)をはじめ放射線汚染は広範囲に及び、多くの人々が影響を受けた。

◎国の動き

○平成 2 年(1990 年)

- ・IAEA(国際原子力機関)が専門家による実態調査を実施。
- ・日本船舶振興会がチェルノブイリ原発事故調査団(長崎、広島などの研究者で構成)を派遣。事故の現状調査や医療活動を実施。
- ・政府は、WHO(世界保健機構)の要請を受け、26 億円を拠出。

◎広島県の動き

○平成 3 年(1991 年)

- ・広島県は「放射線被曝者医療国際協力推進協議会(HICARE)」を設立し、医師等の受入研修を実施。

◎長崎県の動き

○長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)発足前の活動

- ・研修生の受け入れや医師の派遣等については、各医療機関等がそれぞれ独自に実施。
- ・長崎県は、国及び広島県とともに在南米被曝者に対する医師団派遣、長崎市は、在北米・南米被曝者の帰国治療を実施。

○平成 3 年(1991 年)2 月

- ・知事が、県議会において「ヒバクシャ医療の連絡調整機関をスタートさせる」と言明。

○平成 3 年(1991 年)5 月 30 日

- ・「ヒバクシャ医療国際協力懇談会」を開催

世界各地で発生している原子力発電所や核施設等の事故による被災者救済を目的として開催。懇談会には、長崎県医師会をはじめ長崎大学、(公財)放射線影響研究所、日本赤十字社長崎原爆病院、(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会の代表及び原爆医療の専門家が出席。懇談の結果、ヒバクシャ医療における国際協力の必要性を確認し、今後、機関設置に向けて具体的に検討していくことを申し合わせた。

○平成 4 年(1992 年)4 月 1 日

- ・長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)を設立
長崎県及び長崎市からの負担金を受け、在外被曝者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的に各種事業を実施。

「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会」発足式

世界のヒバクシャ救済を目指す協力会の発足式。長崎市の長崎厚生年金会館にて。

チェルノブイリ原発事故の発生後、世界中の被災者救済を目的とした国際協力会が発足した。長崎県及び長崎市からの負担金を受け、在外被曝者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的に各種事業を実施する。

長崎県医師会、長崎大学、(公財)放射線影響研究所、日本赤十字社長崎原爆病院、(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会の代表及び原爆医療の専門家が出席。懇談の結果、ヒバクシャ医療における国際協力の必要性を確認し、今後、機関設置に向けて具体的に検討していくことを申し合わせた。

長崎県医師会、長崎大学、(公財)放射線影響研究所、日本赤十字社長崎原爆病院、(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会の代表及び原爆医療の専門家が出席。懇談の結果、ヒバクシャ医療における国際協力の必要性を確認し、今後、機関設置に向けて具体的に検討していくことを申し合わせた。

長崎県医師会、長崎大学、(公財)放射線影響研究所、日本赤十字社長崎原爆病院、(公財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会の代表及び原爆医療の専門家が出席。懇談の結果、ヒバクシャ医療における国際協力の必要性を確認し、今後、機関設置に向けて具体的に検討していくことを申し合わせた。

NASHIM発足以前のチェルノブイリ関係来崎者

期 間	申請団体名	紹介団体	訪問目的	来崎者
平成3年度 平成3年3月31日	エストニア共和国医師団	エストニア・チェルノブイリ・ヒバクシャ基金		エストニア共和国医師団 (医師2名)
平成3年4月30日	IPPNWソ連支部		被曝者治療技術研修の 協力依頼	ソ連支部事務局長
平成3年7月8日 ～7月12日	チェルノブイリ・モスクワ 視察団	長崎～ソビエトロシア 友好市民団体	モスクワにチェルノブイリ被曝の 子供たちのための病院を建設す るための視察 (視察先) 恵の丘長崎原爆ホーム、 国際文化会館、 長大附属病院、原爆病院等	国立小児科病院医師、 運輸省補給部長、 国営企業ビタビット部長 計3人
平成3年8月7日 ～8月10日	エストニア・チェルノブイ リ委員会	エストニア・チェルノブイリ・ ヒバクシャ基金	原水禁大会出席のため	委員会議長、委員、 リトアニア共和国最高会議議員、 医師、ジャーナリスト 計5人
平成3年9月10日 ～9月12日	「チェルノブイリ同盟・ ベラルーシ」代表団	チェルノブイリ支援運動・ 九州		「チェルノブイリ同盟・ベラルーシ」 代表団(医師1人、他1人)
平成3年9月25日 ～9月28日	チェルノブイリ医療協力 ソ連医師団	笹川記念保健協力財団	被曝医療技術修得のため (研究先) 長大附属病院、長大医学部	キエフ州立総合病院 副委員長、医師 (白ロシア3人・ウクライナ3人・ロシ ア2人)、通訳 計10人
平成3年10月27日 ～10月28日		放射線被曝者医療 国際協力推進協議会		サンパウロ日伯友好病院医師 (医師1人、他1人)
平成3年11月3日 ～11月6日	チェルノブイリ原発事故 ソ連専門家代表団	外務省	「日・ソ チェルノブイリ甲状腺 シンポジウム」出席のため	ソ連緊急事態国家委員会チェルノ ブイリ原発事故対策委員会議長、 白ロシア保健省実験室長他1人、 ソ連邦医学アカデミー部長他3人、 ミンスク医学研究所部長、 ソ連邦保健省部長、外務省部長 計10人
平成3年11月5日 ～11月7日	IPPNW ソ連支部代表団		IPPNW長崎支部との交流及び 被曝の実相を学ぶため (視察先) 長大医学部	ソ連支部支部長、ソ連支部事務局 長、レニングラード支部事務総長、 ラトビア支部事務総長、 ウクライナ支部員 計5人
平成3年11月9日 ～12月3日	チェルノブイリ原発事故 で被災した子供と医師 団	朝日新聞厚生文化事業団		チェルノブイリ原発事故で被災した 子供と医師団 (子供6人、医師2人)
平成4年3月2日 ～3月20日	チェルノブイリ原発事故 で被災した子供と医師 団	朝日新聞社、 朝日新聞厚生文化事業団、 テレビ朝日(原発事故被災 者救援事業)	被災児の健診と放射能測定 (健診 原爆病院・放射能測定原 医研) 医師の研修 (研修先) 長大附属病院、長大医学部、 原対協	チェルノブイリ原発事故で被災した 子供と医師団 被災児6人、ゴメリ州立病院部長、 医師(ロシア3人、ベラルーシ2 人)、通訳 計13人

NASHIM発足以前の長崎市渡日治療者

年度	氏名	生年	日 程					国名	被爆距離
			入国	入院	退院	入院日数			
昭和57年度 (1982)	M.M(旧姓M.S)	S10.	S57	7/27	7/30	8/30	32日	米国	
	S.W(旧姓S.M)	S 9.	S57	7/27	7/30	8/30	32日	米国	
昭和58年度 (1983)	M.B(旧姓M.S)	S11.	S58	7/27	7/30	8/30	32日	米国	
	R.L(旧姓R.M)	S 9.	S58	7/27	7/30	8/28	30日	米国	
昭和59年度 (1984)	K.D(旧姓K.N)	S 6.	S59	9/30	10/3	11/2	31日	米国	
	H.R(旧姓H.I)	T14.	S60	3/19	3/22	4/8	18日	米国	
昭和60年度 (1985)	T.K(旧姓T.S)	S 4.	S61	2/23	2/26	4/14	48日	米国	
	Y.K(旧姓Y.K)	S 3.	S61	3/23	3/26	4/19	25日	米国	
昭和61年度 (1986)	T.M(旧姓T.H)	T15.	S62	3/15	3/15	4/18	35日	米国	
	F.S(旧姓F.T)	S 3.	S62	3/22	3/22	4/21	31日	米国	
昭和62年度 (1987)	N.H(旧姓N.S)	S 6.	S63	3/21	3/24	4/15	23日	米国	
	N.C(旧姓N.Y)	S 7.	S63	3/13	3/16	4/13	29日	米国	
昭和63年度 (1988)	C.G(旧姓C.S)	S 6.	H 1	3/27	3/29	4/20	23日	米国	
	T.O	S 4.	H 1	3/27	3/30	4/22	24日	米国	
平成元年度 (1989)	M.B(旧姓M.T)	S 7.	H 2	3/21	3/24	4/16	24日	米国	
	N.S(旧姓N.S)	S 5.	H 2	3/21	3/24	4/21	29日	米国	
平成2年度 (1990)	A.H(旧姓A.N)	T10.	H 3	3/23	3/26	5/10 (出国5/11)	46日	米国	
	A.H(旧姓A.Y)	S 6.	H 3	3/23	3/26	4/20 (出国5/28)	26日	米国	
	C.W(旧姓C.H)	S 4.	H 3	3/22	3/26	4/13	19日	ブラジル	
平成3年度 (1991)	T.J(旧姓T.T)	S 2.	H 4	3/24	3/27	6/2	68日	米国	3.2
	S.W(旧姓S.Y)	T11.	H 4	3/24	3/27	4/20	25日	米国	1.2
	A.T	T15.	H 4	3/24	3/27	4/20	25日	ブラジル	2.6

(2) 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 23年の歩み

平成4年(1992年) 11月～12月	チェルノブイリ原発事故で被災した子供達と医師団が来崎 NASHIMが調整する医療機関で被災児の健康診断や医師の研修を実施
平成5年(1993年) 3月～4月	在外ヒバクシャ(南米・北米)渡日治療事業開始
平成5年(1993年) 8月～9月	チェルノブイリ関係国(ロシア、ベラルーシ、ウクライナ)から初の ヒバクシャ医療研修医師受け入れ
平成7年(1995年) 8月	韓国から初のヒバクシャ医療研修医師受け入れ
平成7年(1995年) 9月18日	第1回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者/秋月辰一郎氏
平成7年(1995年) 9月19日	被爆50周年ヒバクシャ医療国際シンポジウム 「ヒバクシャ医療と医科学」～長崎からの提言～
平成7年(1995年) 11月15日	被爆50周年記念講演会 ～医療と健康～
平成8年(1996年) 4月	チェルノブイリ原発事故10周年記念事業出席のためウクライナへ専門家派遣
平成8年(1996年) 7月～9月	カザフスタン共和国から初のヒバクシャ医療研修医師受け入れ
平成9年(1997年) 3月	カザフスタン共和国科学アカデミー特別調査隊報告書『中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態』を邦訳出版
平成9年(1997年)	非ODA対象NIS諸国のロシア連邦・ベラルーシ共和国に対する外務省関係団体支援委員会の補助事業を開始
平成9年(1997年) 9月	機関誌「NASHIM」第1号を発行
平成10年(1998年) 3月3日	第2回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者/サイム・バルムハノフ氏(カザフスタン共和国)
平成10年(1998年) 3月	L. A. イリーン著『チェルノブイリ:虚偽と真実』を邦訳出版
平成11年(1999年) 3月	『長崎・ヒバクシャ医療国際協力会7ヵ年の歩み』出版
平成11年(1999年)	国際協力事業団(JICA)が実施するカザフスタン共和国セミパラチンスク地域の医療改善事業に参画を開始
平成11年(1999年) 8月～9月	セミパラチンスク写真展開催
平成12年(2000年) 3月	永井隆著『原子爆弾救護報告』英訳版出版
平成12年(2000年) 3月30日	第3回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者/ヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏(オランダ)

平成 12 年(2000 年) 10 月 18 日	日本の保健衛生分野における権威ある賞として世に認められている第 52 回「保健文化賞」を NASHIM が受賞
平成 13 年(2001 年) 8 月 4 日	講演会「みんなで考えよう放射線被ばく ～チェルノブイリ原発事故から 15 年～」
平成 14 年(2002 年) 2 月 18 日	第 4 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／鎌田七男氏、エヴゲニイ・デミチュック氏(ベラルーシ共和国)
平成 14 年(2002 年) 3 月	支援委員会補助事業により『小児甲状腺学』・『甲状腺超音波診断：疾患偏』をロシア語出版
平成 14 年(2002 年) 8 月 4 日	NASHIM 創立 10 周年記念特別講演会～永井隆博士と原爆～
平成 14 年(2002 年) 10 月 23 日	ベラルーシ共和国政府からこれまでの支援に対して NASHIM が感謝状を授与される
平成 14 年(2002 年) 11 月	長崎・ヒバクシャ医療国際協力会創立 10 周年記念ビデオ制作
平成 15 年(2003 年) 3 月	『長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 10 ヶ年誌』発刊
平成 15 年(2003 年)	セミパラチンスク地域医療改善計画への参画（検討会への出席・研修生受入）
平成 15 年(2003 年) 8 月 3 日	チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会開催
平成 16 年(2004 年) 2 月 13 日	第 5 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／日本チェルノブイリ連帯基金（理事長 鎌田實氏）（日本） 鎌田七男著『白血病診断図譜詳解—放射線関連白血病を含む—』出版 『長崎から世界へ～NASHIM・ヒバクシャ医療国際協力の取り組み～』（ビデオ・CD-ROM）作成
平成 16 年(2004 年)	セミパラチンスク地域医療改善計画への参画（国内支援委員会への出席・研修生受入）
平成 16 年(2004 年) 5 月～11 月	ユーリー・コステンコ ウクライナ駐日大使来訪（3 回）
平成 16 年(2004 年) 6 月 9 日	コスチャンティン・グリシチェンコ ウクライナ外務大臣来訪
平成 16 年(2004 年) 7 月 31 日	講演会「放射線災害の緊急医療について考えよう」 ラリッサ・ダニロワ著『甲状腺疾患』出版 鎌田七男著『白血病診断図譜詳解—放射線関連白血病を含む—』ロシア語 CD 作成
平成 17 年(2005 年) 9 月 23 日	被爆 60 周年記念事業を実施
平成 17 年(2005 年) 7 月 25 日	第 6 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／市丸道人氏(日本)、横路謙次郎氏（日本） 泰山弘道著『Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55』出版 調来助著『長崎ニ於ケル原子爆弾災害ノ統計的観察』英訳版出版 『長崎原爆の医学的影響』モンゴル語出版

平成 18 年(2006 年) 7 月 10 日	外務省において平成 18 年度外務大臣表彰を NASHIM が受賞
平成 18 年(2006 年) 7 月～8 月	チェルノブイリ原発事故 20 周年事業を実施 『チェルノブイリ原発事故後のロシアにおける甲状腺癌 (Thyroid cancer in Russia after the Chernobyl: an analytical review)』ロシア語出版 『長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み』出版
平成 19 年(2007 年) 10 月 31 日	第 7 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／アナトリイ・ツイーブ氏(ロシア連邦)
平成 20 年(2008 年) 3 月 7 日	初の出前出張講座を高尾小学校で開催
平成 20 年(2008 年)	『長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み』出版
平成 22 年(2010 年) 3 月 15 日	第 8 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／クリストフ・ライナー氏(ドイツ連邦共和国)
平成 22 年(2010 年) 12 月 18 日	初の東京シンポジウム開催 ケシリム・ボズターエフ著『人間と原子』邦訳のうえ、ナシムのホームページに電子書籍として掲載 長崎新聞新書『21 世紀のヒバクシャ』編著 (柴田義貞責任編集)
平成 23 年(2011 年) 5 月～7 月	東日本大震災復興支援 東京シンポジウム開催 (3 回)
8 月 10 日	被災のあった、いわき市小中学生生徒会リーダーと長崎市内中学生生徒会リーダーを対象に出前出張講座開催 『放射能 Q & A』改訂版出版
平成 25 年(2013 年) 2 月 9 日～10 日	ナシム設立 20 周年記念事業～長崎とヒバクシャ医療～ 開催
2 月 9 日	第 9 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／ミコラ・トロンコ氏(ウクライナ) 『放射能 Q & A (改訂版)』を PDF 書籍として作成
平成 25 年(2013 年)	ナシム 20 周年記念誌(DVD) 英語版医学教科書「THYROID CANCER IN UKRAINE AFTER CHERNOBYL」
平成 27 年(2015 年) 2 月 6 日	第 10 回永井隆平和記念・長崎賞授賞式 受賞者／丹羽 太貫氏(日本)
平成 27 年(2015 年) 7 月 30 日	座談会「被爆 70 周年とナシム」開催

4. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の活動状況

(1) 研修者の受け入れ・専門医師等の派遣事業

【事業目的】

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)では、長崎が蓄積した原爆被爆者治療の実績及び放射線障害に関する調査研究の成果を生かして、放射線被曝者の治療・健康管理にあたっている世界各地の医療従事者等に対する指導、技術支援、医療情報の提供を行うために、医師等の受入研修事業及び専門医師等の派遣事業を行う。



平成12年7月19日西日本新聞より

【事業内容】

1. 独自事業

医師等受入研修又は専門医師等派遣申請のうち、協力が特に必要と認めたものについては、協力が独自で医師等の受入研修・派遣を行う。

2. 共同事業

国及びその他の関係機関と共同で、医師等の受入研修・派遣を行う。

3. 窓口調整事業

海外から医師等の研修受け入れや海外への専門医師等の派遣申請に基づいて、関係機関相互の連絡調整を行い、効率的な研修を行う。

【対象要件】

医師等受入研修・専門医師等派遣事業の対象は、次の要件が必要である。

1. 原則として、国際機関、外国政府、外国地方政府又は医師会等これらに準ずる公的機関から、日本国内の公的機関を経由して申し込まれたものであること。
2. 医師等受入研修の場合
 - ・研修を受ける者が、放射線被曝者の医療・健康管理等に従事する医師等であること。
 - ・長期研修(2週間以上)を希望する医師等にあつては、研修を効率的、かつ、円滑に受けられる英語能力を有する者であること。
 - ・研修の目的が放射線被曝者の医療・健康管理等に関する知識技術の習得を主とするものであること。
3. 医師等派遣の場合は、その目的が派遣先における放射線被曝者の医療・健康管理等に従事する医師等に対する技術研修を主とするものであること。

【申請手続】

1. 医師等受入研修については、「放射線被曝者医療に関する受入研修申請書」に必要事項を記載の上、申し込むこと。
2. 医師等派遣については、「放射線被曝者医療に関する専門医師等派遣申請書」に必要事項を記載の上、申し込むこと。
3. 原則として、毎年9月30日までに申請があったものについて、翌年度事業の受入研修・派遣の検討対象とする。

【医師等受入研修の費用負担】

1. 協力が独自事業として実施する場合の費用については、次に掲げるものについて、関係機関と協議して必要と認める額を協力会において負担する。
 - ・航空運賃、支度料、滞在費、国内旅費、研修旅費、書籍料、資料別送料
2. 協力が共同事業として実施する場合の費用については、相手方と協議の上、協力会の負担する額を決定する。
3. 協力が窓口調整事業として実施する場合は、協力は原則として費用は負担しない。

【専門医師等派遣の費用負担】

協力が独自事業として実施する場合の費用については、次に掲げるものについて、関係機関等と協議して必要と認める額を協力会において負担する。

- ・航空運賃、支度料、滞在費、国内旅費、書籍料、資料別送料

研修機関



長崎大学医学部

〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4

TEL:095-819-7004

FAX:095-819-7166

●学部／医学科、保健学科

●大学院

医歯薬学総合研究科

博士課程4専攻

修士課程 2専攻



長崎大学病院

〒852-8501 長崎市坂本1丁目7-1

TEL:095-819-7200

FAX:095-819-7215

●診療科／33診療科

●病床数／862床

●中央診療施設（検査部他）



長崎大学原爆後障害医療研究所

〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4

TEL:095-819-7157

FAX:095-819-7012

●研究組織

・放射線リスク制御部門

・細胞機能解析部門

・ゲノム機能解析部門

・原爆・ヒバクシャ医療部門

・放射線・環境健康影響共同研究推進センター



公益財団法人 放射線影響研究所

〒850-0013 長崎市中川1丁目8-6

TEL:095-823-1121

FAX:095-825-7202

●被爆者の健康に関する調査研究

●遺伝学的調査研究

●疫学的・臨床医学的調査研究

●原爆被曝線量の再評価 等



日本赤十字社 長崎原爆病院

〒852-8511 長崎市茂里町3-15

TEL:095-847-1511

FAX:095-847-8036

●診療科／19診療科

●病床数／350床



長崎市原爆被爆者健康管理センター

〒852-8104 長崎市茂里町2-41

TEL:095-844-3100

FAX:095-843-9255

●被爆者の健康診断

●被爆者の健康管理及び健康指導

●被爆者への援護 等

研修者の受入・専門医師等の派遣事業 実績一覧表

I. 受入研修者リスト

事業区分	期間	申請団体名	共同団体	訪問目的	
平成4年度 窓口調整事業	平成4年3月31日～4月4日 (5日間)		エストニア・チェルノブイリ・ ヒバクシャ基金	医師の研修	
	9月10日～12日(3日間)		チェルノブイリ支援運動・九州	被爆者医療の視察及び 市民団体との交流	
	10月27日～28日(2日間)		HICARE	被爆者医療の視察	
	11月9日～12月3日(26日間)		日本赤十字社、朝日新聞厚 生文化事業団 他	被災児の検診と放射能測定、 医師の研修	
平成5年度 独自事業	8月9日～9月12日(35日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)	
窓口調整事業	11月24日		笹川-チェルノブイリ医療協力訪日団		
	11月30日～12月15日(16日間)		外務省	チェルノブイリ原発事故 日-旧ソ連共同研究(甲状腺班)	
	12月7日～15日(9日間)				
	12月15日		HICARE(外務省)	チェルノブイリ原発事故 日-旧ソ連共同研究 (データ処理班)(白血病班)	
	12月15日		HICARE(WHO)		
	平成6年2月15日～3月16日 (30日間)		日本赤十字社		
平成6年度 独自事業	7月25日～9月4日(42日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)	
	11月7日～9日(3日間)			在韓被爆者関係 (医療交流の事前打合せ・関係機関視察)	
	平成7年3月8日～10日(3日間)			在韓被爆者関係 (医療交流の事前打合せ・関係機関視察)	
窓口調整事業	4月21日～5月11日(21日間)			チェルノブイリ事故の胎内被曝の 影響に関するWHO共同研究の ための打合せ	
	7月31日～8月5日(6日間)		(財)笹川記念保健協力財団	放射線医療(時に線量測定)の研修 意見交換	
	10月10日～16日(7日間)		日本赤十字社	日赤によるチェルノブイリ原発事故 被災者救援事業	
	10月24日～25日(2日間)		HICARE	放影研による被曝者医療研修	
	平成7年2月22日～3月7日 (14日間)			外務省NIS支援室	チェルノブイリ原発事故 日-旧ソ連共同研究 (長崎大学-甲状腺班)
				外務省欧亜局西欧第二課	バルト三国からのチェルノブイリ専門 家招聘事業(長崎大学-甲状腺班)
	平成7年3月5日～7日(3日間)			HICARE(外務省欧亜局、 NIS支援室西欧第二課)	HICAREと外務省との共同事業として の受入研修 (データ処理班、白血病班)

長大医…長崎大学医学部
原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター

放影研…(公財)放射線影響研究所
原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会

長大病院…長崎大学病院
血液センター…赤十字血液センター
成人病センター…成人

研修者	人数	受入機関
エストニア共和国医師団医師	2名	長大病院、原対協
チェルノブイリ同盟・ベラルーシ代表団ゴメリ医学・遺伝センター医長ほか	2名	長大医、原爆病院、原対協、県部長、市課長
サンパウロ日伯友好病院医師	1名	長大医、原爆病院、原対協、放影研
チェルノブイリ原発事故で被災した子供と医師団被災児	6名	長大医、長大病院、原爆病院、血液センター
小児血液調査研究医師、ロシア連邦放射能予防科学技術センター医師ほか	9名	
G.D.バナジュク(ベラルーシ)ゴメリ州立予防専門センター V.M.コバレフ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター A.S.サイコ(ウクライナ)コロステン医療診断センター E.V.クリヴィアキワ(ウクライナ)キエフ州立医療診断センター L.P.コロボコフ(ロシア)クリンシイ診断センター	5名	長大医、長大病院、原研、放影研(広島、長崎) 原爆病院、原対協、野口病院
V.E.デジルツキー(ゴメリ州立予防専門センター院長)他	11名	長大病院
ワレリー.A.オレイニク(ウクライナ内分泌研究所)他	3名	長大医、長大病院、原研、資料センター、原爆病院
ミカイロワナ.A.アルテモワ(ロシア医学アカデミー内分泌センター)他	5名	原対協
ユゲニ.M.ラストファヒン(ロシア放射線医学研究センター)他	13名	放影研
アンドレイ.コノゴロフ(オブニンスク医療放射線研究センター)	1名	放影研
リュドミラ.ヤ.ロシンスカヤ(ロシア医療科学研究所)他	3名	長大医、長大病院、原研、資料センター、放影研 原爆病院、原対協、血液センター
L.A.コトワ(ベラルーシ)ゴメリ州立予防専門センター・医師 S.M.ラフィエンコ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・医師 S.ルドニツスキー(ウクライナ)コロステン医療診断センター・医師 N.V.ニキフォロア(ウクライナ)キエフ州立医療診断センター・医師 L.A.ステイーブチン(ロシア)クリンシイ市立小児病院・医師	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 野口病院、成人病センター、はまゆう学園
呉 千根(大韓赤十字社原爆福祉事業所長)他	2名	日赤県支部、原爆病院、原研、原対協
宋 秀植(大韓赤十字社ソウル病院長)他	3名	日赤県支部、原爆病院、原研、原対協
A.E.カチャルコ(ベラルーシ)ミンスク公衆医学センター・医師 I.M.ゼルダック(ベラルーシ)ミンスク公衆医学センター・医師 L.K.ロカツフスキー(ウクライナ)ウクライナ臨床放射線神経研究所・医師 E.Y.アンチブチェク(ウクライナ)ウクライナ科学アカデミー放射線医学神経部局・医師 A.プロフスキー(ロシア)モスクワ精神保健センター・医師 V.Y.リュアブーチン(ロシア)モスクワ精神保健センター・医師	6名	長大病院、原爆病院、原対協
V.F.シェリフオフ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 I.ヴェセルキナ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 I.V.ピレンコ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 S.V.コヴァレヴァ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・線量測定担当技師 V.B.マサヤキン(ベラルーシ)ゴメリ州立予防専門センター・線量測定担当技師 A.I.コヴァレフ(ロシア)クリンシイ市立小児病院・線量測定担当技師 P.M.シミグン(ウクライナ)キエフ州立第2病院・線量測定担当技師 I.N.ソコロフスキー(ウクライナ)コロステン医療診断センター・線量測定担当技師 L.I.コドゥン(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・アドバイザー V.ボシン・イリヤ 笹川財団モスクワ事務所職員・通訳	技師 8名 アドバイ ザー 1名 通訳 1名	長崎大学アイトーブ総合センター
マリア・ジモヴェッツ(ウクライナ)キエフ内分泌代謝学研究所・医師 ガリーナ・ロモノワ(ロシア)ブリヤンスク州立医療診療センター・医師 ザボロヴスカイ(ベラルーシ)ベラルーシ国立第10病院・医師	3名	長大医、原爆病院、原研
E.K.ヴィクター(ベラルーシ)グロド州立医科大学・研究員 Y.N.ウラジミール(ロシア)ロシア保健省生物物理学研究所・研究員 E.S.イゴール(ロシア)ロシア保健省生物物理学研究所・研究員	3名	放影研
V.A.ペテルコワ(ロシア)内分泌研究所課長 E.I.マローフ(ロシア)内分泌研究所副所長 N.S.セカッチ(ベラルーシ)放射線医学研究所・研究員 E.I.コースメンコフ(ベラルーシ)放射線医学研究所・研究員 E.イゴール 通訳	研修員 等 4名 通訳 1名	長大医、長大病院、原研、資料センター、放影研 原爆病院、原対協
ヤース・ケルゲ(エストニア)聖マルダレーナ病院・医師	1名	
ニギヤン.A.アルメノヴィッチ(ロシア)他11名 (ロシア1名、ウクライナ4名、ベラルーシ2名、ラトヴィヤ2名、リトアニア2名、エストニア1名)	12名	放影研

事業区分	期間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成7年度 独自事業	7月23日～9月3日(43日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	8月7日～30日(24日間)		大韓赤十字社	在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	平成8年1月30日～3月2日 (33日間)		放影研	
窓口調整事業	7月6日～13日(8日間)		日本赤十字社	
	平成8年2月18日～24日(7日間)		外務省NIS支援室 (日-旧ソ連共同研究)(甲状腺班)	シンポジウム
	平成8年3月8日～12日(5日間)		外務省NIS支援室(日-旧ソ連共同研究) 外務省西欧第2課(データ処理班)	
	平成8年3月17日～24日(8日間)		日本赤十字社	
	平成8年3月18日～31日(14日間)		外務省NIS支援室 (日-旧ソ連共同研究)(甲状腺班)	シンポジウム
平成8年度 独自事業	7月29日～9月8日(42日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	9月2日～23日(22日間)		大韓赤十字社	在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成9年2月22日～3月16日 (23日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	5月26日～30日(5日間)	秋田ベラルーシ友好協会		長大医学部とミンスク医科大との 姉妹校締結
窓口調整事業	4月15日～20日(6日間)		(財) 笹川記念保健協力財団	原爆医療に係わる意見交換及び視察
	4月17日～19日(3日間)		HICARE	ブラジル医師研修
	7月27日～31日(5日間)		(財) 笹川記念保健協力財団 広島大学医学部	
	8月8日～23日(16日間)		(財) 笹川記念保健協力財団	
	平成9年1月27日～2月5日 (8日間)		日本赤十字社長崎県支部	日赤による受入研修

長大医…長崎大学医学部
 原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター

放影研…(公財)放射線影響研究所
 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
 原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会

長大病院…長崎大学病院
 血液センター…赤十字血液センター
 成人病センター…成人

凡例

研修者	人数	受入機関
T.Y. コロスヴェトワ(ロシア)クリンシィ市立小児病院 E.V. クルブニク(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター T. I. エヴドチョコワ(ベラルーシ)ゴメリ州立予防診断センター Y.Y. サウティン(ウクライナ)ウクライナ内分泌代謝研究所 A.V. ヤニユク(ウクライナ)ウクライナ内分泌代謝研究所	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 隈病院、成人病センター、はまゆう学園
李 昌鉉(イ・チャンヒョン)(韓国)大韓赤十字社ソウル赤十字病院	1名	長大医、原研、放影研、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム
S.A. イグムノフ(ベラルーシ)放射線医学研究所国立保健センター	1名	長大医、心身障害児療育指導センター
ラリサ、ダニロヴァ(ミンスク放射線医学センター) 他	4名	原爆病院、長大医、原研
E. チェルストヴォイ(ミンスク医科大学)他	6名	原爆病院、隈病院
ナターリア、コロル(ウクライナ)ウクライナ放射線医学研究所 他	8名	放影研、資料センター
A.A. ロマノフスキー(ミンスク州立病院) 他	4名	原爆病院、長大医、原研、原対協
A. ステプーチン(クリンシィ市立小児病院) 他	3名	長大医、原研
リンマ、ピロウコワ(ロシア)ブリヤンスク州立医療センター・医師 V. コット、アレキサンダー(ベラルーシ)ゴメリ州立予防診断センター・医師 ナターリア、クリコワ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・SE マリア、エスペンバトワ(カザフスタン) セミパラチンスク医学研究所・医師 ルミドラ、クリザロフスカヤ(ウクライナ)キエフ医学研究所・医師	5名	長大医、長大病院、原爆病院、放影研(広島・長崎) はまゆう学園
宋 秦義(ソン・テ・ウィ)(韓国)大韓赤十字社ソウル赤十字病院	1名	長大医、長大病院、原爆病院、放影研、 恵の丘長崎原爆ホーム
ナターリア、コロル(ウクライナ)ウクライナ放射線医学研究所	1名	放影研(広島・長崎)、放射線医学総合研究所
アレクセイ、クバルコ(ベラルーシ)ミンスク医科大学学長	1名	長大医
リュウミドラ、ヴォロペイ(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・医師 ナターリア、アルミキク(ベラルーシ)ゴメリ州立医療診断センター・看護婦長 スベトラーナ、シロフスドワ(ロシア)クリンシィ市立小児病院・看護婦長 ナターリア、サンドラスカヤ(ウクライナ)キエフ州立第2病院・看護婦長 オルガ、コールズン(ウクライナ)コロステン医療診断センター・看護婦長	5名	長大医、長大病院、資料センター、原爆病院、放影研 はまゆう療育園、天草慈恵病院
大久保 静香 ローザ(サンパウロ日伯援護協会・日伯友好病院)・医師 井山 さゆり エレーナ(サンパウロ日伯援護協会・日伯友好病院)・医師	2名	原爆病院、放影研、原対協
コンスタンチノフ(ロシア)サント・ペテルブルク市放射線衛生研究所・研究員 ガブリーニン(ロシア)モスクワ市放射線生物物理学研究所・研究員 グゼフ(カザフスタン)カザフ放射線医学環境研究所・所長	3名	長大医
ドルベシュキン(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・副所長 ガイデユク(ベラルーシ)モギリョフ州立医療診断センター・コンピュータ部門長 ポーシン(ロシア)笹川財団モスクワ事務所プログラムオフィサー	3名	長大医、放影研
ドロコフ(ロシア)ブリヤンスク診断処理センター・副所長 ヴォルコバ(ベラルーシ)ゴメリ放射線医学センター・医師 ピリベンコ(ウクライナ)キエフ内分泌及び代謝学研究所・医師	3名	原爆病院、長大医、長大病院

事業区分	期間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成9年度 独自事業	7月28日～9月7日(42日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	平成10年2月9日～28日(20日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	6月5日～8日(4日間)		秋田ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	6月4日～14日(11日間)	外務省		
	8月7日～10日(4日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	平成10年2月5日～3月2日 (26日間)	日本赤十字社		放射線医療の研修
	平成10年3月11日～13日 (3日間)	HICARE		放射線被曝者医療に関する研修
平成10年度 独自事業	8月3日～31日(29日間)			チェルノブイリ関係 (医師等受入研修事業)
	平成11年3月8日～19日 (12日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	8月3日～11日(9日間)		秋田ベラルーシ友好協会	ヒバクシャ医療の研修 平和祈念式典参列
	8月31日～9月2日(3日間)			ベラルーシWeeK講演会 パネラー NASHIM普及啓発事業
窓口調整事業	8月7日～10日(4日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	平成11年1月29日～2月15日 (18日間)	日本赤十字社		放射線医療の研修
平成11年度 独自事業	7月15日～8月14日(31日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	11月15日～11月30日(16日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共同事業	8月5日～8月12日(8日間)		秋田ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	5月23日～6月2日(6日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	7月15日～8月14日(31日間)			
	10月15日～10月27日(13日間)	HICARE		
	平成12年2月28日～3月3日(5日間)	放影研		

凡例	長大医…長崎大学医学部	放影研…(公財)放射線影響研究所	長大病院…長崎大学病院
	原研…長崎大学原爆後障害医療研究所	原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院	血液センター…赤十字血液センター
	資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター	原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会	成人病センター…成人

研修者	人数	受入機関
ルスラン・シシコフ(ロシア)ロシア国立ガンセンター タチアナ・ニコラエワ(ベラルーシ)ゴメリ州立予防診断センター ナターリヤ・ニキホロワ(ウクライナ)キエフ州立第2病院 ザギズベイ・デュマディロフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	4名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 成人病センター、はまゆう学園
姜 永濟(カン ヨンジョ) (韓国)大韓赤十字社ソウル赤十字病院	1名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム
イゴール・イスクロフ(ベラルーシ)ゴメリ州立病院 インナ・ブレゾーヴァヤ(ベラルーシ)ゴメリ州立病院 エレナ・ベリスカヤ(ベラルーシ)ミンスク医科大学	3名	長大医、原研、長大病院
アンチーニナ・コレスニコワ(ロシア)ロシア放射線医学研究所	1名	原研
ホリソビッチ・ゼレンケビッチ(ベラルーシ)保健大臣 ミハイロフナ・ドロビシェフスカヤ(ベラルーシ)上院議員 ニコライビッチ・グラースコフ(ベラルーシ)保健省国際課長	3名	長大医、世界平和市長会議、平和祈念式典献花
タチアナ・スエタ(ベラルーシ)医師 セルゲイ・スジヨミン(ウクライナ)医師 ウラジミール・ドロチチェンコ(ロシア)医師	3名	長大医、長大病院、放影研
鐘ヶ江・マルシア・よしえ(ブラジル)医師 三宅・テレーザ・千枝子(ブラジル)医師	2名	長大病院、原爆病院
イゴール・グセフ(ロシア)モスクワ生物物理学研究所 ルドミラ・クリザロフスカヤ(ウクライナ)キエフ医学研究所 ウラジミール・マシヤーキン(ベラルーシ)ゴメリ州立病院 ユリー・ブルグロ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	4名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 成人病センター、はまゆう学園
権 貞兒(クオン・ジョン・ア) (韓国)ソウル赤十字病院 文 昶皓(ムン・チャン・ホ) (韓国) 陝川保健所	2名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎県西彼保健所、「かめだけ」
アレクセーエブナ・グリゴリエヴァ(ベラルーシ) ミンスク医科大学 ステパノヴナ・カザケヴィチ(ベラルーシ)ゴメリ州立病院	2名	長大医、長大病院、原研
高村 昇(長崎大学医学部助手) 豆谷 耕二(長崎県原爆被爆者対策課参事) 中嶋 洋(長崎県原爆被爆者対策課係長)	3名	秋田市(秋田ベラルーシ友好協会)
アレクサンドロヴィッチ・クリセンコ(ベラルーシ共和国ゴメリ州政府保健局長) ステパノヴィッチ・ヴォロヴェイ(ゴメリ州立診断センター院長) ヴィクター・ストリージャック(笹川記念保健協力財団 モスクワ事務所)	3名	長大医、原研、8月9日平和祈念式典参加
イヴァン・ニキフォルク(ウクライナ)ロブノ地区巡回医 ウラジミール・シヴダ(ベラルーシ)プレスト地区巡回医 タチアナ・シシュミントセヴァ(ベラルーシ)ゴメリ地区巡回医	3名	長大医、原研、原爆病院、放影研、原対協
ウラジミール・サエンコ(ロシア)放射線医学研究所 エフゲニー・ザイツェフ(ロシア)医学・環境問題研究所 ジャンゲントカーン・アブライウリー(カザフスタン) 衛生学疫学研究所 スヴェトラナ・ゴマノヴァ(ベラルーシ) モギリョフ診断センター サンディー・ロック(アメリカ)ワシントン公衆衛生研究所	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 成人病センター、はまゆう学園、富士通大分ソフトウェア ラボラトリー、東北大学医学部、8月9日平和祈念式典参加
李 相禧(イ サンヒ) (韓国)ソウル赤十字病院 鄭 明淑(チョン ミョンスク) (韓国) 陝川原爆被害者福祉会館	2名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム 原爆被爆者特別養護老人ホームかめだけ
アンドレイ・スクリップスキー(ベラルーシ)国立ミンスク医科大学 ヴァレリー・ヴォイトヴィチ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院 イリーナ・グリゴルチューク(ベラルーシ)国立ミンスク医科大学	3名	原研、8月9日平和祈念式典参加
S. チェキン(ロシア)ロシア医学放射線研究所	1名	
ウラジミール・アルヒベンコ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院 ヴィクトール・ダマンツェヴィッチ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院	2名	長大医、原研、8月9日平和祈念式典参加
セリイ・V・ミロシュニチェンコ(ウクライナ) 放射線医学研究センター臨床放射線研究所	1名	長大医、原研
ニーナ・マトヴェーワ(ロシア)	1名	

事業区分	期 間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成12年度 独 自 事 業	7月17日～8月15日(30日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	12月11日～12月20日(10日間) 12月11日～12月14日(4日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共 同 事 業	8月3日～8月13日(11日間)		日本ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	4月10日～4月12日(3日間)	JICA		セミバラチンスク被曝者支援
	平成13年1月22日～1月25日 (4日間)			セミバラチンスク地域医療改善計画
	7月17日～8月15日(30日間)	(財) 笹川記念保健協力財団		
	11月14日～11月21日(8日間)	地球市民集会ナガサキ		
平成13年度 独 自 事 業	7月16日～8月12日(28日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	7月24日～8月21日(29日間)			
	11月26日～12月5日(10日間) 11月26日～11月30日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
共 同 事 業	8月3日～8月10日(8日間)		日本ベラルーシ友好協会	
窓口調整事業	7月30日～9月7日(38日間)	ティッシュバンク		
	平成14年2月1日～3月31日(59日間) 平成14年2月16日～3月17日(30日間)	学術振興財団		
	平成14年2月16日～23日(8日間)	外務省		
	平成14年2月12日～26日(15日間)	文部省		
	平成14年3月28日～4月2日 (4日間)	JICA		カザフスタン地域医療改善技術
平成14年度 独 自 事 業	7月16日～8月24日(40日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	7月16日～8月27日(43日間)			
	10月14日～10月23日(10日間) 10月14日～10月18日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成15年2月24日～3月5日 (10日間) 平成15年3月10日～3月19日 (10日間)			
	共 同 事 業	8月2日～8月10日(9日間)		日本ベラルーシ友好協会
窓口調整事業	平成15年3月28日～4月1日 (3日間)	JICA		カザフスタン地域医療改善技術

長大医…長崎大学医学部
 原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 資料センター…長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター

放影研…(公財)放射線影響研究所
 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
 原対協…(財)長崎原子爆弾被爆者対策協議会

長大病院…長崎大学病院
 血液センター…赤十字血液センター
 成人病センター…成人

研修者	人数	受入機関
エレナ、マルチェンコ(ロシア)内分泌学科学センター ウラジミール、スレツサフ(カザフスタン)カザフスタン戦争犠牲者病院 リリヤ、アラディワ(ベラルーシ)モギョロフ州立診断センター オルガ、カミーシュ(ベラルーシ)ゴメリ州立診断センター ニナ、ニローワ(ウクライナ)コロステン州立診断センター	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 成人病センター、はまゆう療育園 8月9日平和祈念式典参加
金 漢秀(キム ハンス)(韓国)統営赤十字病院 姜 再苑(カン ジェウオン)(韓国)統営赤十字病院 徐 俊錫(ソ ジュンソク)(韓国)特殊福祉事業所 白 玉淑(ベク オクスク)(韓国)特殊福祉事業所	4名	長崎県、長崎市、原研、長大病院、放影研、原爆病院 原対協、恵の丘長崎原爆ホーム 8月9日平和祈念式典参加
アンドレイ、リシク(ベラルーシ)放射線医療及び内分泌学の臨床調査研究所 ユーリア、ムハルスカヤ(ベラルーシ)ミンスク医科大学 イリーナ、アルホビック(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院	3名	原研、8月9日平和祈念式典参加
セリク、イブラエフ(カザフスタン)保健庁第一次官	1名	長大医、原研、原爆病院、原対協、長崎原爆資料館 長崎県、長崎市
ビクター、ザグランチニー(カザフスタン)東カザフスタン州保険局第一副局長 ルスラン、エンセバエフ(カザフスタン)セミパラチンスク市保健局長	2名	
イリーナ、カレフスカヤ(ロシア)ブリアンスク州立第二診断センター	1名	長大医、原研、8月9日平和祈念式典参加
トレゲン、ライリフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	1名	原研
ガリーナ、タラソフ(ロシア)オプニンスク州立放射線医学研究所 ペロニカ、アンティポア(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学国際副部長 イゴール、タラシウク(ベラルーシ)ゴメリ州立医科大学医科学・免疫学研究室長 ナタリア、グドゼンコ(ウクライナ)キエフ放射線医学研究所	4名	長大医、長大病院、原研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎市身体障害者福祉センター 九州電力長崎支店、放影研、はまゆう療育園 8月9日平和祈念式典参加
サダガット、サガンディコワ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター	1名	
許 鎮哲(ホ ジンチョル)(韓国)大韓赤十字社居昌赤十字病院 金 銀玉(キム ウンオク)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 尹 錫勳(ユン ソクフン)(韓国)大韓赤十字社特殊福祉事業所 李 丙銘(イ ビョンヨン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	4名	長崎県医師会、長崎市、長崎大学、長大医、長大病院 原研、原対協、長崎原爆資料館、原爆病院 恵の丘長崎原爆ホーム、 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、放影研
ナターリヤ、クーズニコヴァ(ベラルーシ)ゴメリ州立専門病院 ラリーサ、コズイチュ(ベラルーシ)ミンスク州立専門病院 スベトラーナ、ドゥーベン(ベラルーシ)ミンスク医科大学Collagenosis研究所	3名	原研、原対協、長崎市身体障害者福祉センター 恵の丘長崎原爆ホーム、原爆病院、放影研 九州電力長崎支店、8月9日平和祈念式典参加
スヴェトラーナ、マンコフスカヤ(ベラルーシ)甲状腺ガンセンター ナターリヤ、ベトコワ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所	2名	原研、放影研、8月9日平和祈念式典参加
ビクトル、イワノフ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 アリッサ、ダニロワ(ベラルーシ)ベラルーシ医学卒業教育研究所	2名	長大医
アレクサンダー、ネロービニャ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 ユーリ、デミチュック(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学	2名	長大医
マイラ、エスベンベトワ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	1名	長大医
アイヌール、アンロバ(カザフスタン)保健省国際協力部専門家	1名	長大医、原研、原爆病院、原対協、長崎原爆資料館 長崎県、長崎市
ドミトリー、アバケーシン(ロシア)ロシア放射線医学研究所 ナターリヤ、オルコヴィッチ(ウクライナ)ウクライナ小児病院 オレグ、ゴルベフ(ロシア)ゴメリ医科大学 スベトラーナ、アニスチェンコ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学	4名	長大医、長大病院、原研、原爆病院、原対協 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎市身体障害者福祉センター 九州電力長崎支店、はまゆう療育園 8月9日平和祈念式典参加
マリアンナ、ザグロフスカヤ(カザフスタン)第二次世界大戦記念病院 グルフィラ、エンセバエフ(カザフスタン)ポリクリニック第3病院	2名	
林 大原(イム デーウオン)(韓国)陝川郡保健所 梁 慶鎬(ヤン ギョンホ)(韓国)居昌赤十字病院 南 成子(ナン ソンジャ)(韓国)統営赤十字病院 金 容賢(キム ヨンヒョン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 金 光恵(キム グワンヘ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 朴 胤朱(パク ユンジュ)(韓国)大韓赤十字社特殊福祉事業所	6名	原研、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、長大病院 放影研、原爆病院、長崎原爆資料館
邊 聖煥(ビョン ソンファン)(韓国)ソウル赤十字病院 梁 宙鉉(ヤン ジュヒョン)(韓国)仁川赤十字病院 朴 鍾澤(パク ジョントク)(韓国)大邱赤十字病院 金 尚姫(キム サンヒ)(韓国)尚州赤十字病院 黄 必蓮(ファン ビリョン)(韓国)統営赤十字病院 裴 正淑(ペー ジョンスク)(韓国)居昌赤十字病院	6名	原研、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム、長大病院 放影研、原爆病院、長崎原爆資料館
ジュリア、クバルコ(ベラルーシ)ミンスク医科大学第9診療病院	1名	長大医、原研、放影研、九州電力長崎支店 8月9日平和祈念式典参加
サギン、カレル(カザフスタン)保健省医療部長	1名	原研、原爆病院、原対協、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、長崎県、長崎市

事業区分	期 間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成15年度 独 自 事 業	7月22日～8月26日(36日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	6月2日～11日(10日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	9月27日～10月4日(8日間) 9月27日～10月2日(6日間)			
	11月30日～12月6日(7日間) 11月30日～12月4日(5日間)			
	平成16年 2月29日～3月6日(7日間) 2月29日～3月4日(5日間)			
共 同 事 業	7月23日～8月25日(34日間)		長崎大学	
窓口調整事業	9月8日～12日(5日間)	HICARE		
	10月8日～11日(4日間)	JICA		セミパラチンスク地域医療改善計画 カザフスタン「保健行政」研修
	平成16年3月9日～15日(7日間)	放射線影響研究所		
平成16年度 独 自 事 業	7月20日～8月24日(36日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	5月30日～6月5日(7日間) 5月30日～6月3日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	10月24日～30日(7日間) 10月24日～28日(5日間)			
	平成17年 1月16日～22日(7日間) 1月16日～20日(5日間)			
	平成17年 3月6日～12日(7日間) 3月6日～10日(5日間)			
窓口調整事業	10月3日～11日(9日間)			管理職員受入研修
	10月4日～9日(6日間)	JICA		セミパラチンスク地域医療改善計画 カザフスタン「保健行政」研修
	10月18日～25日(8日間)	HICARE 放射線影響研究所		

長大医…長崎大学医学部
 放影研…(公財)放射線影響研究所
 健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター
 長大病院…長崎大学病院
 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
 追悼平和祈念館…国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
 原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 医療センター…国立病院機構長崎医療センター

研修者	人数	受入機関
ナターリア、セーレバ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 タチアナ、ドゥホータ(ウクライナ)放射線医学研究所 アリーナ、バラノシスカヤ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アベチソフ、アラム(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 アナトリー、チカノフ(カザフスタン)東カザフスタン州立病院 ジャナール、エレウバエヴァ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、玄海原子力発電所 国立病院九州がんセンター、信州大学医学部 今村産婦人科、8月9日平和祈念式典参加
南 彦廷(ナム オンジョン)(韓国)大邱赤十字病院 朴 賢珠(パク ヒュンジュ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 宋 基成(ソン ギソン)(韓国)仁川赤十字病院 姜 守漢(カン スハン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 洪 淳植(ホン スンシク)(韓国)保健福祉省	5名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、長崎県
権 永在(クオン ヨンジェ)(韓国)大邱赤十字病院 徐 相烈(ヨ サンニョル)(韓国)ソウル赤十字病院 崔 天雄(チェ チョスン)(韓国)慶熙大学医学部付属病院 洪 三烈(ホン サムニョル)(韓国)大邱赤十字病院 崔 喜貞(チェ ヒジジョン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	5名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
文 淑子(ムン スッチャ)(韓国)ソウル赤十字病院 黄 貞愛(ファン ジョンエ)(韓国)大邱赤十字病院 千 萬錫(チョン マンソック)(韓国)仁川赤十字病院 李 東洙(イ ドンス)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 永井隆祈念館、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
朴 美鶴(パク ミハク)(韓国)大邱赤十字病院 姜 美歌(カン ミギョン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 李 宗根(イ ジョングン)大韓赤十字社 金 尚裕(キム サンユ)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 永井隆祈念館、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
ガリヤ・シャイマルダノヴァ(カザフスタン)アスタナ国立病院 イリヤ・シドロフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学	2名	(チェルノブイリ・カザフスタン 関係医師等受入研修事業と同様のカリキュラム)
ナターリア、シェンテレヴァ(ロシア)放射線医学研究センター	1名	長大病院、原研、長崎原爆資料館
キディルベク・アングダグーロフ(カザフスタン)ウスチカメノゴルスク州保健局 ビクトル・チュリリョーフ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター マラート・サンディバーエフ(カザフスタン)セミパラチンスク癌センター ムフターズ・トルリュターエフ(カザフスタン)セミパラチンスクアカデミー付属病院	4名	長大学院、原研、原爆病院、健康管理センター 長崎原爆資料館、恵の丘長崎原爆ホーム、長崎県、長崎市
ニーナ・ドヴィンスキフ(ロシア)医学放射線研究所	1名	原研、原爆病院
マリナ、コーノワ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 イリーナ、ドミトレンコ(ウクライナ)放射線医学研究所 ワシーリ、ベリャコースキ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 セルゲイ、デニソフ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 パヒトジャン、イサハノフ(カザフスタン)セミパラチンスク病理診断局 ダニヤル、ムシノフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、玄海原子力発電所 信州大学医学部、8月9日平和祈念式典参加
白 種大(ベク ジョンド)(韓国)ソウル赤十字病院 韓 暉根(ハン ギョングン)(韓国)釜山報勲病院 李 相千(イ サンチョン)(韓国)ソウル赤十字病院 張 頌雅(チャン ソンア)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県、新里ネフロクリニック 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
李 東烈(イ ドンニョル)(韓国)ワレス記念浸礼病院 金 世東(キム セドン)(韓国)嶺南大学医学部 徐 貞姫(ヨ ジョンヒ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 朴 省喜(パク ソンヒ)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県、長崎森の木神経外科 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、小浜町内保健施設
金 鎮國(キム ジングック)(韓国)大邱赤十字病院 全 炯俊(チョン ヒョンジュン)(韓国)翰林大学医学部漢江聖心病院 尹 惠淑(ユン ヘースック)(韓国)ソウル赤十字病院 李 宇東(イ ウドン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、小浜町内保健施設
蔡 奎英(チェ ギュヨン)(韓国)国立慶尚大学病院 宋 俊昊(ソン ジュンホ)(韓国)尚州赤十字病院 徐 寅範(ソ インボム)(韓国)尚州赤十字病院	3名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、小浜町内保健施設
エフゲニー、ルシニコフ(ロシア)オプニンスク州立放射線医学研究所 ヴァレリー、ダニリュク(ウクライナ)ウクライナ ジトミール州北西部診断センター セルゲイ、ジャバラナク(ベラルーシ)ゴメリ医科大学	3名	笹川記念保健協力財団、原研、放影研、原爆病院 長崎原爆資料館、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ 長崎県
エングリク、カディオバ(カザフスタン)国立科学医療センター アイグル、クサイノバ(カザフスタン)東カザフスタン州保健局 グルジャン、シャヤフメトバ(カザフスタン)セミパラチンスク看護大学 サガダット、サガンディコバ(カザフスタン)JICA調整員 ガリア、ジュアスマエバ(カザフスタン)セミパラチンスク保健局	5名	原研、放影研、原爆病院、長崎原爆資料館 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ、長崎県
ヤナ、マリチュナ(ロシア)放射線医学研究センター	1名	
ナターリア、シェンテレヴァ(ロシア)放射線医学研究センター リウドウミラ、クリクノヴァ(ロシア)放射線医学研究センター	2名	長大病院、原研、長崎原爆資料館

事業区分	期 間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成17年度 独 自 事 業	7月22日～8月25日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	10月16日～22日(7日間) 10月16日～20日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	12月4日～12月10日(7日間) 12月4日～12月8日(5日間)			
	平成18年 2月19日～2月25日(7日間) 2月19日～2月23日(5日間)			
窓口調整事業	11月21日(1日間)	HICARE 放射線影響研究所		
平成18年度 独 自 事 業	7月21日～8月24日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	7月28日～8月13日(17日間)			ゴメリ医科大学研修生受入
	11月5日～11月11日(7日間) 11月5日～11月9日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	12月3日～12月9日(7日間) 12月3日～12月7日(5日間)			
	平成19年 2月25日～3月3日(7日間) 2月25日～3月1日(5日間)			
共 同 事 業	9月11日～10月11日(32日間)		エストニア・チェルノブイリ ヒバクシャ基金	
窓口調整事業	6月25日～6月30日(6日間)	放射線影響研究所		
	10月10日～10月13日(4日間)	チェルノブイリ医療基金		
平成19年度 独 自 事 業	7月23日～8月23日(32日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	10月1日～10月5日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	12月10日～12月15日(6日間)			
	平成20年 2月18日～2月23日(6日間) 2月18日～2月22日(5日間)			

長大医…長崎大学医学部
 放影研…(公財)放射線影響研究所
 健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター
 長大病院…長崎大学病院
 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
 追悼平和祈念館…国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
 原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 医療センター…国立病院機構長崎医療センター

凡例

研修者	人数	受入機関
イリナ、ゼムラーエワ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 スベトラーナ、コジュシュナヤ(ロシア)ブリヤンスク州立第二病院 イリナ、ペルチュク(ウクライナ)放射線医学研究所 エヴゲニー、ワラバエフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 フレンティナ、ドロズト(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医師研修大学 アイヌル、アキルジャノワ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 はまゆう療育園、永井隆祈念館 8月9日平和祈念式典参加
趙 承衍(チョウ スンヨン)(韓国)仁川赤十字病院 魯 昌錫(ノ チャンソク)(韓国)ソウル赤十字病院 朴 智賢(パク チヒョン)(韓国)大韓赤十字社 柳 志恣(ユ チムン)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 長崎県、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
金 殷泰(キム ウンテ)(韓国)ソウル赤十字病院 朴 大進(パク テジン)(韓国)慶尚南道陝川保健所 黄 斗燮(ファン トソプ)(韓国)ソウル赤十字病院 朴 炳熙(パク ビョンヒ)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 永井隆祈念館、長崎県、長崎市 原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
李 在鉞(リ ジェンク)(韓国)ワレス記念浸礼病院 安 謙(アン チャン)(韓国)居昌赤十字病院 元 鍾寶(ウォン ジョンボ)(韓国)大韓赤十字社 呉 尚恩(オ サンウン)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 長崎県、原爆被爆者特別養護ホームかめだけ
アンナ、P.シンカルキナ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所	1名	原研
ナターリヤ・セレヴァ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 タチアナ・メルニツカヤ(ロシア)オプニンスク州立原子力工科大学	2名	
バヴェル、ルミヤンツェフ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 スベトラーナ、ガルキナ(ウクライナ)放射線医学研究所 イリーナ、ノビカワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アンドレイ、ベスバルチュク(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 アセル、ジャンナドベコワ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学 ナリマン、ムハメッドガリエフ(カザフスタン)カザフスタンがん・放射線研究所	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、永井隆祈念館 8月9日平和祈念式典参加
ラマン、ツェツェラウ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学3年生 マリナ、ジャリョナヤ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学4年生 タチアナ、クラウチャンカ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学5年生 マリナ、イワンチカワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学6年生	4名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、信州大学病院 長野県立こども病院、8月9日平和祈念式典参加
趙 三権(チョウ サンウン)(韓国)ソウル赤十字病院 金 昌潤(キム チャンヨン)(韓国)嶺南大学病院 姜 仁俊(カン インジュン)(韓国)韓国保健福祉部 朴 貞姫(パク ジョンヒ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
李 俊相(リ ジュンサン)(韓国)ワレス記念浸礼病院 尹 汝鶴(ユン ヨハク)(韓国)セソウル内科医院 李 秉燦(リ ビュンチャン)(韓国)ソウル赤十字病院 朴 性直(パク スンジク)(韓国)大邱赤十字病院	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
金 恩那(キム ウンナ)(韓国)ソウル赤十字病院 申 東薫(シン ドンフン)(韓国)嶺南大学病院 李 南鎮(イ ナムジン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 延 順英(ヨン スンヨン)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)
ヨランタ、シルーレ(ラトビア)パウラ・ストラディナ大学病院	1名	長大病院、原研、原爆病院、放影研、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館、永井隆記念館
アミルディン、フダ(米国)カリフォルニア州立大学フレズノ校医学部	1名	原研、放影研、長崎原爆資料館、高木産婦人科
カシヤリーナ、チェルニシヨワ(ベラルーシ)モズリー市マタニティセンター	1名	長大病院、原研、放影研、恵の丘長崎原爆ホーム
ウラジミール、バーシシ(ロシア)オプニンスク放射線医学研究所 オーレクサンダー、グテビッチ(ウクライナ)コロステン地区医学診断センター アレクサンダー、コズロフスキー(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 イリーナ、シマンスカヤ(ベラルーシ)ベラルーシ卒後医学教育アカデミー アディルジャン、マサディコフ(カザフスタン)東カザフスタン州立がんセンター	5名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、医療センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 はまゆう療育園、8月9日平和祈念式典参加
金 基淑(キム キスク)(韓国)大韓赤十字社 柳 印宣(ユ インソン)(韓国)大韓赤十字社 趙 又美(チョ ウミ)(韓国)韓国保健福祉部 李 珉慶(イ ミンギョ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)
河 鐘京(ハ ジョンギョ)(韓国)ソウル赤十字病院 金 仙子(キム ソンジャ)(韓国)ソウル赤十字病院 李 太熙(イ テヒ)(韓国)ソウル赤十字病院 梁 信恵(ヤン シンヘ)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)
張 惠貞(チャン ヘギョ)(韓国)ソウル赤十字病院 羅 在範(ナ ゼボム)(韓国)慶尚大宇病院 李 閔姫(イ ミンヒ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 李 貴子(イ ギジャ)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 被爆建造物(平和公園～山里小～如己堂～浦上天主堂)

事業区分	期 間	申請団体名	共同団体	訪問目的
共 同 事 業	7月22日～8月26日(36日間)		長崎大学	
平成20年度	7月23日～8月26日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	8月1日～8月12日(12日間)			ベラルーシからの医科大学生受入研修
	平成21年 3月3日～3月30日(28日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	9月28日～10月4日(7日間) 9月28日～10月2日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成21年 1月18日～1月24日(7日間) 1月18日～1月22日(5日間)			
	平成21年度	7月25日～8月25日(32日間)		
11月8日～11月14日(7日間) 11月8日～11月12日(5日間)				在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
平成22年 2月21日～2月27日(7日間) 2月21日～2月25日(5日間)				
窓口調整事業	9月2日～9月8日(7日間)	長崎大学		
	10月5日～10月9日(5日間)	HICARE		
	11月15日～11月19日(5日間)	HICARE		

凡例 長大医…長崎大学医学部 長大病院…長崎大学病院 原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 放影研…(公財)放射線影響研究所 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院 医療センター…国立病院機構長崎医療センター
 健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター 追悼平和祈念館… 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

研修者	人数	受入機関
シュロモ, マルモー(米国)ミネソタ大学 学生	1名	(チェルノブイリ・カザフスタン関係医師等受入研修事業と同様のカリキュラム)
ゲオルギ, コワンコ(ロシア)サントペテルスブルグ卒業教育医学アカデミー オレクサンドル, ツィムバリュク(ウクライナ)マルゼエフ衛生環境医学研究所 タチアナ, レオノフ(ベラルーシ)ベラルーシ卒業医学教育アカデミー アリャクサンドル, スクラタウ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 サルタナト, ボルシィンペコワ(カザフスタン)セミパラチンスクがんセンター ユリヤ, セメノバ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
ドミトリ, ミフナベツ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学3年生 ドミトリ, ベラウサウ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学4年生 カチャリーナ, ムンデェラフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学5年生	3名	長大病院、原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 8月9日平和祈念式典参加、公開セミナー
マキシム, ルーシク(ベラルーシ)ベラルーシ卒業医学教育アカデミー	1名	長大病院、原研
姜 秉局(カン ビョングク)(韓国)ソウル赤十字病院 安 泰弘(アン テホン)(韓国)ソウル赤十字病院 崔 日薫(チェ イルブン)(韓国)ソウル内科医院 金 東洙(キム ドンス)(韓国)大韓赤十字社 徐 敏姬(ソ ミンヒ)(韓国)大韓赤十字社 李 菊子(イ グクチャ)(韓国)大邱赤十字病院	6名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、爆心地公園、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
李 美景(イ ミギョン)(韓国)ソウル赤十字病院 金 重洙(キム ジュンス)(韓国)慶熙大学校医科大学病院 金 名世(キム ミョンセ)(韓国)嶺南大学校医療院 鄭 善旭(チョン ソンウク)(韓国)陝川郡保健所 崔 鍾千(チェ ジョンチョン)(韓国)韓国保健福祉家族部 姜 在遠(カン ジェウォン)(韓国)ソウル赤十字病院総務課 諸葛 録琳(チュェガル ログリム)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館	7名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、爆心地公園、永井隆祈念館 原爆被爆者温泉保養所大和荘
アンナ, シンカルキナ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 スタニスラフ, チュマック(ウクライナ)放射線医学研究所 エレナ, グリゴレンコ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 ウォルハ, ワシルコワ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アルマ, スルタジナ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学 アヤン, ミッサエフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
宋 軀勳(ソン ジョンフン)(韓国)ソウル赤十字病院 李 承姬(イ スンヒ)(韓国)仁川赤十字病院 金 珉濠(キム ミンホ)(韓国)釜山医療院 崔 元鎔(チェ ウォンヨン)(韓国)大韓赤十字社 崔 惠善(チェ ヘンソ)(韓国)大韓赤十字社 金 江浩(キム ガンホ)(韓国)陝川郡庁	6名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
安 玟垣(アン ミンウォン)(韓国)ソウル赤十字病院 趙 顯澈(チョ ヒョンチョル)(韓国)大邱報勲病院 李 美淑(イ ミスク)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 崔 寅吉(チェ インギル)(韓国)馬山医療院	4名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
スルタン, セジュマノフ(カザフスタン)カザフ医科大学副学長 ベイビット, バシヤバエフ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 インディア, カリバエバ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 アケルケ, ジャルボロワ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 アイゲリム, コベタエバ(カザフスタン)カザフ医科大学学生 ジャンドス, ツイギノフ(カザフスタン)カザフ医科大学学生	6名	長大病院、原研、熱研、もりまちハートセンター 恵の丘長崎原爆ホーム、長崎原爆資料館
オレグ, コヴァレフ(ロシア)放射線医学研究センター リガ, ラルマネ(ラトビア)リガ・ストラディナ大学	2名	原研、放影研、長崎原爆資料館
ヨランタ, シルーレ(ラトビア)リガ・ストラディナ大学 イネス, マーティンサン(ラトビア)リガ・ストラディナ大学	2名	原研、放影研、長崎原爆資料館

事業区分	期 間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成22年度 独自事業	7月21日～8月27日(38日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	8月2日～8月12日(11日間)			ベラルーシからの医科大学生受入研 修
独自事業	11月14日～11月20日(7日間) 11月14日～11月18日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成23年 2月20日～2月26日(7日間) 2月20日～2月24日(5日間)			
平成23年度 独自事業	7月20日～8月23日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	12月18日～12月23日(6日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成24年 2月13日～2月18日(6日間) 2月13日～2月16日(4日間)			
平成24年度 独自事業	7月18日～8月21日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	9月9日～9月14日(6日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修事業)
	平成25年 2月18日～2月23日(6日間)			

長大医…長崎大学医学部
 放影研…(公財)放射線影響研究所
 健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター

長大病院…長崎大学病院
 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
 追悼平和祈念館…

原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 医療センター…国立病院機構長崎医療センター
 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

凡例

研修者	人数	受入機関
ウリヤーナ、ルミヤンツェワ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 コスタンチン、バジカ(ウクライナ)放射線医学研究所 オルガ、ビャグン(ベラルーシ)ベラルーシ卒業後医学教育アカデミー フレーリー、シトニコフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 アイムクリ、エシムハーノフ(カザフスタン)カザフスタン医科大学 マラット、スイズディクバーエフ(カザフスタン)セミパラチンスク医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
アレナ、カリスニチェンカ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 ナターリア、クリコフスカヤ(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学 タチアナ、カズローフスカヤ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 ワシーリー、ルデノク(ベラルーシ)ベラルーシ医科大学副学長	4名	長大病院、原研、原爆病院 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 8月9日平和祈念式典参加、公開セミナー
丁 恩皓(チョン ウンホ)(韓国)ソウル赤十字病院 李 宗錫(イ ジョンソク)(韓国)居昌赤十字病院 李 俊浩(イ ジュンホ)(韓国)東義医療院 吳 明恵(オ ミョンヘ)(韓国)大韓赤十字社 崔 小娘(チェ ソナン)(韓国)大韓赤十字社	5名	長大病院、原研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
李 宇鎮(イ ウジン)(韓国)ソウル赤十字病院 金 永植(キム ヨンシク)(韓国)釜山医療院 金 成春(キム ソンチュン)(韓国)慶尚大宇病院 金 辰泰(キム ジンテ)(韓国)陝川病院 金 忠洙(キム チュンス)(韓国)大韓赤十字社	5名	長大病院、原研、原爆病院、健康管理センター 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館 平和公園、如己堂、浦上天主堂、落下中心地
イリーナ、チェボタリョーヴァ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 エレーナ、フリアンスカ(ウクライナ)放射線医学研究所 ビークトル、コンドラトヴィチ(ベラルーシ)ミンスクがんセンター ウラジミール、バルトノスキー(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 エルヴィーラ、ヌドワーエヴァ(カザフスタン)カザフ医科大学 アレクセイ、パルフェーノフ(カザフスタン)セミパラチンスク診断センター	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、医療センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
鄭 泰根(チョン テウン)(韓国)嶺南大学病院 李 東建(イ ドンゴン)(韓国)釜山医療院	2名	長大病院、原研、放影研、原爆病院、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館
黄 守鉉(ファン スヒョン)(韓国)慶尚大宇病院 張 仁一(チャン インイル)(韓国)陝川郡保健所 李 東一(イ ドンイル)(韓国)陝川原爆被害者福祉会館 権 寧日(クオン ヨンイル)(韓国)大韓赤十字社	4名	長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館
アレクサンダー、メニャイロ(ロシア)オブニンスク放射線医学研究所 リュドミーラ、ズルナジー(ウクライナ)内分泌代謝研究所 アルトゥール、ピサレンカ(ベラルーシ)ミンスクがんセンター ドミートリー、ルザーノフ(ベラルーシ)ゴメリ医科大学 ベネーラ、バイスゲーロワ(カザフスタン)カザフ医科大学 ケネス、アキルジャーノフ(カザフスタン)セメイ医科大学	6名	長大医、長大病院、原研、放影研、原爆病院 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム、医療センター 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県、長崎市 8月9日平和祈念式典参加
金 泰炯(キム テヒョン)(韓国)ソウル赤十字病院 宋 時淵(ソン ション)(韓国)嶺南大学病院 高 志豪(コ ジホ)(韓国)釜山医療院	3名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県
姜 珉珪(カン ミンギョ)(韓国)嶺南大学病院	1名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県

事業区分	期 間	申請団体名	共同団体	訪問目的
平成25年度 独 自 事 業	7月17日～8月20日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	12月1日～4日(4日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修)
	平成26年 2月16日～19日(4日間)			
平成26年度 独 自 事 業	7月16日～8月19日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	10月26日～30日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修)
	平成27年 2月8日～12日(5日間)			
平成27年度 独 自 事 業	7月15日～8月18日(35日間)			チェルノブイリ・カザフスタン関係 (医師等受入研修事業)
	10月4日～8日(5日間)			在韓被爆者関係 (医師等受入研修)

長大医…長崎大学医学部
 放影研…(公財)放射線影響研究所
 健康管理センター…長崎原爆被爆者健康管理センター

長大病院…長崎大学病院
 原爆病院…日本赤十字社長崎原爆病院
 追悼平和祈念館…

原研…長崎大学原爆後障害医療研究所
 医療センター…国立病院機構長崎医療センター
 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

凡例

研修者	人数	受入機関
マカレンコ・セルゲイ(ロシア) オブニンスク放射線医学研究所 コウズーン・オレーナ(ウクライナ) ウクライナ医学アカデミー グラディシエフ・アレクサンドル(ベラルーシ) ミンスクがんセンター タパールスキー・ドミトリー(ベラルーシ) ゴメリ医科大学 タウケバーエフ・カイザール(カザフスタン) 国立カザフ医科大学 ウラザリーナ・ジャーナル(カザフスタン) セメイ医科大学	6名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 8月9日平和祈念式典参加
呉 承泳(オ スンヨン) 慶熙医療院 曹 京杓(ジョ ギョンピョ) ソウル赤十字病院 金 相沅(キム サンウオン) 嶺南大学校病院 李 在浦(イ ゼナム) 釜山医療院 韓 恵淑(ハン ヘスク) 仁川赤十字病院 朴 基鍾(パク ギジョン) 慶尚大学校病院	6名	長大病院、原爆病院、 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県
成 知錫(ソン ジソク) ソウル赤十字病院 朱 錠(ジュ ファン) 釜山医療院	2名	長大病院、原研、原爆病院、 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県
トマーノフ・コンスタンチン(ロシア) オブニンスク放射線医学研究所 イワノワ・マリア(ロシア) 北西国立医科大学 シュペルケービチ・アーラ(ベラルーシ) ベラルーシ医科大学 ウサーヴァ・ナターリア(ベラルーシ) ゴメリ医科大学 アウケーノフ・ヌラン(カザフスタン) セメイ医科大学 サヤケーノフ・ヌラン(カザフスタン) セメイ医科大学	6名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 8月9日平和祈念式典参加
趙 敏延(ジョ ミンジョン) ソウル赤十字病院 金 亨洙(キム ヒョンス) 釜山医療院 孫 珪兒(ソン ジョニア) 統營赤十字病院	3名	長大病院、原研、原爆病院、 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県
金 永贊(キム ヨンチャン) 仁川赤十字病院 太 恵珍(テ ヘジン) ソウル赤十字病院 崔 哲源(チェ チョルワン) 韓国原子力医学院 李 珍庚(イ ジンギョ) 韓国原子力医学院 趙 珉秀(チョ ミンス) 韓国原子力医学院	5名	長大病院、原研、原爆病院、 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県
プロニシュキナ・クリスティーナ(ロシア) オブニンスク放射線医学研究所 プシカロヨフ・ビクトル(ウクライナ) ウクライナ内分泌代謝研究所 ルーシク・マキシム(ベラルーシ) ベラルーシ卒業後教育医学アカデミー シブダ・ウラジミール(ベラルーシ) プレスト州立内分泌センター マナンバエワ・ズフラ(カザフスタン) セメイ医科大学 トカーエワ・アルマ(カザフスタン) セメイ医科大学	6名	長大病院、原研、原爆病院、放影研 健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県 8月9日平和祈念式典参加
金 相圭(キム サンギョ) 仁川赤十字病院 韓 相順(ハン サンスン) 慶熙医療院 崔 大鐘(チェ デジョン) ソウル赤十字病院 金 裕慶(キム ユギョ) 嶺南大学医療院 金 惠蘭(キム ヘラン) 統營赤十字病院 方 珍姫(パン ジンヒ) 忠南大学病院 朴 宣厚(パク ソンフ) 韓国原子力医学院 沈 世奐(シム セファン) 韓国原子力医学院 金 昇現(キム スンヒョン) 韓国原子力医学院	9名	長大病院、原研、放影研 恵の丘長崎原爆ホーム 長崎原爆資料館、追悼平和祈念館、長崎県

II. 派遣専門家等リスト

派遣先	派遣期間	派遣者	用務
平成7年度 ウクライナ(コロステン)	10月10日～16日 (7日間)	長崎県原爆被爆者対策課 課長/安田 實穂	●チェルノブイリ 笹川医療協力シンポジウム出席 ●5センター関係者との協議
平成8年度 ウクライナ (ウクライナ保健省)	4月21日～28日 (8日間)	長崎大学医学部 教授/奥村 寛 長崎大学医学部 講師/三根 真理子 長崎県原爆被爆者対策課 課長/木場田 勇	●チェルノブイリ原発事故10周年記念事業
ウクライナ(キエフ) フランス(パリ)	10月12日～18日 (7日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部 研究生/芦澤 潔人	専門家派遣事業 ●第5回チェルノブイリ医療国際シンポジウム ●フォローアップ調査
平成9年度 ベラルーシ共和国	6月20日～7月2日 (13日間)	長崎県原爆被爆者対策課 係長/中嶋 洋	●チェルノブイリ事故による ●甲状腺異常関連の調整会議 NASHIM事業 フォローアップ調査
カザフスタン共和国	9月22日～10月1日 (10日間)	長崎大学医学部 教授/関根 一郎	●アルマータ ミーティング
平成10年度 カザフスタン共和国	9月10日～20日 (11日間)	NASHIM 会長/井石 哲哉 副会長/池田 高良	●第2回国際放射線・環境学会参加 ●フォローアップ調査
大韓民国	8月16日～20日 (5日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎県原爆被爆者対策課 参事/豆谷 耕二 長崎市原爆被爆対策部 次長/南條 保郎	●過去3ヶ年の韓国独自受入研修 フォローアップ調査
平成11年度 カザフスタン共和国	8月24日～9月1日 (9日間)	長崎大学医学部 教授/林 邦昭 長崎市原爆被爆対策部調査課 主幹/黒川 智夫	●カザフスタン共和国からの 独自受入研修のフォローアップ調査及び セミパラチンスク核実験50周年記念行事参加
平成12年度 カザフスタン共和国	8月25日～9月5日 (12日間)	長崎大学医学部 学部長/齋藤 寛 長崎県原爆被爆者対策課 課長/松本 清助	●セミパラチンスク核実験による 被爆者支援事業についての意見交換 ●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬
大韓民国	9月17日～9月20日 (4日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部 教授/近藤 宇史 長崎県原爆被爆者対策課 参事/重村 和生 長崎市原爆被爆対策部調査課 主事/光武 恒人	●受入研修生のフォローアップ調査 ●関係医療機関等との意見交換
平成13年度 カザフスタン共和国	8月21日～9月4日 (15日間)	日本赤十字社長崎原爆病院 院長/田口 厚 長崎県原爆被爆者対策課 係長(副参事)/島村 恵美子	●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬 ●カイナー村視察及び検診
平成14年度 大韓民国	8月25日～8月27日 (3日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部附属病院原研内科 医員/本多 幸 長崎市原爆被爆対策部援護課 課長/鳥山 ふみ子	●受入研修生のフォローアップ調査 ●関係医療機関等との意見交換
カザフスタン共和国	8月27日～9月3日 (8日間)	長崎大学留学生課 専門員/青木 一郎 長崎県原爆被爆者対策課 総括課長補佐/原田 正明	●関係医療機関等との意見交換 ●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬
大韓民国	平成15年 1月16日～1月18日 (3日間)	長崎大学医学部 教授/朝長 万左男 長崎大学医学部附属病院原研内科 講師/塚崎 邦弘 長崎県原爆被爆者対策課 係長(副参事)/草場 里見	●関係医療機関等との意見交換

派遣先	派遣期間	派遣者	用務
平成15年度 カザフスタン共和国	8月26日～9月2日 (8日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授/関根一郎 財)放射線影響研究所 長崎疫学部長/陶山昭彦	<ul style="list-style-type: none"> ●関係医療機関との意見交換 ●関係医療施設の視察 ●日本大使館表敬 ●セミパラチンスク核実験場閉所記念式典
大韓民国	7月7日～10日 (4日間)	日本赤十字社長崎原爆病院 副院長/森 秀樹 長崎大学医学部・歯学部附属病院 助教授/大津留 晶 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見	<ul style="list-style-type: none"> ●韓国独自受入研修フォローアップ調査 ●関係医療機関との意見交換 (ソウル・陝川・大邱)
大韓民国	11月10日～12日 (3日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授/朝長 万左男 長崎市原爆被爆者健康管理センター 副所長/松尾 辰樹 長崎市原爆被爆対策部調査課 参事/松田 久美子	<ul style="list-style-type: none"> ●韓国独自受入研修フォローアップ調査 ●釜山市内原爆被爆者診療協定病院との医師派遣に関する協議 (統営・釜山)
大韓民国	平成16年2月24日～ 26日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 看護部長/下田 澄江 日本赤十字社長崎原爆病院 看護部長/中尾 初美 日本赤十字社長崎原爆病院 係長/中島 誠司 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見	<ul style="list-style-type: none"> ●韓国独自受入研修フォローアップ調査 ●看護に関し、関係医療機関等との意見交換 (釜山)
平成16年度 ウクライナ	8月23日～31日 (9日間)	NASHIM 会長/井石 哲哉(長崎県医師会長) 副会長/齋藤 寛(長崎大学学長) 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見 長崎市原爆被爆対策部調査課 参事/松田 久美子	<ul style="list-style-type: none"> ●ナシム研修生派遣機関の視察、管理者との意見交換 ●政府機関等の表敬訪問 ●チェルノブイリ原子力発電所視察
大韓民国	9月6日～9日 (4日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 副看護部長/小林 初子 日本赤十字社長崎原爆病院 看護副部長/江副 郷子 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見 長崎市原爆被爆者健康管理センター 次長兼看護係長/松尾 恵美子	<ul style="list-style-type: none"> ●韓国からの研修生受け入れの参考にするため、赤十字病院の事業概要の把握 ●看護師のフォローアップと看護状況視察 (ソウル・陝川・統営)
大韓民国	11月21日～24日 (4日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授/朝長 万左男 日本赤十字社長崎原爆病院 消化器科部長/古河 隆二 長崎県原爆被爆者対策課 課長/仲野 喜孝 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見	<ul style="list-style-type: none"> ●韓国からの研修生受け入れの参考にするため、赤十字病院の事業概要の把握 ●日本と韓国の被爆者医療の情報交換 (ソウル・春川・仁川)
大韓民国	平成17年2月14日～ 17日 (4日間)	NASHIM 会長/井石 哲哉 日本赤十字社長崎原爆病院 副院長/森 秀樹 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見 長崎市原爆被爆対策部調査課 課長/松本 章	<ul style="list-style-type: none"> ●韓国からの研修生受け入れの参考にするため、赤十字病院の事業概要の把握 (ソウル・大邱・尚州)
平成17年度 スイス(WHO)	9月6日～12日 (7日間)	長崎大学 医学部長/兼松隆之 日本赤十字社長崎原爆病院 院長/進藤和彦	<ul style="list-style-type: none"> ●世界保健機構(WHO)でナシム活動を紹介するポスター展開催 ●WHOと長崎大学共催による「原爆放射線の晩発性影響」をテーマとする国際セミナーへの出席
大韓民国	12月12日～14日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 助教授/大津留 晶 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 講師/中島 正洋 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見	<ul style="list-style-type: none"> ●日韓原爆被爆者セミナー開催 ●在韓被爆者が診療に訪れる病院の視察 (ソウル・大邱)

派遣先	派遣期間	派遣者	用務
大韓民国	平成18年3月1日～4日（4日間）	日本赤十字社長崎原爆病院 呼吸器科部長/福田 正明 長崎大学医歯薬学総合研究科 助手/岩永 正子 財)放射線影響研究所 研究員/今泉 美彩 長崎県原爆被爆者対策課 副参事/草場 里見	●韓国の病院の実情や被爆者の疾病発生状況と治療上の問題点の把握。 ●今後研修希望・改善点の協議 (ソウル・陝川・大邱)
平成18年度 カザフスタン共和国	5月25日～6月2日 (9日間)	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 講師/前田 茂人	●フォローアップ調査
ベラルーシ共和国	平成19年1月26日～2月4日(10日間)	NASHIM 会長/井石 哲哉	●フォローアップ調査(研修生派遣機関調査、管理者との意見交換) ●政府機関等訪問
大韓民国	平成19年1月31日～2月3日（4日間）	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/関根 一郎 助教授/難波 裕幸 長崎県原爆被爆者対策課 課長補佐/島村 恵美子 主事/福田 恵子	●専門家による被ばく者医療に関するセミナー開催 (釜山・居昌)
大韓民国	平成19年2月6日～8日（3日間）	長崎大学医歯薬学総合研究科 助教授/塚崎 邦弘 研究員/熊谷 敦史 長崎県原爆被爆者対策課 係長/山口 勇次	●韓国人被爆者が診療に訪れる医療機関への状況視察、意見交換 (馬山)
平成19年度 カザフスタン共和国	9月3日～9月10日 (8日間)	長崎大学 医学部長/河野 茂	●フォローアップ調査
大韓民国	平成20年2月13日～2月15日（3日間）	長崎大学医歯薬学総合研究科 准教授/塚崎 邦弘 長崎大学医歯薬学総合研究科 准教授/三根 真理子 長崎県原爆被爆者対策課 係長/山口 勇次	●在外被爆者への援護施策と被爆者医療についてセミナー実施 (馬山、光州)
大韓民国	平成20年3月20日～3月22日（3日間）	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留 晶 長崎大学医歯薬学総合研究科 助教/岩永 正子 長崎県原爆被爆者対策課 係長/山口 勇次	●韓国独自受入研修フォローアップ調査 (ソウル)
平成20年度 カザフスタン共和国	9月5日～9月13日 (9日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/兼松 隆之 長崎県原爆被爆者援護課 主事/福田 恵子	●関係医療施設の視察・意見交換 ●日本大使館表敬
大韓民国	9月22日～9月25日 (4日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/関根 一郎 長崎大学医歯薬学総合研究科 准教授/中尾 優子 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口 勇次	●被爆医療・看護に関するセミナー開催 (ソウル)
大韓民国	平成21年1月18日～1月21日（4日間）	長崎大学医歯薬学総合研究科 科長/朝長 万左男 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 講師/木下 裕久 長崎県原爆被爆者援護課 主事/福田 恵子	●被爆者に対する医療に関するセミナー実施 (ソウル・大邱)

派遣先	派遣期間	派遣者	用務
平成21年度 カザフスタン共和国	8月25日～9月2日 (9日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/永山 雄二 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口 勇次	●関係医療施設の視察・意見交換 ●核実験場視察 ●カザフスタン医科大学での講義 ●第5回セミバラチンスク国際会議
大韓民国	9月4日～9月8日 (5日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 助教/熊谷 敦史	●在韓被爆者健康相談事業に関するデータ集約 (陝川)
大韓民国	11月26日～11月28日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留 晶 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 大学院生/富永 信也 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口 勇次	●被爆者に対する医療に関する研修 (釜山・ソウル) ●大韓赤十字社創立104周年記念式典
大韓民国	平成22年3月4日～ 3月6日 (3日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留 晶 長崎大学医歯薬学総合研究科 (活水大学 教授)岩永 正子 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山口 勇次	●被爆者に対する医療に関する研修 (ソウル)
平成22年度 カザフスタン共和国	8月24日～9月1日 (9日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/柴田 義貞 長崎県原爆被爆者援護課 課長補佐/栗須 光子	●「セミバラチンスク核実験による健康リスク」に係る 研究打合せ・現地調査
大韓民国	10月7日～10月8日 (2日間)	長崎大学医学部・歯学部附属病院 准教授/大津留 晶 長崎県原爆被爆者援護課 主事/田添 陽子	●被爆者に対する医療に関する研修 (釜山)
平成23年度 カザフスタン共和国	8月25日～9月1日 (8日間)	NASHIM 会長/藤本 恭 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山下 素巳	●関係医療施設の視察・意見交換 ●核実験場視察
大韓民国	11月30日～12月2日 (3日間)	福島県立医科大学 教授/大津留 晶 長崎大学病院 講師/宇佐 俊郎 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山下 素巳	●被爆者に対する医療に関する研修 (大邱)
大韓民国	平成24年 2月2日～2月4日 (3日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/中島 正洋 長崎大学病院 講師/宇佐 俊郎 長崎県原爆被爆者援護 係長/山下 素巳	●被爆者に対する医療に関する研修 (慶尚南道・釜山)
平成24年度 カザフスタン共和国	8月21日～8月27日 (7日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/工藤 崇 長崎県原爆被爆者援護課 係長/山下 素巳	●関係医療施設の視察・意見交換 ●核実験場視察 ●セメイ医科大学での講義
大韓民国	12月9日～12月11日 (3日間)	長崎大学先端生命科学支援センター 教授/松田 尚樹 長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/中根 秀之 長崎県原爆被爆者援護課 主任主事/熊 由香里	●被爆者に対する医療に関する研修 (陝川)
大韓民国	平成25年 2月19日～2月21日 (3日間)	長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/宮崎 泰司 長崎県原爆被爆者援護課 主任主事/熊 由香里 長崎県原爆被爆者援護課 嘱託/郭 美子	●被爆者に対する医療に関する研修 (ソウル)

派遣先	派遣期間	派遣者	用務
平成25年度 ウクライナ共和国	6月28日～7月5日 (8日間)	NASHIM 会長/蒔本 恭 長崎県原爆被爆者援護課 係長/明石 浩之	<ul style="list-style-type: none"> ● 関係医療施設の視察・意見交換 ● ウクライナ医学アカデミーでの講演 ● チェルノブイリ、プリピャチ訪問
大韓民国	12月12日～13日 (2日間)	長崎大学 原爆後障害医療研究所 教授/高村 昇 長崎大学医歯薬学総合研究科 教授/中根 秀之 長崎県原爆被爆者援護課 係長/明石 浩之 囑託/郭 美子	<ul style="list-style-type: none"> ● 被爆者に対する医療に関するセミナー実施 (ソウル 慶熙大学、ソウル赤十字病院)
平成26年度 ベラルーシ共和国	11月24日～12月3日 (10日間)	長崎大学 原爆後障害医療研究所 教授/工藤 崇 長崎県原爆被爆者援護課 課長補佐/西 誠司	<ul style="list-style-type: none"> ● 関係医療施設の視察・意見交換 ● ゴメリ医科大学での講演 ● ベラルーシ医科大学での講演
大韓民国	12月10日～12日 (3日間)	県血液センター 顧問/関根 一郎 放射線影響研究所 放射線科長/今泉 美彩 長崎県原爆被爆者援護課 課長補佐/西 誠司 囑託/朴 智賢	<ul style="list-style-type: none"> ● 被爆者に対する医療に関するセミナー実施 (陝川 サムスン・ハプチョン病院) ● 陝川原爆被害者福祉会館訪問
平成27年度 カザフスタン共和国	8月24日～8月31日 (8日間)	NASHIM 会長/蒔本 恭 長崎県医師会 副会長/高原 晶 長崎大学 原爆後障害医療研究所 教授/林田 直美 長崎県原爆被爆者援護課 課長補佐/西 誠司	<ul style="list-style-type: none"> ● 関係医療施設の視察・意見交換 ● カザフスタン国立医科大学での講演 ● セメイ医科大学での講演 ● 県医師会とカザフスタン共和国医療会議所 東カザフスタン支部との調印
大韓民国	9月6日～7日 (2日間)	長崎大学 原爆後障害医療研究所 所長/永山 雄二 長崎大学 原爆後障害医療研究所 教授/宮崎 泰司 長崎県原爆被爆者援護課 課長補佐/西 誠司 囑託/朴 智賢	<ul style="list-style-type: none"> ● 被爆者に対する医療に関するセミナー実施 (大邱 嶺南大学病院)

医師等の受入・派遣の国別状況等

平成27年10月現在

区分 / 年度		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	計		
渡日治療	北米	米 国	2	4	4	7	4	4	4	6	4																39	
	南米	ブラジル	1	2	2	3		2	1		2																13	
		アルゼンチン				1																					1	
		ボリビア						2	1																		3	
	合計	3	6	6	11	6	6	6	6	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56		
医師等受入研修	チェルノブイリ関連	ロシア連邦		1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	27	
		ベラルーシ共和国		2	2	2	2	1	1	1	2	2	2	2	3	2	6	2	6	2	6	2	2	2	2	2	2	56
		ウクライナ		2	2	2	2	1	1		1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	26
		小計		5	5	5	5	3	3	3	4	4	4	4	7	5	8	4	8	4	8	4	4	4	4	4	4	109
	カザフスタン共和国					1	1	1	1	1	1	3	2	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	33	
	アメリカ合衆国									1																	1	
	韓国				1	1	1	2	2	4	4	12	18	15	12	12	12	13	10	10	6	4	8	8	9	164		
	独自事業計		5	5	6	7	5	6	7	9	9	19	24	24	18	22	17	23	16	20	12	10	14	14	15	307		
	放射線影響研究所				1																						1	
	ベラルーシ友好協会					1	3	2	3	3	3	1															16	
	長崎大学													2				1									3	
	エストニア・チェルノブイリヒバクシャ基金																1										1	
	共同事業計	0	0	0	1	1	3	2	3	3	3	1	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	
	笹川記念保健協力財団		11	9		11	3	3	3	1																	41	
	外務省		21	17	17		1					2															58	
	日本赤十字社	15	3	3	8	3	3	3																			38	
	WHO共同研究		1	6																							7	
	HICARE・広島大	1		3		2	2		1				1	1	1												12	
	放射線影響研究所								1				1	2	2	1											7	
	JICA等(セミパラ)									3	1	1	4	5													14	
	文部省											1															1	
	ティッシュバンク											2															2	
	学術振興財団											2															2	
	その他NGO	4									1						1										6	
	調整事業計	20	36	38	25	16	9	6	5	5	8	1	6	8	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	188	
	うち、ウクライナ	0	3	9	8	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	
	支援委員会補助事業計						1	1	1	1	2																6	
	合計	20	41	43	32	24	18	15	16	18	22	21	32	32	21	25	18	23	16	20	12	10	14	14	15	522		
	医師等派遣	ベラルーシ共和国						1									1								2		4	
		ウクライナ				1	5							4										2			12	
		カザフスタン共和国						1	2	2	2	2	2	2			1	1	2	2	2	2	2			4	29	
		韓国							3		4		6	10	12	7	7	6	6	7	2	6	6	4	4	4	94	
		スイス(WHO)														2											2	
		独自事業計	0	0	0	1	5	2	5	2	6	2	8	12	16	9	9	7	8	9	4	8	8	6	6	8	141	
		支援委員会補助事業計						1	2	2	2	2															9	
合計	0	0	0	1	5	3	7	4	8	4	8	12	16	9	9	7	8	9	4	8	8	6	6	8	150			

※渡日治療はH13より在外被爆者支援事業として実施

※渡日治療はH18より県の委託事業として実施

(2) 在外被爆者(南米・北米)渡日治療事業

長崎・広島で被爆し、その後海外に渡った被爆者で現地の医療事情や経済的な理由により十分な医療を受けられない人の中で、日本の専門医療機関での治療を望んでいる被爆者を長崎に招き、検査・治療を行う在外被爆者(南米・北米)渡日治療事業を平成4年度から平成12年度まで実施した。なお、平成14年度から在外被爆者の渡日治療事業は長崎県や長崎市が国の補助事業により実施している。

在米被爆者渡日治療者一覧表

年度	氏名	生年	日程						国名	備考
			入国	入院	退院	入院日数	出国			
平成4年度 (1992)	Y.Y	T15.	H 5	3/23	3/26	4/8	14日	4/27	米国	
	K.H(旧姓K.Y)	S 2.	H 5	3/23	3/26	4/8	14日	5/27	米国	
	3名	Y.O	S 5.	H 5	3/23	3/26	4/6	12日	11/12	ブラジル
平成5年度 (1993)	C.M	T 8.	H 5	11/14	11/16	12/8	23日	12/9	ブラジル	
	M.M	T12.	H 5	11/14	11/16	12/6	21日	12/9	ブラジル	
	A.R	S 8.	H 6	2/22	2/25	3/14	18日	3/18	米国	
	K.P	S 6.	H 6	2/22	2/25	3/11	15日	3/28	米国	
	S.R	S 2.	H 6	2/22	2/25	3/28	32日	4/12	米国	
	6名	S.K	S 9.	H 6	2/22	2/25	3/14	18日	4/12	米国
平成6年度 (1994)	N.B(旧姓N.T)	T 8.	H 7	2/21	2/23	3/15	21日	3/15	米国	
	M.B.S(旧姓M.B)	S 9.	H 7	2/21	2/23	3/10	16日	3/27	米国	
	T.J(旧姓T.T)	S 2.	H 7	3/22	3/24	5/21	59日	6/14	米国	H3渡日治療者
	H.R.R(旧姓H.R)	S12.	H 7	3/22	3/24	4/10	18日	4/31	米国	
	F.I	T 6.	H 7	3/22	3/24	5/22	60日	5/22	ブラジル	
	6名	K.M	T13.	H 7	3/22	3/24	5/22	60日	5/22	ブラジル
平成7年度 (1995)	T.O(旧姓T.K)	S 4.	H 7	7/26	7/31	8/22	23日	8/26	米国	S63渡日治療者
	S.K(旧姓S.F)	S 9.	H 7	7/26	7/31	8/21	22日	8/23	米国	H5渡日治療者

年度	氏名	生年	日程						国名	備考	
			入国	入院	退院	入院日数	出国				
平成7年度 (1995)	M.N(旧姓M.Y)	S19.	H 7	7/26	7/28	8/18	22日	8/18	ブラジル	H6渡日治療者 K.Mの娘	
	N.H	S11.	H 7	7/26	7/28	8/22	26日	9/13	ブラジル		
	Y.K(旧姓Y.M)	S19.	H 7	7/26	7/28	8/18	22日	8/18	ブラジル		
	Y.K(旧姓Y.M)	S14.	H 7	7/26	7/28	8/15	19日	8/19	アルゼンチン		
	T.T(旧姓T.M)	S 9.	H 8	3/18	3/21	4/10	21日	4/13	米国		
	A.B(旧姓A.W)	S 4.	H 8	3/18	3/21	4/11	22日	4/24	米国		
	A.H(旧姓A.N)	T10.	H 8	3/18	3/21	4/15	26日	4/15	米国		H2渡日治療者
	H.R(旧姓H.I)	S14.	H 8	3/18	3/21	4/10	21日	4/11	米国		S59渡日治療者
11名	C.H(旧姓C.H)	S 8.	H 8	3/18	3/21	4/11	22日	4/18	米国		
平成8年度 (1996)	Y.S(旧姓Y.N)	S11.	H 8	8/1	8/2	8/16	15日	8/17	米国		
	A.H	S 2.	H 9	1/22	1/24	2/7	15日	2/15	米国		
	K.M(旧姓K.S)	S 5.	H 9	1/22	1/24	2/4	12日	2/12	米国		
	M.J(旧姓M.W)	T11.	H 9	3/25	3/27	4/15	20日	4/26	米国		
	F.Y	S15.	H 9	3/25	3/27	4/11	16日	4/30	ボリビア		
	6名	S.M	S 2.	H 9	3/25	3/27	4/10	15日	4/30	ボリビア	
平成9年度 (1997)	T.I(旧姓T.H)	S 2.	H 9	6/16	6/18	7/26	39日	7/27	ブラジル		
	S.H(旧姓S.H)	S19.	H 9	10/14	10/16	11/7	23日	12/6	ブラジル		
	H.Y	S10.	H10	2/17	2/19	3/9	19日	3/18	米国		
	A.B	S11.	H10	2/17	2/19	3/24	34日	4/3	米国		
	T.T.U	S 3.	H10	3/17	3/19	3/27	9日	4/15	米国		
	6名	O.B	S 4.	H10	3/17	3/19	3/30	12日	4/2	米国	
平成10年度 (1998)	F.S(旧姓F.T)	S 3.	H10	11/10	11/12	11/24	13日	12/4	米国		
	M.P(旧姓M.Y)	S 8.	H10	11/10	11/12	11/27	16日	12/4	米国		

(3) 普及啓発事業

放射線ヒバクシャ医療に関する国際協力推進の意義と必要性を啓発するための講演会の開催や各種のPR活動及び情報提供を行っている。

これまでに以下の活動を実施した。

平成7年度

- 被爆50周年記念事業
 - ・ヒバクシャ医療国際シンポジウム 長崎シンポジウム
「ヒバクシャ医療と医科学～長崎からの提言～」
期日：平成7年9月19日 場所：ホテルニュー長崎 参加者：海外、国内の医科学者 約170名
 - ・講演会「医療と健康」
講師：東京大学医学部助教授 草間 朋子 熊本県立劇場館長 鈴木 健二
期日：平成7年11月15日 場所：ホテルニュー長崎 参加者：一般県民 約500名

平成9年度

- 講演会「チェルノブイリ支援を考える」秋田ベラルーシ友好協会と共同開催
講師：長崎大学医学部教授 山下俊一 期日：平成9年6月3日 場所：秋田市 第一会館本館
- 事業紹介パネル展 場所：長崎原爆資料館 他
- 機関誌「なしむ」の発行 創刊号・第2号

平成10年度

- 事業紹介パネル展 場所：長崎大学医学部 ポンペ会館 他
- 英文・和文パンフレット 各3,000部印刷
- 機関誌「なしむ」の発行 第3号・第4号

平成11年度

- セミパラチクス写真展 期日：8月1日～9月30日 場所：長崎原爆資料館
- 事業紹介パネル展 場所：長崎大学医学部 ポンペ会館 他
- 機関誌「なしむ」の発行 第5号・第6号
- インターネットホームページの開設

平成12年度

- 講演会「みんなで考えよう放射線被ばく～被爆地長崎から～」
講師：科学技術庁放射線医学総合研究所室長 明石 真言
期日：8月6日 場所：長崎原爆資料館ホール
- 講演会「緊急被ばく医療国際協カシステム」
期日：12月18日 場所：長崎大学医学部附属病院会議室
- 事業紹介パネル展 場所：長崎原爆資料館 他
- 機関誌「なしむ」の発行 第7号・第8号

平成13年度

- 講演会「みんなで考えよう放射線被ばく～チェルノブイリ原発事故から15年～」
講師：日本チェルノブイリ連帯基金事務局長 神谷 さだ子
期日：8月4日 場所：長崎原爆資料館ホール
- 事業紹介パネル展 場所：長崎原爆資料館 他
- 機関誌「なしむ」の発行 第9号・第10号

平成14年度

- NASHIM 創立10周年記念事業
 - ・特別講演会「永井隆博士と原爆」 講師：長崎如己の会副会長 久松 シノノ
期日：8月4日 場所：長崎原爆資料館ホール
 - ・10周年記念ビデオ制作
- 事業紹介パネル展 場所：長崎原爆資料館 他
- 機関誌「なしむ」の発行 第11号・第12号

平成 15 年度

- 公開セミナー「測ってみよう放射線」
講演：「医療と放射線」長崎大学教授 林邦昭 実演：長崎大学教授 奥村寛ほか
期日：8月3日 場所：長崎原爆資料館ホール
- チェルノブイリ・カザフスタン研修生と市民との交流会
講演：「旧ソ連での放射能汚染について」長崎大学教授 山下俊一 ほか
- 事業紹介パネル展 期日：8月3日 場所：長崎原爆資料館ホール
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月26日 場所：おくんち広場
- 機関誌「なしむ」の発行 第13号・第14号

平成 16 年度

- 講演会「放射線災害の緊急医療について考えよう」
講師：放射線災害医療研究所副所長 衣笠達也 長崎大学公衆衛生学分野助教授 高村昇
期日：7月31日 場所：長崎原爆資料館ホール
- 事業紹介パネル展 期日：7月31日 場所：長崎原爆資料館ホール
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月31日 場所：おくんち広場
- 機関誌「なしむ」の発行 第15号・第16号

平成 17 年度

- 被爆 60 周年記念事業
 - ・アニメ映画「NAGASAKI 1945 アンゼラスの鐘」上映
 - ・インターネットでのゴメリ医科大学との交流会（インターネット会議システム）
期日：平成17年9月23日 場所：長崎原爆資料館ホール 参加者：長崎、ゴメリ等 204名
- 事業紹介パネル展 期日：9月23日 場所：長崎原爆資料館ホール
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月30日 場所：出島交流会館
- 機関誌「なしむ」の発行 第17号・第18号
- 「長崎から世界へ～ヒバクシャ医療国際協力の取り組み～」外国語版作成（英語・ロシア語）

平成 18 年度

- チェルノブイリ原発事故 20 周年事業
 - ・「チェルノブイリ原発事故支援関係者による座談会」
期日：8月2日 場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 来場者：55名
 - ・「ゴメリ医科大生と市民との交流」
期日：8月5日 場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 来場者：55名
 - ・チェルノブイリ写真展（日本チェルノブイリ連帯基金と共催）
期日：7月24日～8月5日 場所：長崎原爆資料館エントランスロビー 来場者：450名/日
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月29日 場所：出島交流会館
- 機関誌「なしむ」の発行 第19号

平成 19 年度

- 出前出張講座
 - ・高尾小6年生 94名（3月7日）
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月27日 場所：出島交流会館
- 機関誌「なしむ」の発行 第20号・第21号・第22号

平成 20 年度

- 出前出張講座
 - ・西城山小5年生 74名（7月13日）
- 公開セミナー「チェルノブイリ原発事故から22年・世界のヒバクシャ」
期日：8月7日 場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 来場者：45名
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月26日 場所：出島交流会館
- 機関誌「なしむ」の発行 第23号・第24号・第25号

平成 21 年度

- 出前出張講座
 - ・滑石小5年生 64名（6月22日）
 - ・滑石中2年生 117名（6月30日）
 - ・島原一中 210名（8月9日）
- ながさき国際協力・交流フェスティバル 期日：10月25日 場所：出島交流会館
- 機関誌「なしむ」の発行 第26号・第27号・第28号

平成 22 年度

- 東京シンポジウム
 - ・講演：日本チェルノブイリ連帯基金 理事長 鎌田實
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 科長（教授） 山下俊一
期日：12月18日 場所：三菱ビル（千代田区丸の内） 参加者：180名
- ベラルーシ研修生と市民との交流会
期日：8月6日 場所：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 来場者：40名
- 出前出張講座
 - ・日見小5年生 87名（6月9日） ・西浦上小5年生 120名（6月25日）
 - ・滑石中2年生 78名（6月28日） ・滑石中2年生 94名（7月8日）
 - ・福田中3年生 94名（7月9日） ・平和案内人 40名（8月21日）
 - ・平和案内人 44名（12月14日）
 - ・青少年ピースボランティア 38名（平成23年1月15日）
- 機関誌「なしむ」の発行 第29号・第30号

平成 23 年度

- 東京シンポジウム（東日本大震災復興支援）
 - ・[第1回目] テーマ：「長崎から福島へ ～放射能の正しい理解のために～」
期日5月20日 場所：青山ダイヤモンドホール 来場者：196名
講演：長崎大学先端生命科学研究支援センター 教授 松田尚樹
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 科長（教授） 山下俊一
 - ・[第2回目] テーマ：「長崎から福島へ ～世界は放射線リスクとどう向き合うか～」
期日6月15日 場所：青山ダイヤモンドホール 来場者：184名
講演：日本総合研究所 理事長 寺島実郎
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 科長（教授） 山下俊一
 - ・[第3回目] テーマ：「長崎から福島へ ～次の世代のために～」
期日7月16日 場所：灘尾ホール（霞が関） 来場者：101名
講演：福島県立医科大 救命救急センター医師 長谷川有史
福島県立医科大 放射線科医師 宮崎真
長崎大学病院 准教授 大津留晶
- 出前出張講座
 - ・福田中2・3年生 190名（7月8日）
 - ・いわき市小中学生徒会リーダー＋市内中学生徒会リーダー 81名（8月10日）
- 事業紹介パネル展 期日：7月16日 場所：長崎原爆資料館
- 機関誌「なしむ」の発行 第31号

平成 24 年度

- ナシム設立20周年記念事業
（NASHIM 設立20周年・長崎大学原研創設50周年記念合同シンポジウム）
 - ・メインテーマ：「長崎とヒバクシャ医療」
サブテーマ：「被ばく医療学の新たな挑戦：国際貢献・そして福島」
期日：平成25年2月9日～10日 場所：ベストウエスタンプレミアホテル 参加者：277人
 - ・記念講演：福島県立医科大学副学長、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授 山下俊一
日本赤十字社長崎原爆病院 院長 朝長万左男
長崎大学名誉教授、放射線影響研究所元理事長 長瀧重信
- 出前出張講座
 - ・日本原子力研究開発機構（1回目）34名（10月20日）
 - ・ ” ”（2回目）25名（12月1日）
- 機関誌「なしむ」の発行 第32号・第33号

平成 25 年度

- 出前出張講座
 - ・平和案内人 37名（12月17日） ・為石小5年 28名（2月20日）
- 機関誌「なしむ」の発行 第34号、35号

平成 26 年度

- 出前出張講座
 - ・小ヶ倉中3年 81名（6月16日）
 - ・日本原子力研究開発機構 1回目 31名（10月25日）
 - ・日本原子力研究開発機構 2回目 32名（12月6日）
- 機関誌「なしむ」の発行 第36号、37号

平成 27 年度

- 座談会「被爆70周年とナシム」
- 出前出張講座
 - ・深堀小5年 48名（12月22日）
- 機関誌「なしむ」の発行 第38号

(4) 出版事業

チェルノブイリ関係諸国の医療従事者の教材としてロシア語の医学教科書を出版し寄贈している。また、ヒバクシャ医療や放射線についての知識普及のために、諸外国の放射能関係事故に関する図書の邦訳本、外国向けの長崎原爆関係図書の英訳本などを出版している。

これまでに以下の図書などを出版または制作してきた。

平成 7 年度

- 「放射能Q & A」(ロシア語、日本語)
- 「長崎シンポジウム：放射線と人体～長崎から提言～」(英訳)

平成 8 年度

- サイム・バルムハノフ著「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」(邦訳)
- 「カザフスタンの今」(VTR)

平成 9 年度

- L. A. イリーン著「チェルノブイリ：虚偽と真実」(邦訳)
- 「甲状腺学：基礎編」(ロシア語) ※

平成 10 年度

- 王玉鱗著「台湾の放射能汚染問題」(邦訳)
- 「長崎・ヒバクシャ医療国際協会 7 年間の歩み」

平成 11 年度

- 「甲状腺超音波診断画像解析図」(ロシア語) ※
- 永井隆著「原子爆弾救護報告」(英訳)
- 「放射能Q & A」改訂版

平成 12 年度

- L. A. イリーン監修「緊急被ばく事故時の医療対応マニュアル」CD-ROM (英訳)

平成 13 年度

- 「小児甲状腺学」(ロシア語) ※
- 「甲状腺超音波診断：疾患編」(ロシア語) ※
- 調来助著「原爆被災復興日誌」(英訳)
- L. A. イリーン監修「緊急被ばく事故時の医療対応マニュアル」CD-ROM (邦訳)

平成 14 年度

- 「長崎・ヒバクシャ医療国際協会 10 年誌」

※ 印は支援委員会の補助事業により出版

平成 15 年度

- 鎌田七男著「白血病診断図譜詳解－放射線関連白血病を含む－」
- 「長崎から世界へ～NASHIM・ヒバクシャ医療国際協力の取り組み～」(ビデオ・CD-ROM)

平成 16 年度

- ラリッサ・ダニロワ著「甲状腺疾患」
- 蒲田七男著『白血病診断図譜詳解—放射線関連白血病を含む—』CD-ROM（ロシア語）

平成 17 年度

- 秦山弘道著「Collection of Memoirs of the Atomic Bombardment of Nagasaki 1945-55」
- 調来助著「長崎ニ於ケル原子爆弾災害ノ統計的観察」（英訳）
- 「長崎原爆の医学的影響」（モンゴル語）

平成 18 年度

- 「チェルノブイリ原発事故後のロシアにおける甲状腺癌（Thyroid cancer in Russia after the Chernobyl: an analytical review）」（ロシア語）
- 「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」

平成 20 年度

- 「長崎から発信するヒバクシャ医療国際協力の歩み」

平成 22 年度

- ケシム・ボズターエフ著「人間と原子」（邦訳）（電子書籍、ナシムのホームページ上）
- 長崎新聞新書「21世紀のヒバクシャ」編著（柴田義貞責任編集）

平成 23 年度

- 「放射能Q&A」改訂版

平成 24 年度

- PDF書籍「放射能Q&A（改訂版）」

平成 25 年度

- ナシム20周年記念誌（DVD）
- 英語版医学教科書「THYROID CANCER IN UKRAINE AFTER CHERNOBYL」（ウクライナ医師用）

※ナシムの書籍は、こちらからご覧になれます

<http://www.nashim.org/jp/shuppan/index.html>

(5) 永井隆平和記念・長崎賞

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は、平成7年（1995年）、長崎原子爆弾被爆50周年にあたり、旧制長崎医科大学放射線医学教室 永井隆教授の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を広く顕彰することにより、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、「永井隆平和記念・長崎賞」を制定した。平成26年度までに10回授賞式を行い、12人の個人・団体に対して賞を贈っている。

1. 名 称

永井隆平和記念・長崎賞

2. 主 催

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

3. 対 象

原子爆弾による被爆者及び放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人又は団体に隔年毎に贈る。

4. 受賞者の選考

国内外の学者、有識者等の個人並びに大学、調査・研究機関、自治体、学会等の団体に候補者の推薦を依頼し、学識経験者で構成する選考委員会において選考し、関係各界の有識者で構成する永井隆平和記念・長崎賞委員会において決定する。

5. 授賞の方法

正賞として賞状及び賞牌（ブロンズ像）を、副賞として賞金を授与する。

〔永井隆プロフィール〕

1945年8月、長崎医科大学で原子爆弾により重傷を負いながら、被爆者の救護活動に挺身した。翌年、同大学の教授となったが、白血病に倒れ、病床で「長崎の鐘」「この子を残して」等多くの著作を発表し、祈りと平和を訴え続けた。崇高な平和希求の精神と活動は、今なお、多くの人々に感銘を与えている。

1908年2月3日	島根県松江市にて出生、翌年飯石郡飯石村（現、三刀屋町）に移住
1932年3月	長崎医科大学卒業
1932年6月	長崎医科大学助手、放射線医学専攻
1940年4月	長崎医科大学助教授・物理的療法科部長
1944年3月	医学博士
1945年6月	白血病で余命3年と診断される。
1945年8月9日	原爆被災・右側頭動脈切断し重傷を負うも救護に挺身
1946年1月	長崎医科大学教授
1946年11月	長崎医学会で「原子病と原子医学」講演
1948年3月	如己堂竣工し移り住む。
1948年10月	ヘレン・ケラー女史の御見舞いを受ける。
1949年5月	天皇陛下及びローマ教皇特使の御見舞いを受ける。
1949年12月26日	長崎市名誉市民（第1号）の称号を贈られる。
1951年5月1日	長崎大学附属病院に入院、午後9時50分逝去（43歳）
1951年5月14日	長崎市公葬、坂本町国際外人墓地に葬る。



受賞者紹介



第1回受賞者 秋月 辰一郎氏

日本。長崎市生まれ。

昭和41年「長崎原爆記」を出版し、被爆直後の浦上第一病院における被爆者医療の実態と人々の生きざまを描写して広くわが国の人々に衝撃を与えた。後に英訳され欧米の人々にも多大な感銘を与えた。

また、個々の原爆被爆者の医療にとどまらず、被爆行政や核兵器廃絶運動等にも積極的に参加している。これまで（財）長崎原子爆弾被爆者対策協議会評議委員、長崎原爆資料協議会委員、平和宣言文起草委員会委員、長崎証言の会会長、如己の会会長、（財）長崎平和推進協会理事長、核戦争防止国際医師会議長崎支部顧問等の役職に就くなど原爆関係の各方面にわたって大いに貢献した。



第2回受賞者 サイム・バルムハノフ氏

カザフスタン共和国

1957年から59年にかけて、旧ソ連軍事体制下でのセミパラチンスク核実験被害を、初めて明らかにした中心人物である。長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）や長崎大学医学部との関係も深く、NASHIMで出版された「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」は、初の邦訳本で広くセミパラチンスク問題を史実に忠実に啓蒙する最良の出版物となっている。また、1993年8月、NHKが、特別報道番組としてセミパラチンスク核問題を取り上げた際にも、最も良心的な医師として同氏が紹介されている。



第3回受賞者 ヨハネス・ヤコブ・ブローセ氏

オランダ

物理学者として放射線生物学、放射線防護学などの基礎研究に携わり、幅広い中性子測定の実験結果の報告を行っている。特に、同氏が1964年発表した中性子の酸素増感比および1971年の相対的生物効果（RBE）の研究成果は世界的に高く評価されている。同氏はその後、中性子被曝によるラットおよびアカゲザルの発癌研究をすすめ、放射線リスクの解析を行った。同氏は中性子のリスクと相対的生物効果を明確にした第一人者として高く評価され、氏の研究成果は原爆放射線とくに中性子の被爆者に与える影響を解析する上で貴重な資料となっている。



平成7年9月19日毎日新聞より



第4回受賞者 エヴゲニイ・デミチュック氏

ベラルーシ共和国

デミチュック氏は、長年の甲状腺外科医としての実績を活かし、ベラルーシ共和国唯一のがんセンターの責任者として、政治経済の混乱した医療現場で、不幸なチェルノブイリ原発事故後の激増した小児甲状腺がん患者に対して大車輪の活躍をした。特に、1990年にはベラルーシ甲状腺がん研究・診断・治療センターを設立し、患者への的確な治療改善に貢献した。また、同氏は、1992年に世界で初めて、チェルノブイリ原発事故後の小児甲状腺がんの増加を科学誌「Nature」に報告し、その後はチェルノブイリ事故後の健康影響の研究・調査に関する各種国際共同プロジェクトを担当するなど、その功績は国内外で高く評価されている。

さらに、同氏は、「術後患者へのヨード¹³¹治療」という、治療の最先端技術をミンスクに確立したことにより、高い診断結果と良い治療結果を得、多数の小児甲状腺がんの救世主として尊敬されている。



第4回受賞者 鎌田 七男氏

日本。鹿児島県生まれ。

鎌田氏は、この間一貫して原爆被爆者の研究にあたり、種々の技術的困難を乗り越え、健全な被爆者の骨髄に被爆20年を経てもなお染色体異常のあることを証明し、これは、その後の原爆治療の科学的根幹となっている。また、原爆被爆者白血病に関する研究では、分子生物学的解析を行い、原爆被爆者白血病と通常の白血病の病態の違いを明らかにし、世界レベルで優れた研究と評価されている。この研究は、原爆被爆者に多い白血病やがんは、被ばくした放射線が原因となっていることを分子レベルで証明し、原子爆弾の障害作用の起因性に関する科学的根拠となっている。

一方、社会的活動の面では、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）の日本支部会員、次いで、日本支部理事として広島での放射線障害を世界へ発信する科学者としての使命を果たしてきた。また、平成3年以降「放射線被爆者医療国際協力推進協議会」（放医協）の幹事、幹事長、会長として各種事業に指導的立場で関与し、被曝者医療、放射線障害の啓蒙に尽力してきた。

このように、同氏は、原爆被爆者の血液異常について多岐にわたる研究成果をあげると共に、常に原爆被爆者の立場から人道的な尽力を行ってきた。

第5回受賞者 日本チェルノブイリ連帯基金（理事長 鎌田 實祖氏）

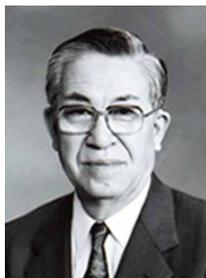


日本チェルノブイリ連帯基金
Japan Chernobyl Foundation

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は、チェルノブイリ原発事故被災地で放射能災禍に苦しむ人々を救済するために平成3年（1991年）1月に設立され、日本全国の一般市民を会員にして募金活動を行い、それらをもとにチェルノブイリ原発事故の被災地への医療支援と交流活動を続けている。これまでに、小児甲状腺疾患・白血病・肺がんの検診と治療に必要な医薬品や医療機器をミンスク、ゴメリを中心に約6億円贈っている。単に物的な支援だけではなく、頻繁な交流実績から現地医師や患者その他関係者と深い信頼関係を作り上げている。

信州大学医学部とは設立当初から協力関係にあり、科学的なデータに基づいた、的確な医療支援は現地の行政関係者や病院から高く評価されている。また、現地医療の自立・自助をサポートするために、日本への短期招聘研修を信州大学を中心に支援し、現場医療の知識と技術の向上を図っている。

さらに種々の記録映画の作成とチェルノブイリの実態広報活動にも公平な視点から貢献している。



第6回受賞者 市丸 道人氏

日本。北海道生まれ。

血液学専門の内科医・研究者として、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設教授、同施設長を務め、約40年にわたって被爆者における放射線誘発性造血器腫瘍・癌の発生率を明らかにする疫学研究やその治療法の開発研究を行ってきた。

中でも昭和25年頃から始まった白血病多発の実態を長崎において解明したことは、医学的に卓越した功績と評価されている。また原爆放射線による後障害の存在と実態を医学的・科学的に立証して多数の英文論文を世界に向けて発表し、今日世界のすべての医学書において白血病多発の事実が記述されるに至った。

また、昭和56年(1981年)、米国バージニア州エアリーで核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の第1回世界大会に招かれ参加して以来、国際評議委員として米ソ政府の指導層への原爆後障害に関する教育・啓蒙を行い、昭和60年(1985年)のIPPNWのノーベル平和賞受賞に大きく貢献した。

長崎大学退官後もIPPNWの顧問として活動し今日なお核兵器廃絶運動を続けており、世界平和にも貢献している。



第6回受賞者 横路 謙次郎氏

日本。岡山県生まれ。

広島大学原爆放射能医学研究所の病理学研究部門教授、同所長を務め、実験病理学の専門家として、50年余にわたって実験発癌の研究に取り組んだ。

特に放射線によって惹起される白血病や放射線誘発乳癌をはじめ種々の臓器癌の発癌研究を行い、我が国での放射線発癌研究の基盤を作った。さらに発癌研究はホルモンやウイルスによる発癌実験や発癌機構の解明におよび、我が国での実験発癌研究の中心的役割を果たした。

研究成果は多くの英文論文として発表され、また長年の研究をまとめた多くの著書は斯界の研究者から指導書として今なお高い評価を受けている。さらにこれらの研究成果は被ばく者医療の向上にとって大きな貢献となった。

また、社会的活動としては昭和57年(1982年)から参加した核戦争防止国際医師会議(IPPNW)での活動を中心として長年核兵器廃絶運動に取り組んでおり、世界平和にも貢献している。



第7回受賞者 アナトリー・ツィーブ氏

ロシア連邦

ソ連時代から、オブニンスク医学放射線研究所所長として、また医学アカデミー会員として放射線安全防護と放射線医療推進の中心的な役割を担っている。

1986年チェルノブイリ原発事故直後から被災者の救助支援活動において指導的役割を果たし、環境放射能汚染の測定から集団被ばく線量の推定、住民健康診断など膨大な被災者の登録と健康診断データベースの構築を行い、特に事故直後から1年間にわたり事故処理作業や除染作業に従事した比較的高線量被ばくの軍人や消防士など24万人の登録と長期追跡調査活動を継続して行っている。

1991年5月以降はチェルノブイリ笹川プロジェクト、WHOチェルノブイリ医療支援協力プロジェクトのロシア代表、国際機関や日本からの医療協力や学術共同研究の代表責任者として活躍している。WHOやIAEA等国際機関における緊急被ばく医療プログラムの中ではロシア代表であり、ロシア放射線安全防護委員会の長を務めている。



第8回受賞者 クリストフ・ライナー氏

ドイツ連邦共和国

ライナー教授はドイツで最も古い大学のひとつであるビュルツブルグ大学医学部を卒業後、一貫して核医学を専攻し、放射線の医療応用、特にアイソトープ（放射性同位元素）を用いた診断と治療に貢献され、レントゲン博士の後継教授でもある。

1986年4月26日チェルノブイリ原発事故が起こり、エッセン大学核医学教授時代には核医学の第一人者として欧州からの医療協力の指導的役割を果たし、1992年からは最も被害が甚大なベラルーシで人道主義的共同研究プロジェクトを開始し、現在まで多大の貢献をしている。

功績のひとつは、ベラルーシでの甲状腺疾患診断のための三次元超音波診断法を確立し、甲状腺癌の早期診断と再発診断に大きく貢献し、放射線誘発甲状腺癌の臨床治療に関する多くの学術業績をあげた。また、ミンスクのドロズド教授らと共同で甲状腺腫瘍の超音波スクリーニング方法を開発した。

その後、母校ビュルツブルグ大学核医学教室主任教授として、ミンスク甲状腺癌センターにアイソトープ診断と治療のための核医学治療部門を創立し、同様な核医学部門をウクライナのキエフ内分泌研究所にも立ち上げ、多発している甲状腺癌の治療成績向上に大きく貢献した。

また、1992年から、ベラルーシで再発転移を繰り返す247名の重症小児甲状腺癌患者をドイツに招き、子供たちへの医療支援を行い大きな成果を上げ、ベラルーシ大統領からフランシスカ・スカリナ勲章を授与された



第9回受賞者 ミコラ・トロンコ氏

ウクライナ

ミコラ・トロンコ氏は、チェルノブイリ事故が発生する一か月前の1986年3月にウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長に就任。以降、一貫してチェルノブイリ事故による住民の甲状腺への影響に関する調査、検診事業に携わり、1995年にはウクライナにおいて小児甲状腺がんが増加していることをNature誌に報告し、世界的な注目を浴びた。

さらには国際共同研究を推進することによってチェルノブイリ事故によって激増した甲状腺がんにおいて、Ret遺伝子の再配列という遺伝子異常が高頻度にみられることを世界に先駆けて報告するなど、放射線誘発性甲状腺がんの疫学、分子生物学的研究をリードしてきた。

また、種々の国際プロジェクトにも長年積極的に参画し、WHO（世界保健機関）の国際チェルノブイリ甲状腺組織バンクプロジェクトにおいても、ウクライナの代表機関として放射線誘発甲状腺がんの摘出標本の管理にあたっている



第10回受賞者 丹羽 太貫氏

日本

丹羽太貫氏は京都大学卒業後、放射線生物学研究者として活躍し、昭和59年に広島大学原爆放射能医学研究所の助教授として赴任中に原爆被爆者の健康影響、特に放射線発がん機構に着目し、種々の研究業績を挙げている。

平成9年京都大学放射線生物学研究センターの教授に異動後も放射線影響研究の第一人者として国内学会を牽引し、多くの研究業績を挙げている。

また日本放射線影響学会会長や国際放射線防護委員会(ICRP)第一委員会委員、国際放射線研究連合(IARR)会長や国際放射線防護委員会(ICRP)主要委員会委員などの重職を歴任され、国際的にも高い評価を得ている。

現在は福島県立医科大学の国際連携部門へ特命教授として招聘され、福島地域と国際社会を結ぶ中心の人物として福島県民のために献身的にご努力を続けられ、多くの方々からの感謝と尊敬の念を集められおり、永井隆博士の承継者として最も相応しい。

(6) 支援委員会補助事業

外務省の関連団体 支援委員会の事業の一つである非 ODA 対象 NIS 諸国支援関係民間公益団体補助事業は、旧ソ連邦から独立した 12 カ国のうち、ODA の対象となっていないロシア連邦とベラルーシ共和国に対する人道支援や市場経済への移行支援を目的として、本邦における民間公益団体がこの 2 カ国において行う支援事業に要する経費の一部を補助するもので、平成 8 年度から平成 13 年度まで実施された。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は、平成 9 年度から平成 13 年度まで毎年この補助事業の援助を受け、着実な成果を挙げてきた。特に、ロシア語の医学教科書出版や診断用機材の供与及び技術指導などは、チェルノブイリ原発事故被災者の支援に直結するものであり、これらの成果はその後のフォローアップ事業で当協力が派遣した日本人専門家により、現場でしっかり根付いていることが確認されている。

これまでに支援委員会から補助を受けて実施してきた事業の成果は次のとおりである。

①平成 9 年度事業

「甲状腺学：基礎編 (Thyroidology: Fundamental Aspect)」のロシア語出版

NASHIM にとって最初の補助事業であり、検討を重ねた結果、現地医療関係者の育成と教育を目的としたロシア語版の医学書作成を開始した。1997 年から長崎大学の姉妹校であり、ベラルーシ共和国の医師の人材育成の中心的存在であるミンスク医科大学（現ベラルーシ医科大学）と連携し、長崎大学の専門家が共同でロシア語版教科書の執筆にあたり、事業予算での出版を行った。本書は、旧ソ連邦の崩壊後、ロシア語で書かれた初めての甲状腺学の教科書として注目を集め、出版後は 1000 部がベラルーシの医学生、医師に無料で配布された。

②平成 10 年度事業

「ロシア連邦アルタイ州におけるヒバクシャ実態調査支援」

本事業は、チェルノブイリ支援事業とは異なり、旧ソ連邦最大の核実験場が存在したカザフスタン共和国セミパラチンスク核実験場に隣接するロシア連邦アルタイ州における放射線被害の実態調査を目的とするものであった。カザフスタンとロシアとの国境に位置するアルタイ地域の被ばくの実態については、従来ほとんど明らかになっておらず、日本からの現地視察は初めてであった。携帯型甲状腺超音波装置の供与によって現地ヒバクシャの検診活動に貢献し、主に線量領域における専門家交流が行われた。

③平成 11 年度事業

「ミンスク医科大学におけるインターネットライブラリーの構築支援」

平成 9 年度事業の教科書出版以来、医学教育に対する現地のニーズは非常に高まり、同時にこの時期飛躍的な進歩を遂げてきた IT 技術の融合による新しい形での教育システムの構築が注目されてきた。この状況を踏まえ、本事業ではベラルーシ共和国のミンスク医科大学（現ベラルーシ医科大学）と共同で、電子図書創設の為にコンピュータ関連機材を寄贈し、現地のソフト開発や教材作成に貢献した。この先鞭事業がその後の WHO による IT 活用による遠隔医療・医学教育支援プログラムへと引き継がれ、ベラルーシをモデル国として放射線関連 IT 事業が始まった。

④平成 12 年度事業

「ロシア連邦におけるヨード欠乏の実態調査」

チェルノブイリ事故後の急激な小児甲状腺がんの増加の一因として、ヨード不足や事故直後の不適切なヨード剤の服用があげられている。もともとチェルノブイリ周辺地区はヨード欠乏地域であったが、旧ソ連邦時代にはデータが公表されておらず、その把握は困難であった。当時その実態が部分的に明らかになっていたが、日常からの適切なヨード摂取も含めて、克服すべき課題は多く、そのためにも簡便な尿中ヨードの測定技術は不可欠であった。以上のような観点から、本事業では簡便に尿中ヨードが測定できる機材をモスクワ内分泌研究所に寄贈し、測定についての研修を行って現地専門家のレベルアップを図った。

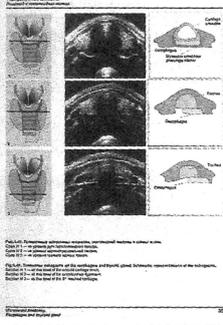
⑤平成 13 年度事業

「小児甲状腺学」のロシア語教科書出版

平成 9 年度の「甲状腺学：基礎編」のロシア語教科書出版のいわば続編とも言うべきもので、チェルノブイリ原発事故後の最大の課題である小児甲状腺がんに焦点をあて、その医学知識の現地医療スタッフへの啓蒙、ひいては専門家の育成を目的として 1000 部が出版された。前回に引き続き、長崎大学とベラルーシ医学大学のスタッフが執筆・編集にあたったほか、アメリカ・ピッツバーグ大学からも執筆陣が加わり、さらにレベルの高いものとなった。内容としては、甲状腺の解剖、発生から生理などの基礎的分野から、診断、治療といった臨床的内容、さらには遺伝子レベルでの最新の知見も盛り込んだ内容となり、ロシア語の教科書としては画期的な内容となった。前刊に引き続き、ベラルーシ共和国の医学生、医師に無料で配布されたほか、ウクライナ、ロシア、カザフスタンの医師にも配布され、現地での医学教育に大きく貢献している。

さらに本事業では、この「小児甲状腺学」の補完的内容として、「甲状腺超音波診断：疾患編」をロシア連邦オブニンスク放射線医学研究所との共同で 1000 部出版した。これによって、甲状腺の基礎分野から現場サイドまでの幅広い分野について、最新の知見をロシア語で提供することが可能になった。

旧ソ連の小児被ばく者治療支援



長崎・ヒバクシャ医療国際協会

核実験などで苦しむ旧ソ連の被ばく者治療支援しようと、長崎・ヒバクシャ医療国際協会（NASHIM）は、小児甲状腺がんの診断方法をまとめたテキスト「小児甲状腺がんの超音波診断—チェルノブイリの経験から」を出版した。ロシア・オブニンスク放射線医学研究所のウジミール・パーシン教授と山下俊一・長崎大学医学部教授の共著。山下俊一教授は「子どもの甲状腺がん

「甲状腺がん」 診断書出版

小児甲状腺がんの診断方法を詳しく解説するテキストの一部

露語・英語併記

ロシアなどに1000部贈る

甲状腺がんは、十八歳までの子どもでは、通常百万人に一人の割合で発生するとされるが、山下教授によると、チェルノブイリ原発に近いベラルーシ・ゴメリ州では九二—二〇〇〇年の間、五十八歳で発生したという。

山下教授は「子どもの甲状腺がんは発生率が低いこともあって、あまり研究がされていなかった。テキストは診断技術の向上に貢献できると思

九九年、被爆者治療で先進的な長崎大学医学部に客員教授として招かれ、山下教授と甲状腺がんの診断について研究を行った。

テキストはこの研究成果をまとめた。A4判二百三十ページで、パーシン教授が超音波診断機器や顕微鏡などで撮影した患部の写真、図など約千枚を使って、さまざまな症例について詳しく説明している。旧ソ連で実施された核実験による被ばく者治療にあたる医師らを支援するため、ロシア語と英語を併記。これまでに約千部がロシアなどの医療機関に配布された。

平成14年8月7日読売新聞より

90

受賞歴

《 第 52 回保健文化賞授賞 》

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は「ヒバクシャ医療に関する国際的な貢献」を高く評価され、平成 12 年に保健衛生の分野で、わが国において権威ある賞として世に認められている「保健文化賞」を授賞した。この賞は第一生命保険相互会社が主催し、厚生省、朝日新聞厚生文化事業団、NHK 厚生文化事業団が後援するもので保健衛生を実際に著しく向上させた団体や個人、保健衛生の向上に著しく寄与する研究又は発見をした団体や個人が対象で、日本国内に限らず、国外における活動も授賞の対象とされている。

当協力会は、チェルノブイリ原発事故や旧ソ連の行った核実験、広島・長崎への原子爆弾投下などによる放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者の研修受け入れや、南米・北米・韓国などに住むヒバクシャの渡日事業に取り組んだり、ロシア語の医学教科書の出版・寄贈などを行っており、これらの事業を通じて国際的貢献を行ったことが高く評価され、今回の授賞となった。

また、同賞の副賞の使途としては、外国からの研修生・研究者に対する放射線物理学や放射線障害医療の基礎的、臨床的知識の向上を目的に行われる実習、講義、セミナーなどに利用するための設備購入にあてることが、最も同賞の趣旨・目的に添うものと判断され、長崎大学医学部附属原爆後障害医療研究施設（原研）や日本赤十字社長崎原爆病院の研修室・講義室などに、液晶プロジェクターなど視聴覚教育設備や実習用機材を設置した。



平成 12 年度第 52 回保健文化賞贈呈式 (H12.10.18 ホテルオークラ)

《 外務大臣表彰 》

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会は、平成 18 年 7 月 10 日、外務省において、平成 18 年度外務大臣表彰を受賞した。

外務大臣表彰は、「わが国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている多くの個人・団体の中から、特に顕著な功績のあった個人および団体」へ贈られるもので、当会の受賞理由は、「わが国と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をしている。」「チェルノブイリを始め、世界各国から関係者を招聘している。加えて、長崎が有する特性であるヒバクシャ医療の治療、研究成果を国際的に普及している。」「今年チェルノブイリ原発事故から 20 年であることから、こうまでの貢献に対し功績をたたえると共に今後の国際協力を期待したい。」というもので、当会のこれまでの功績が高く評価されての受賞であった。



平成 18 年度 外務大臣表彰 (H18.7.10 外務省)

関係資料

長崎・ヒバクシャ医療国際協会規約

(名称及び目的)

第1条 在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故等による被曝者の救済のため、長崎が有する被爆者治療の実績及び調査研究の成果を活用し、もって国際協力に寄与することを目的として長崎・ヒバクシャ医療国際協会（以下「協力会」という。）を設置する。

(事業)

第2条 協力会は、前条の目的を達成するため、次の事業及び事務を実施する。

- (1) 国外からの医師等の研修受入
- (2) 国外への医師等の派遣
- (3) ヒバクシャ医療に関するデータの収集・分析及び提供体制の整備
- (4) その他ヒバクシャ医療における国際協力を推進するために必要な事業
- (5) 前各号における連絡調整事務

(理事会)

第3条 この協力会の意思決定機関として理事会を置く。

2 理事会は、次に掲げる理事で構成する。

- (1) 一般社団法人長崎県医師会長
- (2) 一般社団法人長崎市医師会長
- (3) 長崎大学長
- (4) 長崎大学医学部長
- (5) 長崎大学病院長
- (6) 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長
- (7) 長崎大学原爆後障害医療研究所長
- (8) 日本赤十字社長崎原爆病院長
- (9) 公益財団法人放射線影響研究所業務執行理事
- (10) 公益財団法人長崎原子爆弾被爆者対策協議理事長
- (11) 公益財団法人長崎平和推進協会理事長
- (12) 運営委員会運営部会長
- (13) 長崎県福祉保健部長
- (14) 長崎市市民局原爆被爆対策部長

3 理事会は、理事の互選により、会長1名及び副会長1名を選出する。

4 会長は、この協力会を代表し、会務を統括する。

5 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

6 理事会は、会長が招集し、本規約の制定及び改正並びに会長及び理事の過半数による提案案件を審議し決定する。

7 会長が必要と認めるときは、第2項に掲げる者以外の者を理事に選任することができる。

(事務局)

第4条 協力会に事務局を置く。

- 2 事務局は、長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課に置く。
- 3 事務局長は、長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課長、事務局次長は長崎市市民局原爆被爆対策部調査課長を充てる。

(運営委員会)

第5条 この協力会に、理事会の補佐機関として運営委員会を置く。

- 2 運営委員会は、理事がその所属する機関の職員の中から指名した委員及び事務局長並びに事務局次長で構成する。
- 3 運営委員会は、事務局長が必要に応じ招集する。
- 4 運営委員会は、調整部会及び運営部会で構成する。
- 5 調整部会は、協力会の事業執行に伴う連絡・調整等を行う。
- 6 運営部会は、協力会の事業計画の立案及び事業の執行を行う。

(会計)

第6条 協力会の事業及び事務に要する経費は、長崎県及び長崎市の負担金及び委託金並びにその他の寄付金をもって充てる。

- 2 協力会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 3 協力会の会計を監査するために会計監事2名を置く。
- 4 会計監事は、長崎県原爆被爆者援護課総括課長補佐及び長崎市市民局原爆被爆対策部援護課長とする。

(雑則)

第7条 この規約に定めるもののほか、協力会の運営について必要な事項は、運営委員会に諮って定める。

(附則)

- この規約は、平成4年4月1日から施行する。
- この規約は、平成5年4月15日から施行する。
- この規約は、平成8年10月3日から施行する。
- この規約は、平成10年4月1日から施行する。
- この規約は、平成11年4月1日から施行する。
- この規約は、平成13年4月1日から施行する。
- この規約は、平成18年4月1日から施行する。
- この規約は、平成20年4月1日から施行する。
- この規約は、平成25年4月1日から施行する。
- この規約は、平成25年4月3日から施行する。

チェルノブイリ関係（医師等受入研修事業）



平成6年度



平成6年度



平成6年度



平成11年度

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録



平成12年度



平成12年度



平成12年度



平成12年度



平成14年度



平成14年度



平成14年度



平成14年度



平成14年度



平成15年度

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録



平成15年度



平成15年度



平成17年度



平成18年度



平成18年度



平成19年度



平成19年度



平成20年度



平成20年度



平成21年度

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協会活動の記録



平成22年度



平成22年度



平成23年度



平成23年度



平成24年度



平成25年度



平成25年度



平成26年度



平成26年度



平成27年度



平成27年度

在韓被爆者関係（医師等受入研修事業）



平成11年度



平成11年度



平成12年度



平成14年度



平成15年度



平成16年度



平成17年度



平成18年度



平成19年度

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協会活動の記録



平成19年度



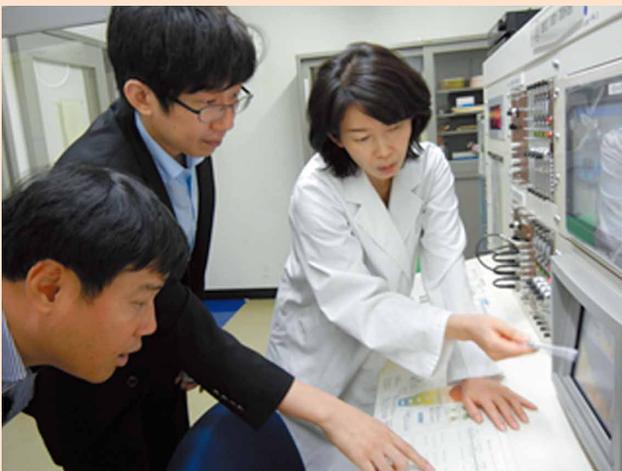
平成21年度



平成23年度



平成21年度



平成24年度



平成24年度



平成25年度



平成25年度



平成26年度



平成26年度



平成27年度



平成27年度

専門家等派遣事業



平成9年度 ベラルーシ共和国



平成9年度 ベラルーシ共和国



平成12年度 カザフスタン共和国



平成13年度 カザフスタン共和国



平成13年度 カザフスタン共和国



平成13年度 カザフスタン共和国



平成14年度 カザフスタン共和国



平成16年度 ウクライナ



平成18年度 ベラルーシ共和国



平成18年度 ベラルーシ共和国

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録



平成20年度 カザフスタン共和国



平成20年度 カザフスタン共和国



平成21年度 カザフスタン共和国



平成23年度 カザフスタン共和国



平成23年度 カザフスタン共和国



平成24年度 カザフスタン共和国



平成24年度 カザフスタン共和国



平成24年度 カザフスタン共和国



平成24年度 カザフスタン共和国

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録



平成25年度



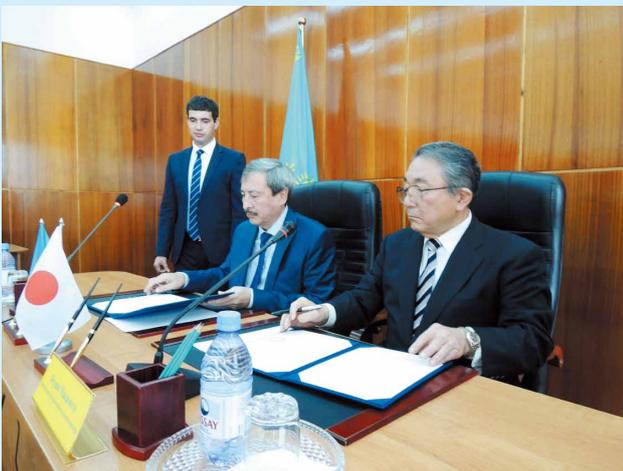
平成25年度



平成26年度



平成26年度



平成27年度



平成27年度

在韓被爆者関係（専門家派遣事業）



平成12年度 陝川原爆被害者会館訪問



平成16年度 陝川原爆被害者福祉会館訪問



平成18年度



平成19年度



平成20年度

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録



平成20年度



平成21年度



平成21年度



平成23年度



平成24年度



平成25年度



平成25年度



平成26年度



平成26年度



平成27年度



平成27年度

普及啓発・その他



被爆50周年国際シンポジウム「ヒバクシャ医療と医科学」
～長崎からの提言（平成7年度）



普及啓発事業（平成8年度）



チェルノブイリ・カザフ管理職員JICA研修員受入研修（平成16年度）



駐日ウクライナ大使長崎訪問（平成16年度）



ベラルーシ・ゴメリ医科大学大学生研修受入（平成19年度）



エストニア・チェルノブイリヒバクシャ基金（平成20年度）



出前講座 滑石小学校（平成21年度）



ながさき国際協力・交流フェスティバル（平成21年度）



ベラルーシ・ゴメリ医科大学大学生受入（平成22年度）

6. 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会活動の記録



東京シンポジウム（平成22年度）



出前講座 福島県いわき市（平成23年度）



東京シンポジウム（平成23年度）



東京シンポジウム（平成23年度）



駐日カザフスタン大使表敬訪問（平成23年度）



出前講座 平和案内人 (平成25年度)



出前講座 為石小学校 (平成25年度)



出前講座 為石小学校 (平成25年度)



出前講座 小ヶ倉中学校 (平成26年度)



出前講座 日本原子力研究開発機構 (平成26年度)



出前講座 日本原子力研究開発機構 (平成26年度)

永井隆平和記念・長崎賞



第1回受賞（平成7年度） 永井夫人、代理出席



第2回受賞（平成9年度）



第3回受賞（平成11年度）



第4回受賞（平成13年度）



第5回受賞（平成15年度）



第6回受賞（平成17年度）



第7回受賞（平成19年度）



第8回受賞（平成21年度）



第9回受賞（平成24年度）



第10回受賞（平成26年度）





長崎・ヒバクシャ医療国際協力会

〒850-8570
長崎市江戸町2-13 (長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課内)
TEL: (095) 895-2475
FAX: (095) 895-2578

NAGASAKI ASSOCIATION FOR HIBAKUSHAS' MEDICAL CARE (NASHIM)

ATOMIC BOMB SURVIVORS' SUPPORT DIVISION
HEALTH AND WELFARE DEPARTMENT
NAGASAKI PREFECTURAL GOVERNMENT
2-13 EDO-MACHI, NAGASAKI CITY, 850-8570 JAPAN
TEL: (+81)95-895-2475 FAX (+81)95-895-2578
<http://www.nashim.org/>
E-Mail: n_admin@nashim.org

発行 2015年12月



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会